FINAL FANTASY

CRYSTAL CHRONICLES

Ring of Fates

ファイナルファンタジー・クリスタルクロニクル リング・オブ・フェイト

僕らの世界 上

工藤 治
KUDO OSAMU

SPECIAL STORY
ファミ通文庫

FINAL FANTASY
CRYSTAL CHRONICLES
Ring of Fates

ファイナルファンタジー・クリスタルクロニクル リング・オブ・フェイト

僕らの世界 上

工藤 治
KUDO OSAMU

Yuri & Chetinka

Aleria & Latob

ファイナルファンタジー・クリスタルクロニクル
リング・オブ・フェイト

僕らの世界 上

工藤 治

ファミ通文庫

本文・口絵イラスト　イノコ

目次

序　章……5
第一章　まだ幼き希望……15
第二章　囚われの母……85
第三章　父の死……173
第四章　チェリンカの復活……225
あとがき……277

序章

深淵の闇が広がる中で、少女はよみがえりつつあった。
といっても、それは完全なる復活ではない。
あれだけの力を使ったあとなのだ——おそらく神は、わたしにその罪を贖えと命じられたのだろう——。
受け入れるしかなかった。
無の世界に浮かぶ少女は、ここが与えられた裁きの場所なのだと悟る。
音もなく、光もなく、ただ漆黒に染まっただけの空間だった。
少女はここで、これからの永遠をすごすのである。
当然の報いなのだろう。
罪深いことをしたと思う……。
たとえそれが自分の意志ではなかったとしても、みずからの力が招いた結果であることには変わりない。
少女には、もはやそれを懺悔する資格もなかった。
この『無の世界』で永久に眠ることさえ許されず、いつしか心が枯れても、果てない時間を漂いつづけるだけ。
すべてを剝奪され、闇に縛られること——。
それが、みずからに科せられた贖罪なのだ。

ほんとうは彼女自身も、被害者のひとりであったとしても……。

思いかえせば、それは一瞬のことだった。

クリスタルに閉じこめられ、自由を奪われ、あの男に力を吸いとられはじめた。拒めば拒むほど、あの男は略奪のための威力を高めてくる。

下卑たその嗤いに、彼女の意志は屈していくだけ。

もう、どうにもならなかった。

やがて少女の中でしっかりと閉じられていた扉の鍵が壊され、こじ開けられたその中からは信じられない量の光の粒が、血のように飛び出す。

それが崩壊のはじまり――。

外に流出した力は驚くべき量で、とても少女の手に負えるものではなかった。彼女の意に反してそれらは宙を舞い、そして猛り狂いはじめる。

影響は、彼女がいる施設全体に及んだ。

最悪だったのは、施設を稼働させるために設置されていた蒼き色のクリスタルまでもが感化され、共鳴運動をはじめたことである。

運悪く、施設は豪雨による水害を堰き止めようと全力で稼働中で、その限界を超えつつあったのも禍を招く引き金のひとつとなった。

力は混ざり合い、激しさを増す。
これにより、施設は建物の形を維持できなくなった。壁はゆがんで裂け、そこから堰き止められていたはずの雨水が大量に放出されて、たくさんの人と設備を無に帰すかのように砕きながら何もかも一気に呑みこむ。
その勢いは誰にも止められない。
圧倒的な破壊力の前に、人はなす術を失っていた。倒壊する建物の中で多くの人命が奪われていった……。
そのときの少女は、そばにいた三人の命を救うことで精一杯だった。
信頼のおける男女と、自分を苦しめた悪辣な男。
彼らの生死を選別する権利などない。
その三人を安全な場所に瞬間移動させる力を使うことだけが——最後に許された彼女の選択であった。
いや、それしか彼女に使える力は残されていなかったと言っていい。
力の発動を見届けたのち、少女は消滅する——。

そしていま、自分の鼓動さえ響かない漆黒の世界に漂っている。
もう何も未練はない。

この闇も、嫌わないにしよう。
永いつき合いになるのは、まちがいないのだから……。
少女は受け入れるべき――〝封印された世界〟に、心をゆだねようとした。
そして自身も、無になろうと決意したときである。

――何か、きこえる――。

ふいに、少女の心がゆれた。闇の彼方から、ふひゃーん、ふひゃーんと、おかしな音が響いてきたのだ。
泣いてる？　だれかが泣いてる――。
少女は、まさかと思った。音という存在さえ否定されたこの闇に、これほどはっきり聴こえる声が届くとは――。
信じがたい現象だったが、
〝赤ちゃんの泣き声？〟
と、予想はしだいに確信に近づいていく。
ふたたび心がゆれる。理由がわかってきた。
――これは、自分と同じような子供が産まれた瞬間なのだ。

同じ性質をもつ者にしか得られない共鳴が、それを教えてくれる。
ふたりいる——男の子と女の子が、いっしょに泣いてる。
少女はその声を聴き分けた。
同時にわきあがる想い。
ふたりの子供たちのそばに行きたい——。
その顔をじっくり見てみたい……。
願ってはいけないとわかっていながら求めてしまう。
叶えられることのない願いはいつまでも募り、とても耐えることができない。
自分の置かれた不自由な状況が憎らしいとさえ思えた、そのとき——
突然、少女の前に強烈な光があらわれた。
——見えた。まっくらなのに、あそこだけ強く輝いて見える。
それはいくつもの星が一カ所に集まってできた雲のような、あるいは別次元に通じる窓のような、ふしぎな光の塊だった。
少女が持っていた本来の力がそうさせたのだろうか。生きていたころと同じような自由が、ほんのすこしだけ戻ってきた。
すると彼女は、その光の中に吸いこまれていった。

「ユーリィ……ユーリィね、いいわね」
「そうか、変じゃないか？」
「かわいい息子に変な名前なんてつけません。女の子はね、チェリンカというのはどうかしら？」
「チェリンカ……ユーリィとチェリンカ……ああ、いい名前だ」
かすかに、その子供たちの両親と思える声が聞こえる。
少女は、飛びこんだ光の中を確認した。
しかし、まだこの世界に慣れていないのか、うっすらぼんやりとしか、その人たちの輪郭も浮かびあがってこない。
平凡な家庭のようだった。すくない調度品からは質素な暮らしぶりがうかがえる。
輪郭のぼやけたところと、うっすらと浮かびあがるところ——すべてに焦点が合わない状況下で、少女は彼らの声に耳を傾ける。

「やわらかくて息をして鼓動が……ああ、何だろう、この気持ちは」
父親が言ったらしい。その両手に、双子を抱いているように見えた。
「そんなに小さくても一生懸命生きてるのよ」

「生きて……」

母親の言葉に、父親は反応した。

「そう、いくつもの命の輝きのなかで、やっとめぐりあうことができた、なにより大切なわたしたちの子……あら、この子……何か握ってるわ、これは……」

母親が何かに気づいた。父親が抱いた、女の子の手にふれようとしている。すると、その小さな赤ん坊の手から光がこぼれでた。

それは少女にとって感動的な光景だった。

……すごく輝いてる。わたしよりも強い光。

少女は、女の子の手に注目した。手をのばせば届きそうな近さに、そのまばゆい光がたしかに存在している。

——すごい。こんな光、見たことない。ふたりいるから、すごく強いの？

少女の心はときめいていた。

「そう、そうなの。それをふたりで分けたのね？　じゃあ、あなたたちはいつもいっしょね。ずっと、ずっと……」

安心したかのように母親がつぶやく。

その言葉で、少女もすべてを理解した。

自分の命が失われたあと、入れかわるように生まれ落ちた新しいふたつの生命。
クリスタルの力は絶えることなくつづくのだ。その事実にふれて、少女のときめきはおさまりそうにもない。
しかし、うれしさの陰で不安が顔をのぞかせる。
それは新たな恐怖だった。
もしも、あの悪辣な男たちに双子がつかまったら――。
急に、紅いクリスタルへの警戒が強まる。心に深い影をさしたそれは、うごめくように不気味で、邪悪な色へと変化していく。
少女の心に、言いようのない危機感が訪れる。
――この子たちだけは、わたしと同じような目に遭わせたくない。
少女は願った。その願いを闇の中にうばわれたくないと思った。

あの子たちを見守らせて。
あの子たちがのぞむ世界が――幸せに暮らせる世界が、はじまるときまで――。

少女は死の世界で生きることをのぞんだ。

第一章　まだ幼き希望

それからユーリィとチェリンカは、すくすくと育ちました……。
でも、双子はいつねらわれるかわかりません。
わたしは、ふたりのそばから離れないよう気をつけていました。
そして、ある日のこと――。

1

そこは魔法書であふれた部屋だった。本棚に収まりきらない本は床のいたるところに積みあげられ、どこに何の本があるか持ち主でもわからないようなありさまである。

そんな雑然とした中を進むと、奥に小さな工房があった。工房といっても、作業卓がひとつだけ置かれたささやかなものだ。

その卓に向かうのは、鳥羽に覆われたひょろりとした体形に独特の兜をかぶったユーク族の男性。その隣には亜麻色の短い髪にまん丸い顔をしたクラヴァット族の幼い女の子がいた。

脚の長い椅子にちょこんと座った女の子は、床まで届かない足を前後にぱたぱたと振りつづける。

「ねぇ、まだ～？」

少女がもらした口調には、不機嫌さがあらわれていた。
「もうすこしである、待っているのである」
つれなく返事された女の子はますますおもしろくないといった顔で、ぱたぱたと足を強く振る。
「アルぅー、はーやーくぅー」
「すぐに終わるのである。チェリンカはいい子なので、待っているのである」
「うん、いいよ」
チェリンカと呼ばれた女の子は、にっこりとする。そしてアルと呼んだ人の作業を横からのぞきこんだ。
アルことアルハナーレムは、卓上に置かれた微細なアクセサリーに鎖を通していた。鳥羽に覆われた大きな手が器用に動いて、細かいビスをはめこんでいく。
「……終わった？」
「早すぎるのである」
「はーやーくー、おとーさんたち外で待ってるよ。早くしないと街に連れていってもらえなくなるじゃない。アルだって、いっしょに行くんでしょ？」
「むぅ。そうであるな。わかっているのである。急ぐのである……」
チェリンカに急かされてそう答えるものの、やっぱり手にしたものへの興味は尽きな

い。アルハナーレムに時間を忘れさせてしまうほどのそれは、チェリンカから預かっているクリスタルだった。

アルハナーレムは彼女のクリスタルをアクセサリーに加工してあげようとしていたのだが、しだいにそのクリスタルが秘めている力のほうに関心が移ってしまっている。

いまは、ただの石ころのように手のひらで輝きを失っているが、それをチェリンカのほうに向けてみると、芽吹くように輝きを放つのだからふしぎなものだ。そう思ったアルハナーレムは、

「むぅ……なんというか、魔法を使う身としては少々複雑な気持ちである」

と、つぶやく。

クリスタルから——これはチェリンカにしか使えないものだとはっきり言われているように感じたらしい。魔法の専門家なのにあからさまに拒絶されては引っこみもつかない。アルハナーレムはややむきになったように彼女の前でクリスタルを掲げながら、しばらく考えにふける。

何の変哲もないクリスタルに見えるが、それは普通の物とはまったく異なる物質であることをアルハナーレムは理解していた。クリスタルの中には大きな光源があり、それを中心にして小さな光が無数に飛びまわっている。独特に切れこんだ表面は光を屈折させて内部で飛びまわる光源を幾重にも見せるため、その輝きは一瞬たりとも同じ表情に

はならなかった。

まるで天体そのものを閉じこめているかのようだ——そう感じたアルハナーレムは、これがいかほどの力を発揮できるものかと興味を抱く。おそらくこれを使える主は果てしなく強大な力を得て……と考えたところで、これの所有者のことを思いだす。

「ふむ。そういえばチェリンカは、もうひとりで魔法を使えるようになったであるか？」

「え？」

いきなり訊かれたチェリンカは目をぱちくりさせる。

「あー、いやー、なんというか……ねぇ？」

アルハナーレムの問いに、それまで逸る気持ちを抑えきれなかった表情が、急にばつが悪そうな顔つきに変わった。

「むぅ……まだダメであるか」

アルハナーレムは残念そうにつぶやく。この強大な力をすこしも引き出せないとは、なんともったいない話なのだろう——その思いが高まり、

「相性的に、これはチェリンカだけが使える最高のものなのである。宝の真珠は豚がもち腐れているのである」

と、ずばり言う。

「ぐっ……つ、使えるもん。ユーリィといっしょなら、できるもん」
負けず嫌いのチェリンカも言いかえす。
するとまたアルハナーレムも負けじと言いかえす。
「そうなのである。ふたり揃うと生成も制御も自由自在なのに、ひとりずつだとからっきしなのである」
「えへへ、すごいでしょ」
「誉めてないのである」
アルハナーレムは厳しい口調で首を振った。そして確認するように訊ねる。
「そもそもチェリンカは、これを握りしめて生まれてきたそうであるな？」
「うん、そうだって」
チェリンカは、にっこりとして答えた。
「いやぁ、ふしぎなことがあるものね」
「自分のことである」
やや呆れ気味に、アルハナーレムはつけ加える。
「せめてクリスタルでの力の生成くらいは、ひとりでできるようになるのである」
「うん、わかってる」
「ほう……」

アルハナーレムは感心したように身を乗りだす。
「すると、やり方はもう憶えているのであるな？」
ちょっと期待したように返事を待つ。
「うん。えーとね、えーっと……」
「……忘れたのであるな？」
「てへっ……」
困りはてたチェリンカが小さく舌を出す。
アルハナーレムはため息をつく。
「むぅ……わかったのである。ならば、もう一度教えるのである。いいであるか。そもそもクリスタルとは純粋な力である。魔法学的にはこれを感応触媒という。魔法とは力の流れを制御することであり、また生成された力に意味をもたせることで現象として成立するのである。クリスタルから力を解放したときには共鳴現象である音が鳴り、簡単にいえば魔法が成立したときの音で……」
いつもの、長い長い講釈がはじまった。
「ねえ、アル……」
「……むぅ、何であるか？」
話の腰を折られたアルハナーレムがややむっとして答えると、チェリンカはいままで

とはちがった顔つきで、
「あのね、ちょっと思いだしたことがあるんだけど……」
「な、何であるか？」
アルハナーレムはわずかに緊張した。いきなり話題を変えようとしただけでなく、ふいにチェリンカが思いつめた表情を見せたからである。
「……あの、魔法がいっぱい使えるようになると……」
「ふむ、使えるようになると？」
「……幽霊って、見えちゃうものなの？」
「幽霊？」
「うん……」
チェリンカは神妙な顔でうなずいた。そのときのことを思い出したのか、小さな肩をふるわせながら話しだす。
「じつはね……昨日、ユーリィと裏山の洞窟へ入ったら、そこに幽霊がいたの……」
「ふむ……」
「ねぇ、それって——わたしが魔法が使えるようになってきたから？　魔法が使えるアルも、幽霊とかって見えたりするの？」
「……」

どう返事したものか。アルハナーレムは答えに迷ったように考えこむ。幽霊の存在を完全否定できるほどの根拠は持ち合わせていない。

だが、チェリンカは救いを求めるような目で待っている。

それを見て不憫に思ったアルハナーレムは、研究者の考えとしてではなく彼女の師として答えることにした。

「ふむ……それは何かの見まちがいであるな。魔法を使えるようになったからといって、やたらと幽霊を見たりしないのである」

「そ……そ、そうだよね、そうだよね、見まちがいだよね！」

チェリンカの顔がぱっと明るく輝いた。それまで沈みかけていた表情から一転して、

「そうそう、そうよ、アルの言うとおりよ。それなのに——ユーリィったら、あれを幽霊だ幽霊だって、わたしをこわがらせようとするんだよ？　いけないよね？　そんなの」

「ふむ、ユーリィも見たというのであるな？」

「ぜったい、うそだよ」

「しかしチェリンカも見たのであるな」

「ぐっ……そ、それはまあ……」

「ならば、幽霊はいるかもしれないということである」

「えええええ――――――――――っっっっっ!!」

卒倒しそうな大声をはりあげられ、アルハナーレムは仮面の上から両耳を押さえる。

彼女の師として、やさしく否定してあげようとしたのに、つい研究者としての虫がうずいて幽霊が存在する可能性も肯定してしまった。

しかも、いまになって思いだしたことがある。――そういえばチェリンカは、暗いところやオバケの話が大の苦手なのであった。

「あ、安心するのである。こちらに危害を加えてこないかぎり、無視すればいいのである。気がつかないふりをして、そっとしておいてあげればいいのである」

「やだやだやだっ！　やだよーっ！　見えちゃったらこわいもん！　夜だって眠れなくなっちゃうもん！」

チェリンカの恐怖心はどんどん高まっていく。

このままでは収拾がつかなくなる――アルハナーレムはあわてて頭をめまぐるしく回転させ、そこから何かひらめいたように手を叩いた。

「ふ、ふむ、そうか！　ならばその幽霊は、チェリンカと仲良くなりたいのかもしれないのである！」

「なかよく？」

急にチェリンカが鎮まる。

アルハナーレムはやさしい声でうながすきかえす。
「そう思えば、こわくなくなるのである」
「……」
チェリンカの恐怖は止まったようだ。むしろ、いままで考えてもみなかった話に目をしばたたかせている。
「ほんとに……こわくなくなるのかな……」
まだ不安の色を残しながらも、信じてみたいと思いはじめている。
アルハナーレムは、さらに自信をもたせるかのように力強く言った。
「チェリンカならそれができるのである。勇気あるラトフ様の子供なのである。大丈夫なのである！」
呆然として聞いていたチェリンカは、しだいに普段の明るさをとり戻した。言われてみれば、そう努力できるかもしれない——という気がしてきたらしい。
「……うん。そう思うようにする。ありがとう、アル！」
「では、魔法の話に戻るのであ……グほっっ!?」
「アルぅ、アルぅ～～っ！　ありがとぉっ！」
チェリンカはうれしさいっぱいで、アルハナーレムの胸に飛びこんだ。
「げフッ、よ、よろこんでくれて、う、うう、うれしいのである——グほっっ!!」

どこにそんな力があるのか——アルハナーレムは息苦しさをおぼえたが、抱きついたチェリンカのほうは遠慮なく力のかぎり、ぎゅ～～っとしめつけてくる。

「グがっ、ごっ、ほっ……ぐぎぎぎっ」

——も、もしかしたら自分がこのまま幽霊になってしまうかもしれないと、アルハナーレムが危惧したときだった。

バァンと、家の扉を勢いよく開けて小柄な女性が入ってきた。

一見して大人なのか子供なのか年齢不詳の彼女は、息を切らせながら奥にいるチェリンカたちに向かって、

「た、たた、大変なのですー。ユーリィとラトフ様が、待ちきれないと先に街へ出かけてしまったのですぅーっ！」

と、あわてた様子で伝えた。

子供のチェリンカよりすこし低い背丈で、幼子のようなころころとした体形の彼女は、リルティ族のミースである。その容姿や口調からは想像しにくいが、ミースは立派に大人の女性であった。自称リルティ族きっての錬金術師なのだ。

ミースの話を耳にしたチェリンカは、

「おとーさんとユーリィが？　たいへんだよっ、すぐ追いかけなきゃ！」

と抱きついていたアルハナーレムから離れ、ミースといっしょに飛び出そうとした。

「あ、チェリンカ――忘れ物である！」

すぐさまアルハナーレムが呼びとめる。

チェリンカが立ちどまって振りかえると、アルハナーレムは鎖のついたクリスタルを手にして追ってきた。

「これは、チェリンカにとって大事なものなのである。忘れてはいけないのである」

すでに仕上がっていたらしい。アルハナーレムが、チェリンカのために彼女のクリスタルを首飾りに加工してくれたのだ。

「……いつの日にか、チェリンカにとって大いなる助けになるにちがいないのである」

そう言って、アルハナーレムは出来上がったばかりのペンダントをチェリンカの首にかけた。金色の鎖の先端に、クリスタルがきらきらと揺れている。

「これなら落とすこともないし、いつも身につけていられるのである」

「わぁ！　きれーい！」

チェリンカは感激する。微細な彫刻の施された枠にはめこまれたクリスタルは、装飾品と見紛うばかりだった。

「ほんと、きれいなのですー。ひょろ長いトリのオッサンにしては、なかなかやりやがるのです」

「ミース、おっさんはよけいなのである。失礼なのである」

横から感想をもらしたミースに、アルハナーレムはむっとする。
「ありがとう、アルっっ！」
チェリンカはまたアルハナーレムに抱きつこうとしたが、はっと思いだした。
「いけない！　アルもいっしょに行くんでしょ、急いで！」
かわりにアルハナーレムの腕をとって、走りだす。
「グはっ！　ちょ、ちょっと待つのである」
「はやく、はやくぅ！」
「レッツラゴーなのですぅー」
騒がしい一行は、あっという間に家の外へ飛びだしていった。

――クラヴァット族にユーク族、リルティ族といった種族が住んでいるここは、建物が納屋などを入れても四、五棟ほどしかない小さな集落だった。住人は全部で五人。その周囲には高地独特の荒涼とした原野が広がる、寂しげな土地だ。
しかし、彼らは気にとめていない。たとえ辺鄙な場所であろうとも、心を許せる仲間がいっしょだからだ。みんな家族も同然で、力を合わせて自給自足の協同生活をしっかり営んでいた。
だから誰も寂しくなんかない。冬の到来を告げる冷たい一陣の風が舞っても、その心

には暖かさが常に保たれていた。
五人の住民だけでも充分にぎやかに感じられる集落に生まれて、ユーリィとチェリンカも幸せいっぱいだった……。

チェリンカたちを見送った少女は、すこし双子のことがうらやましくなった。
魂(たましい)だけの存在になって、この世にとどまった彼女には、もはや誰も気づいてくれない。
そんな寂しさを感じることがある。
でも、気づかれないほうがいいのだ。
できれば、誰にも気づかれないまま、そっと双子のこれからを見守っていけたらいい。
そう願っているのに、危険な存在がゆっくりと彼らに近づいてきている。
やがてそれは大きな試練となって、ふたりの前に立ちはだかるだろう。
この世に何も干渉(かんしょう)できない存在であろうとも、あのふたりだけは守りたかった。
あの濁(にご)りもなく純粋に育ってきているふたりを、何としても守りぬくのだ——。
少女は気持ちを新たにすると、ぎっしり詰まった本棚が並ぶ壁をすーっと通りぬけ、外に飛び出していったチェリンカたちのあとを追った。

2

「はあ、はあ、はあっ……もう！　どこにもいないじゃないっ！」
アルハナーレムの腕をひっぱって走るチェリンカが叫ぶ。
目の前には荒涼とした原野が広がり、かなり先のほうまで見とおせる。それなのに、ユーリィとその父親ラトフの姿はどこにも見えなかった。
「はあ、はあ、はあっ……へ、変なのです、おかしいのです……まだそんなには遠くに行ってないはずなのです」
あとから追ってきたミースも、息を切らせながらふしぎがる。
チェリンカはムキになって、もっと早く走ろうとする。
「ぜったい、追いついてやるんだからっ！」
「う、うわあああぁぁぁ！　ま、待つのである、チェリンカ！　そんなにひっぱったら危ないのであるぅぅぅ！」
腕を強引にひっぱられたアルハナーレムの心配したとおり、
「ん～～っっ！」
走る速度をあげたチェリンカは石につまずいたのか、豪快にすっ転んでしまった。

「きゅぅーっ……い、痛い～～」
「はあ、はあ……だ、だから危ないといったのである」
腕をひっぱられていたアルハナーレムがたしなめる。
「チェリンカ！　大丈夫なのです？　無理をしてはいけないのです」
ミースはびっくりして駆けより、地面にうつ伏せたチェリンカを抱き起こそうとする。
「ミースぅ～、痛かったよぉ～～」
砂のついた顔をあげて、チェリンカが泣きそうになる。
「むぅ……気をつけるのである。あんまり転んでばかりいると鼻がペチャンコになるのである」
と、あくまでも冷静なアルハナーレムに、ミースはかちんときた。
「こらーっ、そんな上から見下ろしたような言い方してないで、さっさとチェリンカをおぶってあげたらどうなのですか！」
「おぶう？　我が、であるか？」
「ほかに誰がいるのです。そもそもチェリンカが、ラトフ様やユーリィに遅れをとってしまったのはお前のせいなのです！」
「我の？」
「とーぜんなのです――くだらない魔法講釈を延々つづけて、モタモタしてるからいけ

ないのです」
「く、くだらないとは何であるか！　我はチェリンカに魔法の使い方をきちんと正しく丁寧に伝授しようとしただけである。遊んでいたわけではないのである」
「だからそうやって偉そうなゴタクを並べている暇があったら、さっさとチェリンカを背負って走りやがれです！」
「む、むぅ……しかたないのである……」
ケンカ腰で言い合っていたふたりだが、決着はあっさりとついたらしい。
「さあチェリンカ、我の背中にのっかるのである」
アルハナーレムは半べそをかいているチェリンカのそばに腰をおろし、彼女に背中を向けた。
「うん、ありがとうアル……えへへっ」
うれしそうな笑みを浮かべ、チェリンカはアルハナーレムの背にのっかった。
やがてミースが号令をかける。
「それ、行くですぅー」
「きっしゃあああぁぁぁ――――っっっ！！！」
突然奇声を発し、チェリンカを背負ったアルハナーレムが馬のように走りだす。
――呆れるくらい速かった。

「ふわっ！　ちょ、ちょっと待つのです！　は、速すぎるのです――あの鳥のおっさん、どこにそんな力が――ふっきゃあああっ！」

こんどは、あわてたミースがすっ転んでしまった。

「何をやっているのであるか、ミース！　早くくるのである！」

立ち止まったアルハナーレムが振りかえるなり、鬼教官のごとき厳しい指令を飛ばす。

「はあ、はあ、はあっ……ちょ、ちょっと待つのです……足が痛くて、すぐに動けないのですぅー」

転んだミースは涙目で訴える。

だが、アルハナーレムはいつもの仕返しとばかりに言いたい放題だ。

「むぅ……なんというだらしのなさであるか。ふだんの運動不足がたたっているのであるな。いつも部屋にこもって、くだらない壺の研究ばかりしているからそうなるのである」

「お、お前に言われたくないのです……あうぅぅー」

ミースは、きっとした顔で言いかえす。しかし、すぐに転んだ痛みで、赤ちゃんのようなまん丸い顔は泣きっ面に戻ってしまう。

「むぅ……」

それを見たアルハナーレムはひとりごちる。

――勝利である。
いつもミースに言い負かされることが多いアルハナーレムは、この時点で完全に有利な立場に転じたことを確信した。
ところが、それもつかの間。
ここでミースに思わぬ助け舟があらわれた。
「……ねぇ、アル。ミースもいっしょにおんぶしてあげてよ」
すでにおんぶされているチェリンカが、とんでもないことを提案してきたのだ。
「ぬっ、なぜであるか？　どうして我がそこまで――」
とうぜん聞き入れることなどできない要求である。
しかし。
「お願いだってば――」
チェリンカは背中から思いっきり抱きついてきた。
その瞬間、アルハナーレムは戦慄する。自分の首にしっかりとまわされたチェリンカの両腕が、きつくきつくしめあげてきたのだ。
――これは、いつものチェリンカ必殺《お願い攻撃》である！
「うぎぎぎっ……く、首がしまる……」
「ねぇ～、アルゥ～、おねがーい」

恐るべき怪力だ——しかも当人に悪気はないのだから始末が悪い。

「ぐごごごっ……」

アルハナーレムの意識がうすらいでいく。

……こ、このお願い攻撃に、我はいつも弱いのである。何度も何度も負かされてしまうのである……いや、いまはそれどころではないのである！　我の視界が黄色くなってきたのである、危険域に突入しかけているのである、こんどこそほんとうに幽霊になってしまうのであるぅぅ——。

呼吸困難に陥ったアルハナーレムは渾身の力で命ごいをした。

「うがが……わ、わかったのである……わかったのである、それ以上首をしめないでほしいのであるぅぅぅー」

それでやっと、解放される。

ほとんど無抵抗のまま、アルハナーレムは白旗を掲げることになった。

「ふぅー、これはラクチンなのですー」

ミースがアルハナーレムの背中でよろこぶ。

チェリンカとミース、並んだふたりを背中におんぶしていた。

重さは倍になり、彼女らを同時に背負って重心をとろうとするアルハナーレムの華奢な両足はガクガクと、いまにも折れそうにふるえつづける。

「ぬぐぐぐっ……」

それに耐えながらも、アルハナーレムはまたひとりごちた。

……勝利とは、ほど遠い状況である。いや、これは勝利でも敗北でもないのである。ミースと和平を結ぶための、平和的な解決なのである――。

と、アルハナーレムは自分に言い聞かせる。

「さあ！　おとーさんとユーリィを捜せ！」

「行っけえー、なのですぅ！」

背中からふたりの号令を受け、

「ひひぃぃぃぃぃ――んっ!!」

馬のように、アルハナーレムが全速力で走りだしたときである。

どこからともなく、

〝お――いっ……どこ行くのおおおお――っ？〟

男の子の声がした。

「……え？　今の声は？」

「ユ、ユーリィの声なのです！」

「アル！　とめてとめて！」
「ストーップ！　とまりやがれですぅーっ！」
ふたりして、馬の手綱を引くようにアルハナーレムの首をしめあげた。
「ぐひぃいいいいい――――っっ!!!」
急に停まろうとしたため、アルハナーレムはふたりを背負ったまま豪快にズッコケた。

「いやぁー、最悪の乗り物だったのですー。あれでは、命がいくつあっても足りないのですー」
「むぅ、ちょっと待つのである！　ミース！　我はいつから乗り物になったのであるか」
「いえ、誰も乗り物以下だとまでは言ってないのです」
「そんなことは、我も訊いてないのである」
などと言い合うふたりを連れて、チェリンカは集落の外れにある丘へと登ってきた。
捜していたふたりは、その丘の上に立っていた。
父親のラトフ。
そしてチェリンカの双子の弟、ユーリィである。
三人が近づいていくと、ラトフの隣に立っていたユーリィが手を振った。

「チェリンカ！　どこ行こうとしてたの？」
甘えん坊の顔が、ぱっと輝く。
いつ見てもかわいらしくて、女の子みたいな顔だち――六歳という幼い年のせいもあり、よけいにチェリンカとうりふたつに見える。もしふたりの髪型や服装がいっしょなら、見分けるのも苦労しそうな容姿だ。
「ちょっとユーリィ、それはこっちが聞きたいことよ！」
そんなかわいらしい弟に対して、チェリンカは容赦なくつめよった。
「え？　え？　ど、どうしたの？」
ユーリィはわけがわからず、目をぱちくりさせる。
「ミースが先に出かけたって言うから、あわてて追いかけたのよ」
「え？　ぼくたち、ずっとここで待ってたんだよ？　ね、おとーさん？」
同意を求めるようにユーリィは父を見あげた。
幼いユーリィからすると、それはもう岩のように大きな存在の父がそばに立っている。
父のラトフはユーリィを見おろし、にっこりとほほえんでからチェリンカに言った。
「すまなかったな。しばらくしてから呼びに戻るつもりだった……」
ラトフはチェリンカに歩みより、その頭を撫でてやる。
詫びている言葉の内容よりも、ラトフのやさしい口調、ほほえみ、そしてその大きな

手で撫でられることのほうに、よろこびが感じられてくる。
双子にとって、父ラトフはとても大きく頼もしい存在だった。
彫りの深い造形が岩を連想させるその顔はいかつく、ときにおっかなくも見えるのだが、子供たちにはわかっていた。見た目とはちがってすごくやさしくて、何よりも自分たちのことを深く愛してくれている父親なのだ、と。
「おとーさんに置いていかれたと思ったんだから！」
チェリンカは急に甘えたような声で父を責める。
そのかわいらしさを受け入れるようにラトフはうなずきながら、しっかりと答えた。
「大丈夫だ。大事なおまえを置いていったりはしない」
ラトフはその丸太のように太い腕をチェリンカの背中にまわし、自分のそばによせた。
そのとき、
「あれっ、チェリンカ――それ？」
ふとユーリィは、チェリンカの胸に光るものを発見する。
つい先ほど、アルハナーレムに加工してもらったクリスタルのペンダントだ。
「へへーっ。これ、いいでしょ？　首飾りにしてもらったんだよ♪　ほら。ユーリィもほしい？」
「ぼくは男の子だもん」

「あらあら、むりしちゃって……ねえ、おとーさん。これキレイでしょ？　アルがね、つくってくれたの」

と、自分の頭に手を乗せている父親に、チェリンカは胸のペンダントを掲げてみせた。

「……ああ、よく似合っている。よかったな」

ラトフがやさしそうな笑みを浮かべて答えてくれた。

チェリンカはそれを聞いて、満足そうにうなずく。

「では、みんなもそろったし、そろそろ行くか――」

ラトフはそばに立っているアルハナーレムたちに声をかけた。

親子のやりとりをほほえましく眺めていたアルハナーレムとミースがうなずきかえす。

ラトフたちは丘をあとにして歩みだした。

その中でひとりだけ、ぽつんと残ったのはユーリィだった。ちょっと気になった様子で振りかえると、遠くのほうに視線を向ける。

視線の先には小さく見える湖があった。よく見ると、その湖の真ん中にはごちゃごちゃとした何かが見える。昔、何かの建物だったのが壊れた跡みたいだ。

さっき、父の横顔をちらりとうかがったら、どこか悲しそうな表情で見つめていた。すぐにユーリィのことに気づいて笑顔を見せてくれたラトフだったが、ユーリィはずっと、そのときの父の顔が気になっている。

なぜなら、前にも同じような父の表情を見たからだ。

……それは、つい先日のことだった。

夜遅くに父がこっそり出かけていく物音を耳にしたユーリィは、自分も寝床をぬけだしてラトフのあとを尾けようとした。そのユーリィが寝室を出ていく音に気づいたチェリンカもついてきた。ふたりはいっしょに、家の外に出る。

ラトフは満天の星空の下、この丘に立って遠くを眺めていた。

近くに寄ったユーリィたちはすぐに見つかって叱られたが、ともに眺めることを許してもらえた。

丘の上から見える夜の湖面は、無数の星をちりばめたように光が点在してまたたいていた。それらはひとつひとつがゆっくりと漂うように舞っていて、星空が湖面に映ったものではないことがすぐにわかった。

あれは何だろう……。

そうつぶやいたとき、ラトフが教えてくれた。

あれは鬼火という。あの場所で死んだ救われない魂の燃える炎だ——と、小さな声で。

ユーリィには、その声に父の悲しみがこもっているように感じられた。

そして今日の昼も、先日の夜と同じように沈んだ表情をしてラトフは湖を眺めていた。
……なんだろう、あそこに何があるんだろう。
父はあれ以上くわしく話してくれなかったけど、何かある……。
ユーリィは立ち入ることのできない深いものを、無言でたたずんでいたラトフから感じとっていた——。

——それは、いずれ知ることになるのか。
もしそうだとすれば、残酷なものになるかもしれない——。
ユーリィのそばに存在する実体のない少女は、双子の未来に最悪の事態が訪れないよう願うばかりだった……。
と、そのとき。
〝ユ——リィいいいーっ！　は——や——く——っ〟
ぼんやり立っていたユーリィに向かって、チェリンカの声が飛んできた。

気がつくと、みんなはもう村の外だった。
「わぁっ、待って！　すぐ行くから！」
あわててユーリィは丘を駆けおりていった。

3

その日の昼下がり。ユーリィとチェリンカは念願の場所を訪れていた。
そこは王都レベナ・テ・ラの入り口。
城下町をとり囲む大きな運河から枝分れした溝渠が建物のあいだを流れ、迷路のごとき水路を築いている。
さらに目の前には舗装された石畳の路がまっすぐのび、中央広場へとつづく。そこには、ユーリィたちが生まれてはじめて見るものすごい数の人々が行き交っていた。
「わぁー、すごい。なんだここ!?」
「いっぱい人がいるわねー。それに大きな建物も、こんなにたくさん――」
その光景に子供たちはすっかり目を奪われてしまう。
そんなふたりをうしろから見守るラトフが、そばに立つアルハナーレムたちに小さな声で話した。

「いずれあの子たちにも、街がどんなところか見せなくてはいけないと思っていた」
と、前々からその覚悟をしていたように言う。
「……わかっているのである。我も、じゅうぶんに注意するのである」
「そうなのです、ミースたちにまっかせなさい、なのです！」
アルハナーレムとミースが声をひそめて、ラトフに答える。街の光景に感激している子供たちのうしろで、三人の大人は周囲への警戒をゆるめなかった。
ラトフはふたりにかるくうなずくと、子供たちのもとへ歩みよっていく。
そのユーリィとチェリンカは、さっそく言い争っていた。
「ちょっと！　はしゃがないの。田舎者みたいでしょ！」
「だって、ほんとに、なんか人がいっぱいなんだよぉー。目がまわっちゃうかも」
「だからって、鼻までスピスピさせないっ！　もぉー、子供なんだから――」
突然、街の隅々に届くほどの轟音が響く。
「!?」
チェリンカは話をやめ、すくみあがってしまった。
「わ、わ、いまのなに？」
轟音の正体を確かめようと、チェリンカはまわりをきょろきょろする。
隣に立つユーリィも似たような行動をしている。しかし、そばにいる街の人々はまっ

たく驚いた様子もなく、平然として通りすぎていった。
「……？」
双子はおたがいに顔を見あわせ、きょとんとする。
いまのは何だったの……？
ラトフがその疑問に答えてくれた。
「あれは、神殿が鳴らす鐘の音だ。時刻を知らせるもので、いまのはひとつだったから一の刻ということになるな」
「へぇー、へぇー」
教えられたユーリィはうれしそうだ。その隣でチェリンカは冷静を装う。
「さ、さすが王都ねー。無駄にお金がかかってるわ」
「ねー、もったいないよねー」
ユーリィが、チェリンカに賛する。
「いや、無駄でも、もったいなくもないと思うのだが……」
ラトフは苦笑しながら言ったあと、すこし考えるしぐさをみせる。
「ふむ、そうだな。私の用事につきあうのも退屈だろう。三の刻にあそこの広場で待ち合わせるというのはどうかな？」
「え、え、いいの？」

父の提案に、子供たちは声をそろえて聞きかえした。
「ああ、いろいろと見てまわるといい。街の人と話をしてみるのもいいだろう。何事も経験してみることが大切だ。ここには店もあるからな。あまり高価なものでなければ買い物も許してあげよう」
その言葉にチェリンカは喜んだ。
「――っ!?　ひゃー、うひゃー、どうしようユーリィ、買い物だよ、大人だよー」
「うわー、なんかもう大人の階段ズンズン上りまくりだね」
ユーリィも背のびして、胸をはった。
「ただし、ひとつだけ約束がある――」
ラトフが真顔で言う。
「神殿にだけは近づいてはいけない。これだけはかならず守ってほしい」
「えっ、どうして？」
「どうしてもだ。あそこには行ってはいけない」
ラトフは念を押すように語気を強めた。それに子供たちも気圧されてしまい、
「……う、うん、わかった」
と、小さな声でうなずく。
「よろしい。では解散に――」

ラトフが言い終わらないうちに、
「あっ!?　ちょ、ズルいわよ！　待ちなさいよユーリィ！」
街に向かって駆けだしたユーリィを、チェリンカがあわてて追いかける。
ラトフはそれを苦笑いして見送った。

王都レベナ・テ・ラでは、魔法が人々の生活に深く浸透していた。食品を腐らせないよう冷気の魔法で凍らせて貯蔵したり、調理するために魔法で火を起こしたり、怪我をしたときは治癒魔法をかけたりして、人々の生活を支える重要な基盤となっている。
すべてはレベナ・テ・ラの神殿に祀られている大きな感応触媒――クリスタルのおかげである。クリスタルから抽出された魔素をつめた魔石は、人々によって加工され、あるいは組み合わせて起きる現象を用い、さまざまな面で生活に役立てられていた。
このため、クリスタルを祀る神殿に対する街の人々の感謝の気持ちは、現在の王宮に対するものより高いといえる。民ひとりひとりの信仰ぶりもなかなかのものであった。
そんな街の上空から、少女の魂はユーリィたちの姿を追っていく。
双子が生まれてはじめて訪れた街に、どんな反応をするのか興味はある。でも、今は、緊張をもって二人を見守らなければいけないのだ。なぜならこの街は、敵の勢力圏なの

だから。

見つからなければいいのだけど――。

少女の心配をよそに、ユーリィたちはにぎわう街の中を走りまわっていた。

双子の行く先には数多くの露店が見える。それはいくつもの通りにわけて整理されていた。食料品のそろった通り、衣類や雑貨を扱った通り、そして独自に生成した魔石、腕によりをかけて仕上げた武器や防具などを自慢げに陳列した職人たちの通り……そのどれもが訪れた人たちで混み合っている。

そこでユーリィは武器屋で短剣を購入し、チェリンカは父やアルハナーレム、ミースへの贈り物をまず買おうと、アクセサリーの露店などを何軒もまわった。

子供たちは時間を惜しむように街を隅々まで駆けめぐり、あちこちの店先に並べられた品々に目を奪われる。そして、ひっきりなしに行き交うたくさんの人たちの声と熱気にさらされて目がまわりそうになっていた。

と、そのとき。

「聞いてよ、信じられないわ――あの神殿」

「ん？　どうしたんだい？」

街の一角で、神殿について熱く語りあう若い男女の姿があった。たまたま通りかかったユーリィたちは足をとめ、その女性の話に耳を傾ける。

「さっき日課のお祈りに行こうとしたら、神殿のやつら、今日から入場料とるっていうのよ。お祈りするのにもお金が必要なんて、聞いたことないわよ！」

若い女が大きな声で怒ると、そばに立つ男もあせって大きな声になる。

「おいおい、こんなところで神殿の批判をしたら——神官に聞こえちゃうだろ！」

「何よ、ほんとうのことを言って何が悪いのよ！」

「まあまあ、落ちつけよ。あれだけの施設なんだし——金もかかってんだろうから仕方ないだろ」

そんなふたりのやりとりを、ユーリィたちはさらに近づいて聞いた。

父親のラトフから神殿には近づくなと固く約束させられたことで、逆に興味をもってしまったらしい。

「それにね、わたし見たのよ。大聖堂で——」

急に若い女は、声をひそめる。その様子に、ますます興味をもってユーリィたちはふたりのそばに寄っていく。

「大聖堂って……お前、よく忍びこめたな？」

「ふん。だてに子供のころからレベナ・テ・ラっ子をやってないわよ。裏道なんていくらでもあるしね。そんなことよりも、聞いてよ」

「お、おう……なんだ？」

「もともとここは、クリスタルを祀る聖域のはずでしょ？」
「何を当たり前のこと言ってんだ」
「と思うでしょ――でもね、それが――ないのよ」
「ない？」
若い男の問いに、女はうなずいた。そしてさらに声をひそめる。
「大聖堂に行ってみたら、肝心のクリスタルが消えてるの――ほら、憶えてる？　あの大きくて、きれいなクリスタル」
「ああ、そういえば昔……その上に登ろうとして、叱られたことがあったな……って、あのクリスタル、とっぱらったのか？」
「わたしたちが子供のころには、そんなことあり得なかったのに……これは絶対、何かおかしいわ」
「そりゃたしかに変だな……そういえば、いつからだ？　神殿がやたらと金儲けに走るようになったのは……」
「そうねえ、いつごろだったかしら……たしか、教皇様が代わったあたりに……」
と、若い女が思い出そうとしたときである。
いきなりまた、あの轟音が町中に鳴り響いた。
聞き耳をたてていたユーリィとチェリンカはそろって、びくんとする。

神殿の鐘の音だ。
音はふたつ。二の刻だ。
と、その直後に異変が起きた。
「あら……何いってるのよ、入場料を払うなんて当たり前じゃない！」
急に、若い女の態度が変わった。
「無料にしてもらうなんて、そんなの虫がよすぎるわ。聖なる領域に対する冒瀆よ。そうよ、これは試練なの。神様が、わたしたちの信仰をお試しになってるのよ！」
「ふっ、何をいまさら。そんなていどじゃ、試練のうちに入らないぞ！」
若い男の口調も、変わっている。
「おれなんかな、全財産を神殿に寄付してやるぜ！」
「全財産を、神殿に寄付？　いいわ！　それ、ナイスアイデアよ！」
「ははは、そうだろ？　教皇様、ばんざいっっ！」
「バンザーイ！」
ふたりの男女は興奮状態で神殿への忠誠を誓いあっていた。
双子はきょとんとした顔で、その場を離れた。興味を失ったのだろうか。上空から見おろす少女はゆっくりと、ユーリィたちのあとを追う。いや、ちがった。双子の興味はべつの物に移ったのだ。

――いけない、そっちに行っては！

それは恐れていたことが現実になった瞬間だった。少女はいますぐにでも止めたかったが、実体のないままでは無理だ。

どうすればいいの……。

少女が助けを求めるようにあたりを見わたすと、子供たちを陰から見守るアルハナーレムとミースの姿があった。人ごみにまぎれた彼らも、ユーリィたちの突発的な行動にまごついている様子だ。

空に浮かぶ少女は、あらためて双子を見た。

道をまちがえたわけではなく、明らかに神殿へとつづく一本道へ彼らは向かっている――その先には、頂上へ向かうほど細くなる神殿の塔がたっていた。少女にはおそろしさしか感じられない建物である。

お願い、それ以上は進まないで！

しかしユーリィは、何を思いついたのか神殿の入り口に向かって駆けだした。

そばを通る大人たちのあいだをすりぬけ、神殿の敷地にぐんぐん近づいていく。

「待ちなさいよ、ユーリィ！　そっちに行っちゃいけないんだよ。おとーさんとの約束でしょ！」

「だからちょっとだけだってば！　ちょっとぐらい、へーきだよ！」

ユーリィは追いかけてくるチェリンカに向かって、明るく答えた。
「あぶないっ、ユーリィ！」
突然、チェリンカが叫んだ。
「えっ!?」
その瞬間。
——ドンッ。
うしろを向いたままのユーリィの全身に、大きな衝撃が走った。
誰かにぶつかったらしい。
「うっ！」
ユーリィははじきかえされて、地面に尻もちをついた。
「いたたた……」
痛みをこらえたユーリィが、ぶつかった相手を見あげる。
それは、異様な姿をした大男だった。
深紅の羽毛に覆われた全身に高貴な鎧をまとっていたが、白いあご髭をはやしたその顔はどす黒く、醜悪さに満ちていた。
「教皇様、大丈夫でございますか」
うしろに控えていた騎士団から、親衛隊長らしき男が前にでてくる。その男も異様な

姿をしていた。全身を黒い外套で覆い、そのうえに深紅の仮面をかぶっていた。
「教皇様に対し、なんと無礼な！」
紅い仮面の男が、尻もちをついたままのユーリィに怒声を浴びせる。
「よせ、チャスペル」
教皇と呼ばれたどす黒い顔をした男が制止した。すると、そのチャスペルと呼ばれた紅い仮面の男は一礼して身をひく。
「ユーリィ！」
チェリンカがそばに駆けよってきた。
「あ、あの！　お、弟がぶつかってごめんなさい――お、おケガはないですか？」
緊張した面持ちでチェリンカが、自分より十倍近くも大きい男に一生懸命頭をさげる。どす黒い顔に紅い目を光らせた教皇は興味なさげに視線をおくったが、
「……ん？」
彼女の胸に輝く、何かが気になったらしい。
「ほう、これは珍しいクリスタルだ……」
そう言ってチェリンカに歩みよると、教皇は腰をおろし、彼女が首からさげたペンダントをするどい爪の輝く手の上に乗せた。
「あ、あの……」

チェリンカはすっかりおびえてしまい、言葉にならない。
「娘よ。このクリスタルはどこで手に入れた？」
教皇は訊ねた。

〝――いけないっ、逃げて！〟

突然、脳裡に少女の声が響いた。
本能的にチェリンカは、その言葉に従ったほうがいいと感じとった。
「ユーリィ、行こっ！」
強い口調で言い放つと、脇で尻もちをついているユーリィの手をひっぱり上げる。
そして、輪になって見守る人たちの中に飛びこむ。そのままふたりは人垣をかきわけ、あっという間に走り去ってしまった。
それを教皇は無言で見送った。
双子が教皇の問いを無視して立ち去ったことに驚き、街の人々はざわめいた。そして、我先にと地面に手をついて教皇の怒りを鎮めようと深く頭を下げていく。
教皇はゆっくりと身を起こし、そんな民衆にうなずきながら応えた。そしてきびすをかえし、クリスタル神殿の正門へと向かう。そのあとに腹心のチャスペルをはじめ、護

衛の騎士団がぞろぞろとつづいた。

4

「あれが、神殿のえらい人だったんだ……なんか、こわい人だったね」
しばらくしてユーリィが、思い出したように言う。
ふたりは中央広場の隅に腰かけていた。教皇の前から逃げだしたときは騒がしかった街の人たちも、いまは落ちつきを取り戻しつつある。たまに、立ちどまって双子のことをひそひそと話す人たちがいるぐらいだ。
「ねぇ、チェリンカ……どうして急に逃げようって言いだしたの？」
ユーリィは気になって訊ねた。
するとチェリンカはむっとした顔で、にらみかえす。
「わぁ、ごめん……」
きつくにらまれたあまり、ユーリィはおっかなくなってすぐにあやまった。
「……」
チェリンカはくちびるをま一文字に結んで、ユーリィから目をそらす。
ほんとうは、うまく説明できなかった。

いきなり聴こえてきた女の子の声。それは現実に耳にした声ではなかった。頭の中に響いた声だった。そんな話をユーリィにしても、きっと幽霊のしわざだと言うにちがいない。

チェリンカは、ぷるんぷるんと首を強く振った。

昼間に、こんな明るいところで幽霊なんか出るはずがない。

そう心の中で打ち消そうとしたときだった。

「おとーさん、おそいね……」

ふいに話題をかえたユーリィの言葉に、はっと我にかえる。

……そういえばそうだ。

チェリンカは胸の高まりを鎮めるように深く息をつき、あたりを見まわす。

約束の三の刻はもうとっくにすぎている。

それなのに、ラトフは一向に戻ってこない。広場を行き交う人々の中にも父の姿は見つけられない。

どうしたというのだろう——さすがにチェリンカも、心配でたまらなくなったときだ。

「あ、おとーさんだ！」

いきなり隣に座っていたユーリィが立ちあがった。チェリンカは「えっ？」と、その視線の先を追う。

食料品を扱った通りの中だ。人ごみにまぎれて歩く、ラトフの姿が見えた。
「おーい、おとーさん！　こっちだよ！」
ユーリィが手を振って大声をあげる。
しかしラトフはその声に振り向きもせず、通りの先に進んでいく。やがて人ごみの中にまぎり合って、また姿が見えなくなってしまう。
「あれ？　おとーさん、どこ行くんだろ……？」
ユーリィが不安そうにつぶやいた。
おそろしい教皇に睨まれ、街の人たちからも冷ややかな視線を浴び、すっかり心ぼそくなっていた。そこへ、ようやくたのもしい父親の姿が見えたというのに、自分たちのことを無視してどこかに行ってしまったのだ。
「おとーさん、待ってよ！　ぼくたち、こっちにいるよ――待ってってば！」
ユーリィは父親のうしろ姿に吸いよせられるように駆けだす。
「あ、待ってユーリィ！」
チェリンカも、ラトフの消えた方向に走った。

――あの子に、干渉してしまった――。

街の上空にただよう少女は、チェリンカに動揺を与えた結果にとまどっていた。
しかしあそこで警告しないと、とりかえしがつかなくなるとも思ったのだ。
肝心なのは、あの双子を守ることである。そのためには多少の干渉もやむを得ない。いや、これからその機会はもっと増えてくるはず。だったら、もうそれに慣れてもらったほうがいいのではないか。
と、考えはじめたときである。
「しまったのです、遠くから見守るのも限界があるのです――」
眼下で、ミースの声がした。
宙に浮かぶ少女が見下ろすと、うす暗い路地の入り口に立ったミースとアルハナーレムが相談し合っているところだった。
「むぅ、できるだけあの子たちの自主性を育てたい、というラトフ様の考え方に協力したかったのであるが……」
「しかし、もう限界は限界なのです。見るです。ユーリィとチェリンカはこの路地の中に入ってしまったのです」
「ふむ……ここは、旧市街への入り口であるな」
「何をのんきに構えているのです！　ここはレベナ・テ・ラで、もっとも危険な区域なのですよ。ユーリィとチェリンカに、もしものことがあってからでは遅いのです。さあ、

すぐに追っかけて合流するのです！」
「うむ……しかしラトフ様は、このような場所になぜ、あの子たちを招き入れるような行為をなされたのであるか？」
「こらーっ、どこまでのんきなのです！　あのラトフ様が、本物だとはかぎらないのです！」
「何とっ??」
ミースの訴えに、アルハナーレムはどきりとする。
「もし本物でないとするなら、何であるか??」
「誘導に決まっているであろう――なのです！　よく聞くのです。この旧市街はずっと先に進むと、まわりまわって、やがてクリスタル神殿の裏口につながってるのです」
「――っ！」
アルハナーレムはミースの話を最後まで聞かず、
「そ、それはまずいのである！　あの神殿に近づかせてはいけないのである！」
「そうなのです、だからもう忍者ごっこはおしまいなのです。ふたりに合流するのです！」
「うむ！　あいわかったでござるのである！」
と、そろって旧市街の入り口に突入した。

もちろん宙に浮かぶ少女も、そのあとを追う。

ユーリィたちは急に不安になって立ちどまった。

うす暗い路地をぬけたとたん、目の前の様子が一変したのだ。

建物の壁はどれも汚れ、路面のいたるところに苔が生えている。鉄柵は錆びて赤黒く輝きを失い、ゆがんで朽ちかけているところも多い。あたりには異臭もたちこめ、人の住んでる気配がまるでしない。

あの華やかな光景の街の裏側に、どうしてこのような場所が放置されたままになっているのだろう——そんな疑問を抱きながらもユーリィたちは父の姿を追って、ふたたび歩みを進める。

街の奥へ奥へと進むうちに、ふと、追っていたはずの父の姿が見えなくなっていることに二人は気づいた。

「おとーさん……見えなくなっちゃったね」

「ねぇユーリィ、戻りましょうよ。約束した広場で待ってれば、きっとおとーさんは戻ってくるよ」

チェリンカがふるえる声で、ユーリィを引きとめようとする。いかにも幽霊がでそう

な気配に、すっかり怯えてしまっていた。
いや、それだけでなく彼女は胸さわぎもしていた。頭の中で女の子の声がしたときより不安がかきたてられているらしく、しきりに警戒してきょろきょろし、その表情にも落ちつきがなくなっている。
あまり胸のどきどきがつづくと、自分の体はどうにかなってしまうかもしれない——そんなおそれをチェリンカが抱いたときである。
「あ、誰かいる！」
「ひゃっ！」
チェリンカは、ユーリィの大きな声で飛びあがりそうになった。
「もう！　おどかさないでよ——」
抗議しかけると、ユーリィはチェリンカを置いて脱兎のごとく駆けだしていた。
チェリンカもすぐにあとを追う。
「待ってよ！」
ユーリィは、さらに暗い路地へと駆けこんだ。チェリンカもつづくと、ほとんど光のさしこまない路地の奥に人が立っていた。ユーリィたちと同い年ぐらいの男の子だ。
「！」
チェリンカは息を呑む。一瞬、幽霊のようにも見えたからだ。

青白い肌に、痩せこけた体。髪は長くざんばらで、まとう衣も粗末で黒ずんでいた。どこかこの〝見捨てられた街〟の空気になじんでいる。

「ねぇ、逃げないでよ。聞きたいことがあるんだ」

ユーリィが何の抵抗もなく、その男の子に話しかける。

「ぼくたち、おとーさんを捜してるんだ。見なかった？　誰かここを通らなかった？」

男の子はおびえたように首を振った。

「……い、いないよ。ここに入ったらみんな終わりなんだ。もう出られないんだ」

「えっ？」

ユーリィは唐突な彼の返事に驚いた。男の子の口から出てくる言葉は、とても同い年くらいの子供が話す内容に思えない。

「きみらも、教皇様に逆らったんだろ？　嫌われたんだろ？　だからここに入れられたんだろ」

「どういうこと？」

ユーリィはさらに男の子に歩みよった。おびえきったその子はあとずさり、何かに取り憑かれたようにくちびるを激しくふるわせる。

「きょ、教皇様は……いい人なんかじゃないんだ。ぼくは知ってるんだ。聞いちゃったんだ。神殿の中にもぐりこんだら、教皇様が悪いことたくらんでる話をしてたんだ。ほ

んとだよ。だからぼく、捕まって、この裏街道に閉じこめられちゃったんだ」
「えっ？　教皇様に……」
ユーリィは自分の理解を超えた話にとまどいつつも、理解できる範囲で、
「うん。あんなこわい顔した人なら、やりかねないよね――」
と、あっさり納得した。
こんどは男の子が目を丸くして驚く。
「き、きみ……信じるの？　ぼくの話、信じてくれるの？」
「え、えーっと……よくわかんないけど……でも、そんな気がするから……」
ユーリィはちょっぴり自信なさげに答えた。
だが目の前の男の子は、期待するまなざしをやめない。もし、ほんとうにユーリィが信じてくれたのなら、ぼくは救われる――。孤独だった男の子が、同じ気持ちを持つ仲間を求めるような目を向けてくる。
ユーリィはそれに応えてみたくなった。根拠はなくても、自分もそう感じたから――胸の中でつぶやいてみたとたん、急に口をついて出る言葉にもはずみがついたらしい。
「あの教皇って呼ばれてたえらい人、ぼくもこわかったんだ――だから、きっと悪い人なんだよ！」
そう言いきったときである。

街中に、あの鐘の音が爆音のように轟いた。
「うっ！」
「あひっ！」
ユーリィと男の子が、同時に耳をおさえて苦しみだす。
「ちょ、ちょっとユーリィ？　どうしたの、大丈夫？」
ふたりの会話を見守っていたチェリンカが、よろめいたユーリィを支えるようにそばによった。
轟音がつづく。四の刻である。
「い、いたい、頭がいたいよぅ！」
「あうっ、うあぁぁ……」
もがき苦しむふたり。だが、チェリンカは平気だった。胸のどきどきもしずまっている。
「ユーリィ、ユーリィ！　しっかりして！」
チェリンカは、地面に倒れたユーリィの背中をゆさぶりつづける。すでに気を失ってしまったのか、ユーリィからは反応がない。
男の子も、ユーリィと同じように地面にうつぶせになっていた。
が——やがて、何事もなかったかのようにゆっくりと立ちあがる。鐘の音は鳴り終わ

っていた。
「……フッ、おれがバカだったよ。あんないい人のこと、悪く言うなんて」
「えっ？」
チェリンカは顔をあげて、男の子を見つめた。立ちあがった男の子の口調が、まるで変わってしまったからだ。おびえも消え、堂々とした態度でふたりを見おろしている。
「おれはこれから神殿に行くよ。いままでのことを反省して、教皇様のために働くんだ。見てろよ、この体を鍛えて教皇様に逆らうやつを殺す、強い神官になってやる！　そうすれば、もう貧しい暮らしなんてしなくていいんだ。親なんかいなくったって、立派にやっていけるんだ！　あはははは！」
男の子は何かに取り憑かれたように高笑いした。
「じゃあ元気でな。お前たちも、早く教皇様の家来になったほうがいいぞ」
「け、家来？」
「いのちが惜しければな――」
と、言い残して、男の子は暗い路地から出ていった。
チェリンカはそれを呆然と見送った。何か言いかえしたかったが、いまはそれよりもユーリィのことが心配だ。
「ユーリィ、ねぇ大丈夫？　どうしちゃったの？」

ふたたび、倒れたユーリィの背中をゆさぶったときである。
鐘の音とはまた別の、激しい爆音がすぐ近くで炸裂した。
「きゃっ！」
こんどは何？　チェリンカが目をみはると、路地の奥の壁が吹っ飛ばされ、大きな穴が開いていた。そして土煙がたち昇る穴の向こう側から、巨大な物体が飛びだしてくる。
「――っ！」
チェリンカは硬直した。目の前にあらわれたその大きな物体は――牛のような巨体に河馬のような大きな貌、紅いたてがみをもち、頭には二本の青い角をとがらせた怪物だったのだ。
〝ウオオォォン！〟
怪物はうなり声をあげ、チェリンカたちに敵意を示す。
――逃げなきゃ！
チェリンカは、気絶したユーリィを抱えあげようとしたが――子供の力ではかなわなかった。
怪物は、涎をしたたらせながらさらに近づいてくる。
食べられてしまうのだろうか……。

チェリンカは恐怖をおぼえ、気絶しているユーリィの体にしがみついた。ユーリィだけは守りたい――双子の姉として、そんな意地を見せようとしたときである。

ズバァァ――ン!!

どこからともなく飛んできた雷撃が、怪物の顔面に命中した。

怪物はのたうちまわり、その場にひっくりかえった。チェリンカはその雷撃が飛んできた方向を見る。

「ミース！　アル！」

緊張したチェリンカの顔がほころんだ。ふたりが駆けつけてくれたのだ。

「ミースたちがきたからには安心なのです！」

「チェリンカ、ユーリィを連れてここから離れるのである！」

「うん！」

チェリンカはアルハナーレムの声にうなずくと、気絶しているユーリィの頬を思いっきり平手で打った。パチーンと力強い音が響き、ユーリィが一気に目を醒ます。

「……あ、あれ、チェリンカ？　どうしたの？」

「寝ぼけてないで、さっさと起きる！」

号令のようなかけ声とともに、ユーリィは抱き起こされた。心ぼそさがなくなれば、急に力もわいてくる。チェリンカはユーリィに肩を貸してミースたちのもとに駆け戻ろ

うとする。
だがそのとき、ひっくりかえっていた怪物がすばやく体勢を立て直した。逃げだしたユーリィたちの背後に襲いかかってくる。
「チェリンカ！」
アルハナーレムが叫んだ直後――チェリンカに肩を借りていたユーリィが身をひるがえし、うしろに迫った怪物に向かって駆けだす。
「ユーリィ！」
立ち止まって振りかえったチェリンカが、その背中を目で追う。
目が醒めたユーリィはチェリンカを守ろうと、怪物の注意をそらす行動に出たのだ。
その小さな体が怪物の目の前を横切って奥に走り去ると、
〝グアアアァァッ！〟
怪物はチェリンカからユーリィに向き直った。
「ユーリィ……」
立ち止まったままのチェリンカが、心配そうにユーリィの姿を見守る。
だが、ユーリィは果敢に怪物に挑んだ。
「ハアッ！」
腰にさした短剣を抜き、ユーリィは地を蹴って跳躍する。宙を舞い、そのまま怪物

に飛びかかっていった。
「援護するのですっ！」
ミースが魔石を、怪物めがけて投げつける。つづいてアルハナーレムも杖をかざし、ふたたび雷撃を放った。離れた場所ではチェリンカが、ペンダントのクリスタルを握りしめて祈りつづけている。
集中攻撃を浴びた怪物は悲鳴をあげた。
「でやああっ！」
ユーリィが、短剣で怪物の横っ腹を切り裂く。もがいた怪物はそのまま地を転がった。
――いまだっ！
ユーリィは怪物の腹の上に飛びのる。そこには紅いクリスタルが埋め込まれていた。
（何だろ、これ？）
ユーリィは心の中で自問した。すると、

〝――それを、打ち砕いて！〟

急に女の子の声が、頭の中に響いた。
（えっ、だれ？）

と問いかえしたかったが、迷っている暇などなかった。苦しみながら手足をばたつかせる怪物の腹の上にいるのだ。そいつはすぐにもユーリィを払い落とし、起きあがらんとしている。

――きっとチェリンカの声だ！　チェリンカが、ぼくに教えてくれたんだ！

そう思ったら、勇気と力が全身にみなぎってきた。

ユーリィは短剣をかまえ、

「うりゃあああああ――っ！」

紅いクリスタルめがけて振りおろした。短剣の切っ先はクリスタルの表面を砕き、奥深くに突きささっていく。

〝グガアアアアアア……〟

あおむけになった怪物が断末魔の叫びをあげた。

5

ぴく、ぴくっ――と痙攣したあと、怪物の動きが止まる。

紅いクリスタルを突き刺したユーリィは、ゆっくりと顔をあげ、短剣をひきぬいた。

そして怪物の様子を確かめた。アルハナーレムたちも攻撃をやめて、しずかに見守って

いる。

だが、怪物は二度と動かなかった。

ユーリィは振りかえってアルハナーレムたちに笑顔を見せる。

アルハナーレムとミースは飛びあがってよろこぶ。その奥に立つチェリンカも、ほっとした表情を見せた。

「わぁーっ、ユーリィ！　やったのです、強い子なのですっ！」

「へへ……」

あおむけになった怪物のそばにやってきたアルハナーレムとミースから誉められ、ユーリィは照れ笑いを浮かべる。素直にうれしかった。

でも、チェリンカが陰から見守ってくれていたから強くなれた気もする。

「しかし、こんなやつが潜んでいやがるとは……驚いたもんです」

ミースはあらためて怪物の亡骸に目をやり、感心したようにつぶやいた。

「うむ。早めに、ここから立ち去ったほうがよいであるな」

「でも、おとーさんがまだ見つかってないよ――」

ユーリィが、アルハナーレムの話をさえぎるように怪物の腹から飛びおりた。

――と、その足が地面に着地したときである。

「あっ……」

それまで生き物だと思っていた怪物の巨体が、空気中に溶け込むようにうすれはじめた。

「ゆ、幽霊……だったの？」

ユーリィが呆然とする。

「いや……これは、造られたものであるな」

「えっ、つくられた？　誰に？」

ユーリィは、アルハナーレムに訊ねた。

「おそらく、怪物の腹に埋めこまれた紅いクリスタル……それを生成した不届き者になるのであるな……」

「紅いクリスタルを生成した……」

アルハナーレムの言った言葉の響きに、なぜかおそろしさが感じられる。ユーリィは神妙な面持ちで怪物に視線を戻した。

巨大な牛の姿をした怪物の亡骸は、目の前で完全に消滅してしまった。

「さあ、長居は無用である」

アルハナーレムがきっさときびすをかえす。ミースもそのあとにつづく。

ユーリィだけが、まだ立ち去る気になれず怪物の消えたあたりをぼんやり眺めていた。

紅いクリスタルって、何だろう……。

自分の知らないところで、大きくてこわい何かが動き出してるような気がする。その正体がわからないから、よけいに体のふるえも止まらない。

やがて目の前に、現実ではない風景が浮かびあがってきた。

落とし穴のような、頭の中に描かれた恐怖の象徴——深くて底の見えない真っ暗な世界。それが口をいっぱいに広げて、ユーリィを呑みこもうとしてくる。しかも誰かの声が、この穴の中に落ちてしまえと誘っている——そんな恐怖にみちた空間を思い浮かべてしまい、ユーリィは怖気立った。そのとき、

「ユーリィ、どうしたの？」

チェリンカの声がして、ユーリィはびくっと我にかえった。

隣を見ると、心配顔のチェリンカが立っている。ほっとした。現実には落とし穴などできていない。

「ううん、なんでもないよ」

そう答えて、ユーリィはチェリンカといっしょに路地から立ち去ろうとする。

——が、その視界の隅に気になるものを発見した。

「っ!?」

ふたたび立ち止まり、ユーリィは目を見開く。

「ユ、ユーリィ？」

何かあったのと訊ねかけたチェリンカだったが、すぐに彼女も気がついた。
激闘のあとを物語る瓦礫の散らばった暗い路地に、新たな異変が起こったのだ。
きらめく輝きをまとった人影が宙に浮かんだ状態で、ふたりの前にあらわれてくる。
「……えっ？」
ユーリィがそれを見つめながら声をあげた。隣のチェリンカは、
「ああっ！」
と、もっと大きな声をあげた。
立ち去ろうとしたアルハナーレムとミースがその声に反応する。
「どうしたのであるか？」
「また、何かいるのです？」
アルハナーレムとミースがそう言いながら戻ってきた。
しかし、ふたりの声が聞こえなかったくらいユーリィたちは前方に釘づけだ。
ユーリィたちの目の前には、ひとりの女の子が立っていた。光の中に浮かぶ彼女は、ユーリィたちよりちょっと年上に見える。
高貴な法衣をまとい、どこか悲しげな瞳をこちらに投げかけていた。彼女のくちびるが動く。何かを話そうとしているかのようだ。
「ひゃっ……」

チェリンカの顔がみるみる青ざめる。
次の瞬間、
「でっ、でたあああぁぁぁぁ――――っ！」
チェリンカはすっとんきょうな声をあげて、ユーリィの手をつかむと狭い路地の出口めざして駆けだす。
「ん??」
置き去りにされたふたりは、きょとんとして顔を見あわせた。どうやらアルハナーレムとミースには何も見えていないらしい。
「でた、でたっ、幽霊だよっ！」
「えっ、チェリンカにも見えたの?」
手をひっぱられるユーリィが訊いた。
「見えたよ！　だからはやく逃げよ！」
チェリンカは、ユーリィの手を引いて走りつづける。
そのとき――幽霊は仲良くなりたいのかもしれないと言ってくれたアルハナーレムの助言も思い出す。それにしたがい、なるべく幽霊の女の子をちゃんと見たかったチェリンカだったが、実際に目撃してしまうとこわいという感情のほうが勝ってしまった。
「いやあああぁぁぁぁぁーっ！」

——やっぱり、こわい！

チェリンカはうしろを振りかえらず、明るい場所に出ようと大通りをめざす。

あともうすこし、というときだ——そこに、ぬっと大きな男の影があらわれた。

「あうっ！」

チェリンカはその誰かとぶつかり、反動で尻もちをついてしまう。

痛みをこらえていると、ふいにいやな予感がよぎる。

もしかして相手は——また、教皇なの!?

おそるおそる、チェリンカはその人の顔を仰いだ。

いやな予感はすぐに消えた。彫りが深くてたのもしい——子供たちのよく知る顔が、くっきりと見えたのだ。

「おとーさん！」

チェリンカはよろこんで、飛びあがるように抱きついた。

「お前たち！　どこに行っていたんだ！」

ラトフが心配した声をあげて、チェリンカを抱きとめる。

ユーリィも、「わぁ～っ」とよろこんで父に飛びついた。

「だいじょうぶか、チェリンカ」

ラトフはその大きくて太い腕で、チェリンカを抱えあげる。

「おとーさん、どこへ行ってたの！」
チェリンカは抱えあげられたとたん、甘えた声で父の肩にしがみついた。
「あーっ、ずるい！　ぼくも！」
ユーリィは、ラトフの足元で何度も飛び跳ねてアピールする。
「なんだ？　どうしたんだ、ふたりとも」
笑顔で言って、ラトフはもう片方の腕でユーリィも抱えあげた。大きな腕に抱えあげられたユーリィは、安心したように父の胸でほほえんだ。
「もう！　ラトフ様！　遅いのです。どこをほっつき歩いていたのですか!?」
遅れて到着したミースが、小うるさい小姑のように責めたててきた。
「いや、待ってくれ――わたしはずっと約束の場所で待っていたんだが」
「えっ？　約束の場所で？」
ラトフの言葉に、ミースは目をぱちくりさせる。
子供たちを両腕に抱えながら、ラトフは自分の行動を説明した。
「いくら待っても子供たちが来ないから、もしやと思い、旧市街に向かったら――アルとミースが入っていくのを見かけてな。それで、あとを追いかけてきた……」
「ふーむ……」
ミースは腕を組んで考えこみだした。

すると近よってきたアルハナーレムも、
「ふむふむ……それでは謎が残るのである。さきほどユーリィたちが追ったラトフ様は、何だったのであるか？」
と、同じく腕を組んで考えこみだす。
「おそらく、最初に予測したとおり……幻だったのですよ」
ミースがアルハナーレムの問いに答えると、
「ん？　幻？」
こんどはラトフが険しい顔になった。
「あ、いえ、何でもないのです！　こっちの話なのです」
ミースはあわてて手を振る。
「そうである。ユーリィとチェリンカをしっかり見守ると約束したのに、よけいな心配をかけて申し訳なかったのである」
アルハナーレムも話をそらすように頭をさげる。
ふたりとも、ラトフの心配の種を増やしたくないと思ったらしい。
「まあいい……」
ラトフはそれ以上聞くのはやめ、きた道を引きかえそうと歩きだした。
「迷子にならないうちに、こんなところから出よう――わたしはここへくる途中、道し

るべを何カ所かに置いてきた。それをたどれば街に戻れるはずだ」
「ふひょー、さすがラトフ様なのです！」
「昔とかわらず、ぬかりのないお方なのである」
ミースとアルハナーレムは感心しながら、あとを追ってくる。
ラトフは途中で立ちどまり、
「さあ、おまえたちも自分の足で歩きなさい」
と、自分の両肩に担ぎあげていた双子をしずかにおろした。そしてふたりの子供が地に足をつけたときである。

――ガゴオォォーン……。

近くの神殿から、鐘の音が響いた。五の刻だ。
その刹那、
「うっ……うわあぁぁぁーっ……」
鐘の音を聴いたユーリィが、ふたたび苦しみはじめた。
「やだ、ユーリィ、どうして!?」
チェリンカが悲痛な面持ちで首を振る。

ラトフたちも、あまりに突然の出来事に息を呑む。
だが、平気な様子だった大人たちにも異変が訪れた。
「うっ……」
「な、なんですか、これ……」
「……か、鐘に……よからぬ音がまじっているのであ……ぬあぁっ」
ラトフをはじめ、アルハナーレムもミースも、鐘の音を耳にして頭痛を起こしたらしい。三人とも頭を押さえ、立っているのがやっとの状態になる。
一方のユーリィは鐘の音を聴くたびに痛みが激しくなってきているのか、地面にうずくまって体をぴくぴくと痙攣させていた。
「うあぁぁっ……」
――誰かが、この穴に落ちてしまえと誘っている！
脳裡に描きだされた落とし穴の幻像が、ユーリィを苦しめていた。
彼は自分を誘ってくる正体不明の力と懸命に闘う。そいつの言いなりになりたくないと拒みつづける。
鐘の音がつづく。三回、四回……。
大人たち三人も身動きできず、脳裡を直撃する洗脳の声と必死に闘っていた。それぞれに身をふるわせ、うめき声をもらす。

チェリンカは呆然として、ほかの四人が苦しむ姿を見つめていた。
遂にユーリィが力尽きたように、ぴくりとも動かなくなってしまう。
「ユ、ユーリィ、ユーリィってば！」
ただひとり無事なチェリンカは、ユーリィの背中をいつまでもゆさぶり続けた。

第二章　囚われの母

双子のことは、勘づかれてしまったのでしょうか……。
もしそうだとすると、いままでのような平和な日々は望めなくなります。
心配になったわたしは、双子のもとをいったん離れて様子をさぐりに行きました。
たくさんの人が信仰に入る、あやしき塔の中に……。

1

そこは神殿の中でも、最高位の者しか昇ることを許されない領域であった。
王都を一望できる尖塔の最上階こそ、レベナ・テ・ラの支配者のみに与えられた聖域だ。天空の月へも近づき、みずからが神となれる場所でもある。
ガルデス教皇はその天守を拠点にして、自身の驕慢をみたす計画をくわだてていた。
すべてにおいての勝利。
己が絶対の世界。
その野望の実現は、決して遠くない。着実に訪れる未来なのだ。
こうして闇夜に光る〝紅い月〟を眺めるいまも、そのことを実感できる。
神殿の最上階に張り出した楼台に立ち、ガルデスは満足げに嗤う。
そこは飾り石と大理石を贅沢に使い、天井画までしつらえられた宮殿と見紛うばかり

の豪奢な展望室だった。
ガルデスの隣には腹心のクー・チャスペルがたたずみ、同じく紅い月を見あげている。
「失態であったな――チャスペル」
広い最上階の空間に、教皇のしわがれた声が響いた。
「処分はいかようにも……」
チャスペルは死の刑をおそれず、落ちつき払った声を獣の貌をした仮面から発する。
ガルデスは、にやりとした。
「いや、アレを見つけた以上――お前にはやるべきことがあるはず。処分はそのあとだ」
「承知つかまつりました、猊下」
チャスペルはかしこまって一礼する。
「あの女がどれほど優秀であろうとも、そろそろ……な。かわりはいくらでもほしいものだ」
ガルデスが口にした望蜀は、チャスペルにもよくわかっている。
「新たな素材としての質に、アレは何ら問題はないかと……」
それを聞いてガルデスは高らかに嗤った。
「ふはははっ……血はかくも濃いものよ。よくぞ我が造りし怪物を一撃で粉砕したもの

だ。いい素材に育っておる。さぞや楽しませてくれよう……」

さらに楽しみは、もうひとつとってある。

ぎろりと、ガルデスは視線を奥に向けた。最上階の中心に位置する部屋だ。何か大事なものでも納めてあるのか、その部屋の扉は固く閉ざされている。

「大事なお方に、今日のことをご報告せねばならんな……」

不敵な笑みをもらしたガルデスは腹心のチャスペルを伴って、その部屋の入り口へと向かった。

そこは禍々しい力で満たされた部屋だった。

ガルデスの双眸と同じ、鮮血を思わせるような赤色が部屋全体を染め、中央にはその原因ともいえる紅いクリスタルが毒々しい輝きをあたりに放っていた。

紅いクリスタルの中には、ひとりの女性が閉じこめられている。

彼女は囚人のような灰色の薄着をまとい、石像のごとく微妙だにしなかった。一見して死んでいるかに見えるが、その華奢な体からはわずかに鼓動の響きが伝わってくる。

そして女性の鼓動と呼応して、クリスタルの紅い光が明滅をくりかえす。まるで生命を吸いとっているかのように……。

部屋に入ってきたガルデスは、
「この女が生みだす力、永遠であればよいのだがな……」
紅いクリスタルに向かって、つい本音をもらす。
この女性こそ、すべての力の源。野望を実現させるための触媒である。
ゆえに生かさず殺さず、永く力の提供をつづけてもらうためには心を絶望で塗り固め、だが、一筋の希望を忘れさせてはならない。それにすがり何事をも顧みないほどに。

ガルデスは紅いクリスタルに近づき、その中で眠る女性に話しかけた。
「アーチェス様、ご機嫌いかがですかな……」
と、善人を装うような口調で話しだした。
「本日、街であなた様がお生みになった双子を、お見かけすることができましたぞ」
ガルデスの声に、それまで紅いクリスタルの中でうなだれていた女性がぴくりと反応する。
「……ユ、ユーリィと……チェリ……ンカに?」
アーチェスと呼ばれた女性のくちびるが動く。そして彼女はゆっくりと顔をあげた。
「あ……あの子たちが……」
紅いクリスタルからアーチェスの声が響く。それは消えそうなほど小さな声だった。

「ほう、あの双子はユーリィとチェリンカというのですか、ふたりとも街中を元気に走り回っていましたよ」

「……」

アーチェスはその話に、すこしだけ笑みをにじませる。

子供たちの元気な姿を思い浮かべたのだろう。母親としてのよろこびがこみあげてきたようだった。

ガルデスはそれを見逃さずに楔を打ちこもうとする。

「あの子供たちが、今後も変わらず元気に暮らせるよう……わかっておられますな？アーチェス様？」

「……」

ふいに、アーチェスからほほえみが消えた。消えたというよりも、ガルデスのひと言によってうばわれたというほうが正しいのかもしれない。

アーチェスの運命は、ここでクリスタル使いの能力を行使しつづけることだった。それによりガルデスたちは、望むままにクリスタルの奇跡を行う――。

遠い昔、そのことについて聞かされたことがある。

たしかガルデスの腹心であるチャスペルの口からだったと思う。当時、そのことに大変な危惧を抱いたはずなのに――いまは何も考えられなくなっている様子だ。

その憔悴しきった表情から、アーチェスがあまりに多くの記憶を失いかけているのがうかがえた。

「アーチェス様――教皇様からのご質問に、まだお答えがないようですが？」

ガルデスの背後から、チャスペルが促す。

クリスタルの間は静まりかえっていた。

やがてアーチェスは観念したように紅いクリスタルの中でうなずき、そして小さく口を開く。

「わ……わかって……います……わたしが……ここにいるのは……あの子たちの、幸せを……望んで……いるから……」

弱々しい返事だった。

しかしそれだけでも、ガルデスたちには満足のいく答えであったらしい。ふたりとも低く嗤い声を響かせた。

アーチェスには、ほんのすこしだけの希望を与えればよい。

――双子は元気に暮らしている――。

その情報だけで充分であった。あとはまた使命に従事してもらう。

アーチェスは、双子の幸せを交換条件にクリスタルの中に閉じこめられていることを再認識させられたのだった。

「では、アーチェス様――またご様子をうかがいに参りますので。ひきつづき我らの神のために、お働きくださいませ」

醜悪な面がまえのふたりは、紅いクリスタルに対してかるく一礼をし、部屋を去っていく。

アーチェスはふと顔をあげ、ふたりのうしろ姿をぼんやりと見送った。

その瞳に、意志はまったく灯っていない。

さっき口にした思い――それだけが、彼女のすべてだったからだ。

そんなアーチェスを、実体のない少女が見つめていた。

彼女は部屋の外に出たガルデスたちが扉を固く閉じたのを確認したあと、その半透明の姿をあらわす。

（……アーチェス先生……）

魂だけの存在の彼女は、紅いクリスタルの前にすーっと移動した。

（わたしのことが、わかりますか？）

少女が問いかける。

しかしアーチェスは虚ろな表情のまま、しばらく反応がなかった。

やがて、

「……テ……テ……オ様……」

思い出そうとする意志があらわれてくる。

断続的な声だったが、半透明の少女はそれで充分ですと言いたげにかぶりを振った。

(はい……そうです。テテオです……アーチェス先生、思い出してくださったんですね)

泣きそうな声でつづける。

その念話が届いたのか、虚ろだったアーチェスの顔にほのかな笑みが浮かんだ。

テテオはそれを見てうなずく。何度もうなずきかえす。

もし生きていたころなら、ぽろぽろと涙がこぼれ出ていたことだろう。しかし魂(たましい)だけの存在であるいまは、泣くこともできない。かわりにアーチェスやユーリィたちに何かしてあげたい、力になりたいという気持ちだけが露(あら)わになっていた。

肉体を失ってもその心や意志はたしかに、この世に存在していたのである。

(アーチェス先生、もっと……もっと思い出してください。昔のように……お願い、ご自分を取り戻して)

テテオは願った。以前の彼女を知っているだけに、憔悴しきった現在のアーチェスをとても見ていられない。

だから、アーチェスの記憶を呼び戻そうとした。

（さあ、先生。いっしょにまいりましょう……ご自分を、思い出す旅に……）

テテオは念話で、その思いを送りつづける。

すると、かすかに反応があった。

アーチェスも自分の生きてきた歩みを、みずから振りかえろうとしたらしい。ふたりの意識が念話によってつながり、そのあいだにひとつの像が浮かびあがる。

かわいい少女の笑顔だ。

それは、十三歳のアーチェスの姿だった。

2

アーチェスは礼拝のために神殿に向かっていた。

そこは、石畳の階段がつづく入り口。

見あげるほどの高さを誇る尖塔は、壮麗な城のようにも見える。

その入り口の広場に、二十代とおぼしき青年が立っていた。彼は、アーチェスもよく知る青年だ。

青年のまとう衣は、街のひとたちと同じく軽装で地味なものであったが、使われている生地は高級品で、彼の育ちのよさをうかがわせた。でも、本人はこれでも目立たない

よう努力してきたつもりなのだろう。
アーチェスは彼のそばまで歩むと、
「こんにちは、王子様――」
深くお辞儀をしてあいさつした。
「おう、アーチェスちゃんじゃないか。今日も元気よさそうだな」
王子と呼ばれた青年は明るく返事する。
「はい。おかげさまで」
顔をあげたアーチェスも、にっこりと答える。
そばによると、王子はたくましい体つきをしている。たぶん、本人が以前から話題にしているラトフという新しく王子の護衛に配属された人の影響なのだろう。
いいライバルができたんだ――。
数ヶ月前、そんな話を楽しそうにしていたのを思いだす。それ以来、ラトフという人と競いあうようにして体を鍛えてきたのにちがいない。アーチェスはそんなことを考えながら、ふと気になったことを王子に訊ねた。
「神殿の中にお入りにならないのですか？　お姉様も中で待っていると思いますけど」
「ああ。ちょっとラトフを待っててね」
王子は待ち合わせをしていたのか、遠くに視線を向けながら答える。

「ラトフさま？」
「そう、そのラトフに今日は囮になってくれとたのんだんだ。だから、ここで待っててやらないとかわいそうに思ってな」
「囮……あのう、また今日も……お城をぬけ出して来られたんですか」
半ばあきれ気味にアーチェスが言うと、王子はそれを聞いて豪快に笑いだす。
「はっはっはっ……まだ、メルチェスとの仲を反対している連中が多くてな。城をぬけ出すのも警備がどんどんきつくなって、ひと苦労だったから——今日は、ラトフに囮になってくれって、ね」
「まあ……」
あいかわらず、いたずら好きの王子様ね——と、アーチェスは心の中でつぶやく。
もちろんその言葉を口に出しても、このコルカ王子は怒ったりしないだろう。いや、それよりも王子が早口でしゃべるので、なかなか言葉をはさめないというほうが正しい。
細かいことにこだわらず、自由奔放に生きている王子だった。
アーチェスの姉で、神殿の神官をつとめているメルチェスもそんなおおらかな王子に好意をもっている。ふたりはすでに公然とつき合っていて、王宮の偉い人たちがそれに反対しているというのだが、当の王子はいっさい悩まず、むしろこの状況を楽しんでいるようなところがあった。

「おれが城をぬけ出すには、ラトフの協力が必要だと説得したら——あいつ、すっかりその気ではりきってくれてな。王子にそこまで言われたら、男として断るわけにはいかないって言いだして——助かったよ。いまの王宮の中じゃラトフだけだ、おれの気持ちをわかって、あそこまで話に乗ってきてくれるやつは——なかなかいないぞ、ああいう男は」

と、王子はしきりに感心した顔でひとりごちる。

それだけで終わればいいのだが、直後に王子はあることを思い出したようにアーチェスに切りだした。

「おう、そうだ。アーチェスちゃん、もうすぐラトフもここにくるから待っていたらどうだ？　前にも言ったが、おれはアーチェスちゃんとラトフはなかなかのお似合いだと思ってるんだ」

「ま、またそのお話ですか!?」

アーチェスは王子に言われたとたん、急に顔を赤く染める。

じつは、先日から姉のもとを訪ねているコルカ王子には耳にタコができるくらいその話を聞かされているのだ。アーチェスもそろそろ年頃なだけに、コルカ王子から何度もラトフの話をされていると妙に意識もしはじめてくる。

ゆえに恥ずかしさがこみあげてしまい、

「わ、わたしは礼拝にきたので――こ、これで失礼します」
ぺこりと王子に頭を下げ、あわてて神殿の入り口に向かおうとする。
「おいおい、アーチェスちゃん。つれないことを言わないでくれよ」
と、王子が引きとめようとしたときだった。
アーチェスが王子の前から立ち去ろうと向きを変えたとたん、そこにコルカ王子よりがっちりして背の高い青年が立っていたのだ。
「あっ……」
アーチェスは、まさかこの人が――という思いがして全身がびくっと固まってしまう。
目の前の体格のいい青年は、そんなアーチェスの様子にすこし首をかしげながら通りすぎたあと、
「遅くなりました、王子――」
と、芯の強さを感じさせる声を響かせた。
背中で聞いていたアーチェスは確信する。
やっぱり、いまの人がラトフさん……。
でもラトフに対する興味を持ちはじめている自分に気づき、さらに恥ずかしくなって走り去りたい衝動にかられる。
それを強引にとめたのはコルカ王子だ。

「ほら、アーチェスちゃん！」
うしろからコルカ王子に両肩をつかまれ、くるりと体をラトフのほうに向けられてしまった。そしてアーチェスの耳元でコルカ王子が言う。
「こいつが、噂のラトフだ――」
「あ、はい――は、はじめまして」
すっかり緊張したアーチェスは、反射的に挨拶をする。
あらためて見たラトフは、鍛えぬいた大きな体に騎士の鎧をまとっていた。短い髪に彫りの深い顔だち。目には強い意志を示すような力が感じられる。
そんなラトフに向かって、コルカ王子が言った。
「ラトフ。こちらのお嬢さんは、おれが将来を誓い合ったメルチェスの妹、アーチェスちゃんだ」
「おお、それは――お初にお目にかかります、ラトフと申します」
紹介を受けたラトフは、律義に一礼して挨拶した。
「ちょっと待て。ラトフにアーチェスちゃん。ふたりとも、なんだか堅苦しい挨拶をしてないか？」
ふたりのあいだに割って入るように、コルカ王子が不満そうな顔を浮かべる。
その態度にラトフは意味がわからず目をしばたたかせ、一方のアーチェスはいまだ緊

張して固くなったままだった。
「王子、堅いというのはどういうことでしょう？」
真面目な顔でラトフが訊ねる。
コルカ王子は腕を組んですこし考えたあと、
「いや、まあいいだろ。おれも最初はメルチェスと、こんなものだったかもしれないしな」
「はあ……？」
「うん。とにかく、ふたりの仲はこれからだ。ラトフ、アーチェスちゃんのことをよろしくたのんだぞ」
「わかりました――」
ほんとうはよくわかってなさそうだったが、勢いにつられたようにラトフは返事する。
たのまれたことは快く承諾するという、王子への信頼感があった。
「よし、じゃあ今日もメルチェスに会いに行くか！」
コルカ王子は胸をはって、ラトフとともに神殿に向かいだす。
そのあとにつづくアーチェスは、やっと自分の話題から解放されて安堵の息をついた。

神殿の中はしんと静まりかえっていた。

大聖堂は天井が高く、訪れた人々が自然に上へと目を向ける視線誘導の構造になっている。太いアーチ状の柱は幾本も交差して、集中線を描きだすように尖塔内の途中まである高さの天井を支えていた。それは神のいる天に、より意識を近づけていくための仕組みといっていい。

広い大聖堂に入ってきたコルカ王子たちは奥に向かった。

奥にある後陣は半円形の空間になっており、その中心には祭壇が設えられている。それに向かって並べられた長椅子に腰かけた多くの人々が、しずかに祈りを捧げつづけていた。

三人が厳かな空気の中を歩むと、途中にあった扉のひとつが開き、中からたくさんの神官をともなった豪奢な法衣姿の大男が姿をあらわした。

それは、病床に臥した教皇に代わって神殿での祭事をすべてとりしきるガルデス司教であった。

髪はすべて白髪で、二つの角を形づくるかのごとく逆立っており、目は充血したかのように赤みを増してぎらつき、表情には醜悪ないやらしさがにじみ出ていた。

「おぉう、これはこれは！　コルカ王子ではございませんか！」

先頭を歩むガルデスは、コルカ王子の一行に気づくなり大声で近づいてくる。

「ガルデス――」
コルカ王子は足をとめ、いやなやつに見つかったなと言いたげにすこし顔をそむけた。
しかしガルデスは構わず、ぐんぐん歩みよってくる。
「はっはっ。いやぁ、王子が神殿の中までいらっしゃるとは珍しいですな。何か特別なご用件でも？」
「いや、特に……ないんだ。ははは……まあ、その……」
「礼拝にいらしたと？」
「ま、まあ……そんなもんかな」
「しかしお顔には、そんなことは書いてありませんぞ」
「えっ？」
驚くコルカ王子に、ガルデスはしたり顔をする。
「くっくっくっ……すべて、このガルデスめはお見通しでございますよ。ええ、よろしいでしょう――おいっ！」
「はっ」
ガルデスに呼ばれて、整列して待っていた神官たちの中から、ひとりが出てくる。そして、ガルデスの前でひざまずいた。
「こちらの王子と、それからメルチェスを呼んで、奥の『接見の間』にご案内しなさい」

「いや、ガルデス、それは」
「いいのですよ。メルチェスの仕事は、ほかの誰かに交代させましょう。おふたりだけで、ごゆるりとお話でもなさればよろしいかと――」
「そんなことまでしてもらうわけには……」
「いえいえ、ぜひ、お使いください。その代わりあとでお父上に、このガルデスの貢献ぶりをしっかりお伝えいただければ……くっくっくっ」
ガルデスの嗤いがあたりに響いた。

「ふたりっきりで、何を話されているんでしょうね？」
椅子に腰かけたアーチェスが待ちくたびれたように言う。
そこは神殿の奥にある、王族や特別待遇の来客に応対するための接見の間の前だった。
ガルデスが用意した接見の間に、コルカ王子とメルチェスはいた。
ふたりの話が終わるまで、アーチェスとラトフは部屋の前で待機することを許されていたのだ。
神官のひとりが用意してくれた椅子のひとつにアーチェスは腰かけていたが、ラトフは部屋の扉を背にして立ったまま見張りを務めている。

しばらくして、
「おそらく……王政の今後、とか……」
と、ラトフがつぶやいた。
アーチェスは思わず首をかしげる。
「いや、さっき……おふたりは何の話をしているかと、聞いてきたから……」
ラトフはぼそっと、付け加えた。
やっと意味がわかったアーチェスは、ぷっと吹き出しそうになる。
あのふたりが、そんな話を熱心にしているはずがない。
メルチェスはふわりと宙を舞いそうな軽やかな長い髪に、アーチェスをもっとやさしくした温和な顔だちをしている。
そのほほえんだまなざしに、コルカ王子はすっかりまいってしまっているのだ。
現にさっきも姉と会ったとたんに、
「はっ、ははははっ……いや、その、なんだ……えーっと、なんだっけ？」
「わ、わたしたちに……」
「聞かれても……」
と、アーチェスとラトフが困った顔でいっしょに首を振るくらい、コルカ王子はメルチェスに夢中だった。

とてもお堅い話など長くはつづけられまい。
それをラトフは、真面目な顔をして言ったのだ。
「そんなおもしろいことをおっしゃる方だとは思いませんでした」
「おもしろいことを言ったつもりはないのだが」
「……ごめんなさい」
アーチェスは、むっとしているラトフに頭をさげた。
「あのう……それよりも、ずっと立っていて……お疲れになりませんか？」
扉を背にして立つラトフは首を振る。
「わたしは、王子の護衛だ。座るわけにはいかない」
「真面目なお方なんですね。ずっと、笑顔もお見せにならないし……」
「ん？　そ、そうか？」
すこしばかり、ラトフはとまどいをみせた。
「ええ、ちっとも笑顔を見せてくださいません……」
アーチェスが残念そうにつぶやく。
思えば最初に神殿の前で会ったときから、ラトフは一度も笑っていない。職務に熱心な人だというのはよくわかったが、あの無邪気で明るすぎる性格の王子を前にして一度たりとも吹きださない——いや、くすりとも笑みをもらさないのはちょっと変だ。

アーチェスはそんなラトフのことが気になっていた。
やがて、ラトフがぽつりとつぶやく。
「すまない。笑ったことがあまりなくてな」
「それは……寂しいですね」
「寂しい？　どうして」
「だって、笑いたいときには笑うと、元気になれますもの」
自信を持ってアーチェスは言った。
だが、どう受け止めていいかわからない様子のラトフはうつむいてしまう。
「すまない、わたしにはよくわからないのだが……」
「……」
アーチェスは、ふいに黙りこんでしまった。
ちょっと、悪いことを言ってしまったのかも……。
そんな反省を感じるのと同時に、このラトフをいつか笑顔にさせてみたいなと思いはじめている自分もいた。
アーチェスは胸の中に、いままでとはちがった感情が芽生えはじめているのに気づく。
そして、その正体を探ろうとしていたら——。
「……ん？　どうしたんだ？　急に、顔が赤くなったぞ？」

いきなりラトフに指摘されてしまった。
「えっ！　いえ、あの――な、何でもないんです！」
あわてて首を振る。おかげでアーチェスは、よけいに顔が赤くなってしまったらしい。
「お、おい!?　ますます顔が、真っ赤になってきてるぞ！　もしかして、それは――」
「えっ？」
アーチェスはぎくりとする。
ラトフに勘づかれて、それを口にだして言われてしまうのではないか――そう思うと、胸がどきどきしてきた。
しかし、
「急に――熱が出てきたんだな？　よし、わかった。どこかで休むか？　何だったら、誰かに頼んで、すぐに医師を呼んできてもらうぞ――」
ラトフはべつの方向に勘違いして、アーチェスのことを心配しだした。
「いえ！　熱なんかありません！　だ、大丈夫です！」
「ほんとうか？」
「――は、はいっ！」
アーチェスはわざと大きな声を出して、元気そうにうなずく。
「そ、そうか……」

ラトフはそれで納得してくれた。
ほっとして、アーチェスが深い息をつく。
……でも、いまの真剣に心配してくれた様子は……ちょっぴり、うれしかった。
やっぱりコルカ王子が言っていたとおり、とてもいい人のようだ……。
アーチェスが心の中でそう思っていると、
「きゃあああっ！」
いきなり接見の間の中から、女性の悲鳴が響いた。
メルチェスの声だ。
「王子っ！」
「お姉さまっ！」
ラトフとアーチェスは顔を見あわせ、とっさにその扉の前に寄った。
「失礼！　入ります！」
叫ぶと同時に、ラトフは扉を開けて接見の間に飛びこむ。アーチェスもあとにつづく。
部屋の中には、メルチェスを人質にした賊の姿があった。それに対峙するコルカ王子は剣をぬいている。
「お姉さまっ！」
「アーチェスちゃん、下がってろ！」

コルカ王子が前を向きながら言う。普段とはちがう厳しい口調だ。
「王子――」
ラトフが心配して声をかけると、
「すまん、ラトフ。おれとしたことが不意を衝かれて、メルチェスを――」
コルカ王子は、賊をにらみつけながら答える。
黒い衣で頭からすっぽり覆った賊は、開け放たれた窓から侵入してきたようだ。不意を衝いたものの、王子は剣をぬいて応戦しようとしたらしい。賊がメルチェスを人質にしたことで、にらみあいの状態と化していた。
「くくくっ……王子、この女がどうなってもよいのですか？」
賊が、黒い衣の下から下卑た男の声で言う。メルチェスをうしろから抱きよせ、手甲からのびた鉤爪を彼女の喉元に突きつけている。
「おれが代わりになる！　メルチェスを放せ――」
コルカ王子が賊に近づいていく。
「王子！」
ラトフは制止しようとするが、
「いや、いいんだ。こいつの狙いは、おれなんだからな――そうだろ？」
覚悟を決めた表情で、コルカ王子は賊にたしかめる。

「よろしいでしょう……」
賊が答えて、片手でコルカ王子を招く。うなずきかえした王子が、メルチェスと入れかわろうとゆっくり歩みだす。
「お、おやめください、王子様……わたくしなどのために、そのようなことは……」
人質のメルチェスが、懸命に首を振る。
「だいじょうぶだ、おれは平気だから」
「で、でも、あなた様のお命が……」
メルチェスは、いまにも泣きそうな声になる。
そのときであった。
「王子、失礼します！」
いきなりラトフが叫んだ。
コルカ王子のうしろで賊の立つ位置から見えにくかったラトフは床を蹴って飛びあがり、さらに大胆なことにコルカ王子の肩を踏み台にすると、天井に向かって跳躍した。
「！」
誰もが、息を呑んで見あげる。
高く舞いあがったラトフはそのまま足をくりだして、賊めがけて降下する。
――どかっ！

ラトフは、賊に飛び蹴りを見舞った。
「うぐっ！」
賊が床に叩きつけられた。同時にメルチェスは解放され、コルカ王子の腕に飛びこむ。
あっという間だった。賊も完全に不意を衝かれてしまっていた。
「きさまの正体、見せてもらうぞ！」
着地したラトフが賊を抱え起こし、顔を覆ったその黒い衣をめくりあげようとした瞬間――。
賊はその細い体軀を利用して、するりとラトフの腕をすりぬけた。そして扉へと走る。
「待てっ！」
ラトフは追った。しかし、部屋を出てすぐのところで立ち止まってしまう。
「くっ――」
王子の護衛であるラトフは、それ以上は賊を追えなかった。
「誰か、来てくれ！　賊だ！」
ラトフは、廊下で大きく叫ぶ。
だが、誰からの返事も聞こえてこない。
「どうした！　どうして誰も出てこないんだ！　誰か、その男を捕えてくれ！」
どれほど叫んでも神殿の『接見の間』の周囲は、異様なほどの静けさを保っている。

「こ、この神殿は、どうなってるんだ――」
ラトフの声だけが、神殿の廊下に響きわたった。

3

結局、コルカ王子を狙った賊はその後も捕まることはなかった……。
「騒ぎが王宮に知れてしまいますと、王子もメルチェスに会うことが難しくなりますなあ……」
ガルデスの言葉に、王子は不承不承ながら事件を表沙汰にしないという提案を受けいれた。ガルデスの思惑がどこにあったのかは定かではない。もともと、何故、王子を狙った賊がガルデスの用意した部屋を襲ったのか……。
しかしこの事件をきっかけにして、コルカ王子とメルチェスのあいだは急速に接近し、それから間もなくしてふたりの仲は、盛大な結婚式を挙げるまでに発展した。
その結果、妹のアーチェスも王族のひとりとなり、コルカ王子から紹介されたラトフとも王宮で頻繁に顔を合わせるような間柄になった。
最初のうちは、自由を制限された王宮での暮らしにアーチェスは不満もおぼえたのだが、その後に訪れた自身の変化に心を奪われるようになっていく。

それは力の目覚めだった。レベナ・テ・ラを支える力の源——クリスタルの力を最も強く引き出せる存在——『星詠み』とも呼ばれる〝クリスタル使い〟としての覚醒がはじまったのである。

アーチェスの家系によくあらわれる力であった。アーチェスの姉のメルチェスもその力を持っていた。

やがてコルカ王子は即位し、王妃のメルチェスとのあいだにはひとりの女の子が生まれた。その名をテテオという。そしてテテオもまた、その血筋からクリスタル使いとして生を受けていた。

しかも王女は、生まれながらにしてクリスタル使いとしての力に目覚めていたのである。もしかするとそれは、母メルチェスやアーチェスを凌駕するほどの力かもしれない。

アーチェスはそんな予感を抱いた。

——が、直後に悲しい出来事が訪れる。

それは、メルチェスの死だった。

テテオを生んだあとにメルチェスは病に倒れ、まるで自分の役目を果たし終えたかのように天に召されてしまったのである。

クリスタル使いという特殊な家系に生まれたことが原因だったのか否かは定かではな

い。が、姉・メルチェスの忘れ形見であり、しかも同じ力を持つテテオをアーチェスは愛しく思い、彼女の教育係にみずから名乗りをあげた。

そして、王女の世話役となったミースとともに、テテオと過ごす時間を重ねていったのだった。

そんなある日――。

レベナ・テ・ラに近接した湖にある施設を、アーチェスと九歳になったテテオ王女は訪れることになった。

湖の中央にクリスタルの力を中心とした円筒状の巨大な施設を持つ『レラ・シエル』と名付けられたその場所は、王都を水難から守る制御装置の役割を持ち、また高度な魔法体系から学術機関としての一面も備えていた。

テテオはこのレラ・シエルを視察にきたということになっていたが、それは表向きの理由でしかなかった。

コルカ王からの厚い信頼を受けてレラ・シエルの責任者になっていたラトフは、そのことをアーチェスから聞かされて驚いた表情を見せる。

「コルカ王が……わたしに私書を？」

ラトフは緊張した面持ちで、アーチェスから一通の書状を受け取った。
そこはレラ・シエルの中にあるラトフの自室内。
ほかの誰にも聞かれてはならない話があるというので、ラトフはアーチェスを自分の部屋に招いていたのだ。
彼女とは知り合って、もう十数年が過ぎている。現在のふたりのあいだにはすっかり打ちとけた空気があった。
「私書というより、これは——」
テーブルの前に腰をおろしたラトフは、受け取った書状の封を開けながらつぶやく。
目の前にいるアーチェスは堅い表情のままうなずき、
「コルカ王からの密書です。わたしに手渡されたご本人が、そうおっしゃっておられましたから」
「密書……」
ラトフは、慎重にその書状を開いた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

『親愛なるラトフへ——
これをおまえが読んでいるころ……わたしにはもしものことがあるかもしれないので、

この私書ですべてを託しておきたい。
単刀直入に記す。視察の名目でレラ・シエルを訪れたテテオを連れて、神殿の手がおよばない遠くへ逃げてほしい。
知ってのとおり、いまの王宮はあらゆる権限を神殿に奪われつつある。
わたしの与り知らぬところでたくさんの奇妙な法案が可決され、王政は我が手から遠くに離れてしまった。
中でも、わたしが最も危惧するのはクリスタル使いに関する新しい法令だ。王都の繁栄のためと称し、
《クリスタル使いは、神殿より与えられし『使命』にその一生を捧げて従事しなければならない》
――こんな馬鹿な法令がまかり通っていいものか。
いまや王宮は乱れ、悪がはびこっている……。王宮のほとんどは、ガルデス教皇の意のままに操られていると言っていいだろう。
ラトフ……すべては、きみ自身の判断にゆだねる。もはや、きみにしか頼めないのだ。どうか、この勝手な願いを受け入れてくれ。そして運がよければ、また会おう――。

コルカ・タワンティン』

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

読み終えたラトフは、コルカ王からの書状をしずかに閉じた。
そして目の前にいるアーチェスを見つめる。
「……」
何から話すべきか迷った。
王都から離れたレラ・シエルに着任してからも、できるかぎり新しい情報を得る努力はしてきたが、まさか神殿の勢力がそこまで拡大していたとは――。
これは予想以上に、王宮は籠絡されてしまっていると考えられる。
とうとう、おそれていた日が来たのか……。
いや、なぜそうなる前に止められなかったのだ。
そう思うと同時に、ラトフの胸中には怒りがこみあげてくる。
そんなラトフの思いをよそに、アーチェスは自分の使命を果たそうと伝えるべき内容を付け加えた。
「脱出の手はずは整っています。明後日になれば、世話役のミースが必要最低限の物資を運んでこちらに到着するはずです。そのあとはラトフ様の指示にしたがえと、コルカ王からのご命令でした」
「……」

アーチェスの事務的な説明に、ラトフは眉間に皺を寄せた。
そして、こらえきれなくなった怒りを露わにするように口を開く。
「……わたしに、コルカ王を見捨てろと？」
「それが……コルカ王のご意志です」
「くっ――」
ラトフは椅子を蹴るように立ちあがる。
怒りをどこにぶつけていいか、わからない。
気を鎮めようと窓に近づき、外の景色を眺めた。窓の外にはこのレラ・シエルを囲む湖が大きく広がっている。空はいくばくかどんよりとしてきて、雨雲が近づきつつあった。
そんな空を見あげながら、ラトフはため息をつく。
気がつくと、うしろにアーチェスが寄ってきていた。
「ラトフ様……コルカ様を、助けに行きたいのですね？」
「……」
本心を言うと、そうである。
だが、親友が覚悟を決めて自分に頼んできたことの重さも、よくわかっているつもりだった。だから、すぐには言葉をかえせない。

アーチェスはそのことを見ぬいているのか、
「ここからは、すべてラトフ様の言葉にしたがいます……あなたの信じるとおりになさってください。わたしたちはどこまでも、ラトフ様について行くつもりです」
その言葉を聞いて、ラトフは深い息をつく。
まだ迷いはあった。冷静に考えれば、コルカの頼みを受け入れるのが一番であろう。だがラトフ自身、親友が苦しんでいるときに助けられないこの状況が、どうにも歯がゆくてならない。
重苦しい沈黙に覆われた部屋に、ふいに扉を叩く音が響いた。
我にかえったラトフが扉に歩み寄り、それを開ける。すると——目の前に立っていたのは、法衣をまとったテテオ王女だった。
「アーチェス先生……」
「まあ、テテオ様！」
アーチェスがあわててテテオのそばに寄って、彼女を部屋の中に招き入れる。
「……アーチェス先生、ごめんなさい……。ひとりで部屋で待っておりましたけど……気になって……」
「いいえ、わたしのほうこそごめんなさい。お話が少し長引いてしまったものだから」
アーチェスは笑みを絶やさず、テテオを近くの椅子に座らせた。

部屋に入ったテテオはテーブルの上に置かれたコルカ王の私書にちらりと目をやると、何かに気づいたような表情で、

「アーチェス先生……お父さまは、もしや……」

と、心配そうな声で訊ねた。

訊かれたアーチェスは答えにくそうに一瞬とまどったが、やがて決意したようにテテオの前に腰をおろす。

「大丈夫ですよ、コルカ様は……テテオ様を守ろうとなされているのです」

「……わたしを……逃がすために……」

神妙に訊ねかえすテテオに、アーチェスは辛くなるのをこらえてうなずきかえした。

「……」

ラトフは、ふたりのやりとりを呆然と立ち尽くして見つめる。

コルカからの私書によれば、クリスタル使いは——新しい法令によって、その自由を奪われてしまう。まさに、ここにいるアーチェスとテテオが、その対象となるのだ。

〝ふたりの幸せを願っている……〟

書状に刻まれていたコルカの思いが、ラトフの中によみがえってくる。

コルカが、愛する娘とアーチェスのために決断したことを無駄にしてはならない。

彼女たちを守れるのは、いまや自分しかいないのだ——。

「テテオ王女……」
ラトフは親友の思いを受け継ぐ決心をし、テテオの前でひざまずく。
「これからはわたしが、あなた様をお守りいたします」
王女にそう誓いをたてる。
テテオは安心したように、にっこりとほほえむ。
「お父さまからうかがっております……ラトフさま、本当にありがとうございます」
かわいらしい声が、ラトフの耳に届く。
顔をあげて、王女のことを見つめた。このとき、ラトフは自然と笑みがこぼれるような気がした。
「ご安心ください、テテオ王女……それからアーチェス、きみもだ。ふたりのことは、わたしが守り抜く――」
ラトフの言葉に、アーチェスとテテオは神妙な表情でうなずいた。

その夜、レラ・シエルには雨が降り注いだ。
空を埋め尽くした暗雲の層は厚く、毎夜の紅い月光も完全にさえぎられていた。
しかし、これはまだ前兆にしかすぎない。

翌朝からの雨は、まさに歴史を変えるほどの大きな事件を招くのだ。
そのことを、まだ誰も知らない。
一方、テテオとアーチェスの部屋では明日への希望を胸にしたふたりが就寝の用意をしていた。
「アーチェス先生……」
「はい。なんでしょう、テテオ様」
寝床の準備を整えたアーチェスが、テテオの前に腰をおろす。
そのほほえみは、テテオにとって母のような安心感を与えているらしい。彼女はアーチェスの前では王女という立場を忘れて、九歳の女の子に戻ろうとする。
もちろん、アーチェスもそのテテオの気持ちを受け入れ、彼女の前ではできるだけ形式にとらわれないよう振る舞っていた。
やがて、すこし照れたような表情を浮かべていたテテオがようやく訊ねる。
「アーチェス先生、ラトフさまとは……いつ、ご結婚なさるのですか？」
「えっ？」
思いがけないことを聞かれたらしく、アーチェスはそれまでの緊張が一気にぬけたかのように破顔した。
「そ、そうね……い、いつごろなのかしら……」

真面目に答えようとすればするほど、アーチェスは素に戻ってひとりごちる。
日頃からテテオに対して、うそだけは言うまいとつとめてきただけに、
「あ、いえ……正直に言いますと、それらしいお話はね……前にあったはず……よね、うん……そう……ラトフ様から、それに近いことを言われたような……ええ、そんな気がしています……」
しどろもどろになりながらもアーチェスは、いままでのラトフとのつき合いを頭の中で振りかえりながら答えた。
テテオのほうは、アーチェスの話の内容がよく理解できていないようで、すこし首をかしげながらも聞いている。
そんな王女の様子に気づき、
「ふふっ……でも、そろそろ……はっきりさせないといけませんね……」
アーチェスは我にかえって、急に照れ笑いを浮かべた。
そしてにこやかにうなずいたあと、
「テテオ様、ありがとう。心配してくださって……ラトフ様とは、いずれいっしょになる日がくると……わたしは信じています」
「アーチェス先生……」
安心したようにテテオが笑顔になる。

「たぶん、このたびの一件が落ちついたら……ラトフ様ともお話ししてみます。それで何か決まりましたら、まっさきにテテオ様にご報告させていただきますね？」
「まあ、ほんとうに。うれしいです、アーチェス先生！」
「ふふっ、その日がくるのを楽しみにしていてください――」
「ええ、とっても待ち遠しいです！　おふたりが結婚式をなさるときは――ぜひ、このテテオも呼んでくださいね？」
「ふふっ……ええ、もちろんですとも！」
アーチェスはにっこりして、テテオをやさしく抱きしめる。
テテオの母親も、生きていたらおそらくそうしていただろう。
「さあ、明日は長い旅の準備に追われます。もうそろそろ休みましょう」
「はい。おやすみなさい、アーチェス先生……」
「おやすみなさい、テテオ様」
アーチェスはそう言って、部屋の灯りを消す。
明日以降、神殿の手から逃れられる。
新しい生活が待っている――どんな苦労も厭わない。かならず乗りこえてみせる。
そんな自由への旅立ちを夢見て、彼女たちは眠りにつく。
しかし外の雨は、夜半すぎになって豪雨に変わった。

4

「水量調節、間に合いません！」
「ほかの水路にまわせ！　一カ所の貯水槽にためるな！」
近代的な設備を誇るレラ・シエルの第一制御室は、翌日になって緊張の度合いを増していた。
操作卓や各計器類に向かう作業員たちの声は、しだいに激しいものになっていく。
それは、いままでにレラ・シエルが経験したこともない自然の猛威との対峙であった。
とはいっても、圧倒的な力の差が浮き彫りとなる。
豪雨の勢いは、いっこうに衰えを見せない。全作業員たちの必死の抵抗もむなしく、やがて人の造ったレラ・シエルは危機的な状況へと陥っていく。
それは夜半の雨が豪雨に変わって、二日目のことだ。
「ラトフ様、学徒の避難はもうすこしで終わるのである」
第一制御室を訪れたアルハナーレムが報告した。
アルハナーレムは、魔法学においてすぐれた術者の育成を目的とした研究部署の責任者である。ラトフと同時期に、王都からレラ・シエルに赴任していた。

その彼の部門には多くの学徒が在籍しており、事態を重く見たラトフの判断によって、彼らの避難はすでにはじまっていたのだ。

「ご苦労だった、アルハナーレム……きみも、そろそろ外へ脱出してくれ」

第一制御室の中央で、稼働する施設の状況を見守っていたラトフが告げる。

アルハナーレムは何か言いたそうにしばし立っていたが、

「わかったのである……我はひと足先に、外でラトフ様を待っているのである。しかし、けっして王都にだけは戻らないのである――」

「……」

ラトフは、アルハナーレムの決意した最後のひと言には答えなかった。

いや、答えるだけの余裕がなかっただけで、ラトフはアーチェスとテテオのふたりを連れて逃げるとき、アルハナーレムとミースもいっしょにと考えていたのだ。

しかし、いまはその予定が大きく狂いはじめている。

変更すべき予定について、まだラトフの頭の中に良案はない。目の前で起きた異変の対処に追われ、いまだ計画の練り直しにさえ至らない。ゆえに、アルハナーレムに何も答えられなかったのだ。

そんなラトフが彼を見送るように振りかえると、アルハナーレムは制御室の扉から出ていくところだった。

と、その直後だ。
「第二、第四の貯水槽、いっぱいです！」
「制御不能！　地下への回路が途切れています！」
作業員たちの悲鳴のような叫びが、ふたたび室内を満たしていく。
向き直ったラトフは、いよいよ施設の限界が近づいていることを悟った。

「アーチェス先生……ミースは、だいじょうぶなのでしょうか？」
部屋で避難のための準備を整えていたテテオが、気になったように言う。
そばで持って出る荷物を整理していたアーチェスも、ふと窓のほうに目を向ける。
窓の外はどしゃぶりの雨で、もはや遠くの景色も霞んで見えない。
「この雨ですもの……おそらくミースは、王都から出られなくなっていると思います。大丈夫ですよ、テテオ様。あのミースが無茶をするわけがありません」
そう答えたものの、アーチェスは一抹の不安もおぼえる。
あのミースだからこそ予想に反して、豪雨の中をこちらに向かっていたりしないかと心配にもなる。
とにかく、このひどい大雨によって王都からの脱出計画は予定の変更を余儀なくされ

ていた。予定が延期になれば、それだけ神殿側に勘づかれるおそれも出てくるだけに、あらゆる面で心配の種は尽きない。

なぜ、こんな大事なときに――。

アーチェスは偶然の出来事とはいえ、足止めを食らった状況を嘆きたかった。しかし、テテオの前でそんな弱気は見せられない。

「さあ、避難する用意ができました。外はあいにくのどしゃぶりですが……テテオ様、どうか我慢なさってくださいね」

「私はだいじょうぶです」

テテオがしっかりと答える。

アーチェスは王女と手をつなぎ、部屋をあとにした。

廊下に出て、この施設の出口に向かうための昇降機の前へと進む。

このレラ・シエルは円筒形の建物になっており、地下――つまり、湖底から湖面上に一本の柱のように構築されている。その階層は上から下まで細かく仕切られ、アーチェスたちの宿泊した部屋は、湖面の高さよりも上のほうに位置する五階にあった。

やがて昇降機が、その五階に到着する。

一階に降りるため、アーチェスとテテオは昇降機に乗りこんだ。一階には、湖畔（こはん）へとつながる橋が渡されている。

そしてふたりが、無事に一階の広間に降り立った直後だ。

「――っ！」

アーチェスは、はっと息を呑む。

多くの人たちが避難したあとの、しんと静まりかえったフロアに――いきなり黒い影がぬっとあらわれたのだ。

その男は獣のような仮面で素顔を隠し、黒い衣をまとっている。

「チャ、チャスペル！」

アーチェスは戦慄の声をあげる。

クー・チャスペル――ガルデスが神殿の教皇の座にのぼりつめる過程で、いつの間にかその腹心として頭角を現してきた男だ。

到着した昇降機を待っていたかのように、ずぶ濡れになったチャスペルがそこにいるということは――あのクリスタル使いに向けた法令が、はやくも施行されたというのか。

アーチェスは、身がふるえるのを感じた。

一方、目の前のチャスペルは雨滴がしたたる獣の仮面から不気味な声を響かせる。

「くっくっくっ……このどしゃぶりの中、命がけでここまで来たのですよ。その苦労に免じて、テテオ様をこちらに渡していただきたく思います」

ぬっと、チャスペルが一歩前に踏みだす。

危機を察したアーチェスは、テテオをかばうように前に立った。
その様子に、
「おやおや、アーチェス様……連行させていただくのはあなたではありませんよ」
と、チャスペルはアーチェスたちの乗る昇降機に自分も乗りこんできた。そしてすかさずアーチェスの腕を捉えると、そのままフロアへと彼女を投げ飛ばす。
「きゃっ！」
アーチェスは広間の床に叩きつけられる。
その刹那――昇降機が、ふたたび作動する音を響かせた。
「えっ！」
驚いて身を起こすと、チャスペルとテテオを載せた昇降機が地下へ――つまり湖底の階層に向かって降りていく。
「テ、テテオ様っ！」
アーチェスは昇降機のもとに駆け戻ったが、すでにその扉は閉じられてしまったあとだった。

5

「みんな、最後まであきらめるな！　わたしが最深部へ行き、手動で動かしてみせる！」
「ラトフ様、危険です！　おやめください！」
「いいんだ――わたしのことにかまうな。みんなはここで作業をつづけてくれ。たのんだぞっ！」
ラトフは作業員たちに告げたあと、昇降機のあるほうへ向かった。
レラ・シエルの管理主任をつとめるラトフは、この危険な状況を乗りきるためにみずから最深部の制御室に乗りこむ決意だった。
制御室の隅にある専用の昇降機の前に歩みより、その扉が開いたとき――。
「ラトフ様！　わたしも行きます！」
いきなりアーチェスの声が、昇降機に乗りこんだラトフを追ってきた。
気がつくと、あっという間にアーチェスも昇降機に乗り込んでいるではないか。
「アーチェス!?」
ラトフは虚を衝かれたように目をしばたたかせる。
すぐさま扉が閉まり、昇降機はふたりを乗せたまま降下をはじめた。

「……ラトフ様、大変です」
アーチェスがふるえる声で訴えてくる。
「どうしたんだ？」
「テテオ様が……神殿に誘拐されたんです」
「何だと!?」
「ここの地下に、テテオ様は連れて行かれました……」
無念そうにアーチェスは伝える。
それに対して、ラトフは力強くうなずきかえした。
「わかった――テテオ王女を助けに行こう」
覚悟を決めて答える。どれほどの困難が待ち受けているか、ラトフの本能の部分がそれを察した。
おそらく、きわどい勝負になるだろう……。
しかし彼女たちを守ると決めた以上、ラトフに恐れはなかった。
「ああ……ラトフ様……あ、ありがとうございます……」
アーチェスが噛みしめるようにうなずく。
彼女もラトフの覚悟の深さを知ったのだろう。ただ感謝の気持ちを口にするのが精一杯のようであった。

やがて昇降機は、最深部へと到着する。
扉が開き、ふたりは外に出た。
レラ・シエルの最下層は、硬い壁が水圧によってゆがみ、至る所できしむ音が断続して響く危険区域と化している。膨大な水量を制御できず、水路に滝のように落ちる水は一方の通路を完全に満たしてしまっていた。
「この先はだめだ。ほかの通路をまわろう」
踵(きびす)をかえしたラトフのあとに、アーチェスがつづく。
近くの制御弁が水圧によってはじき飛ばされる音がした。
「ラトフ様、テテオ様の居場所がわかるのですか」
うしろを追ってくるアーチェスが訊ねる。
先頭を歩みながらラトフは答えた。
「きみも知っていると思うが、このレラ・シエルの動力源はクリスタルだ」
「では、テテオ様はそこに――」
「テテオ様のクリスタル使いとしての能力を欲するなら、おそらく――」
「……」
アーチェスは緊張の息をついた。

いよいよその最深部の制御室が目の前に迫ってきた。
まわりを激しく流れる水の轟音が高まり、もはやふたりの声はかき消されてしまう。
ラトフは、制御室に入る大きな扉の前に立つ。アーチェスに対して「行くぞ」という視線を送った。彼女も覚悟を決めたように、うなずきかえす。
ラトフは、一気に扉を開け放った。それと同時に、ふたりは制御室に飛びこむ。
そして目にした光景に、「あっ」と息を呑んだ。
制御室内の奥に安置されたクリスタル――それは本来の色と異なり、真っ赤な輝きに変貌していたのだ。さらにクリスタルの中には、小さな人影が見える。
それは、まぎれもなくテテオ王女の姿だ。
「テテオ様っ！」
アーチェスが、制御室の奥に向かって駆けだす。
ラトフは、すぐさま操作卓に向かった。テテオを助けようと――クリスタルの動力を切る鍵に手をのばす。
――いや、だめだ！
これをいま切れば、レラ・シエルは全機能が停止してしまう。
予備の動力源はこの豪雨に対処するため、すでに全備蓄を使い切ったあとなのだ。
「くっ――」

ラトフは、拳をどこかにぶつけたい心境にかられた。
レラ・シエル内には、まだ多くの作業員が残されている。彼らを避難させてからでないと、稼働中の施設とクリスタルは接続を解除できない。
もしすべてを停止させたら、昇降機も動かず、扉も開閉できなくなる。内部に残された人員の脱出が困難になるばかりか、膨大な水量を制御できずにレラ・シエルはその構造までも維持できなくなる。
「くそっ、どうすればいいんだ！」
そのときだ。
ふいにラトフは、背後に何者かの気配を感じた。
「くっくっ……もっと吸いださないと、だめですねぇ」
そいつはラトフの脇から細い手を操作卓にのばし、クリスタルの力を解放させる鍵をひねった。
「きゃあああーっ……」
突然、紅いクリスタルの中からテテオの悲鳴が起こる。
「テテオ様っ！」
その前に立つアーチェスも、悲鳴のように叫ぶ。
「ひゃっひゃっ！　触媒からクリスタルの力が、たくさん出てき――あうっ!?」

鍵を押したそいつの手首を、ラトフがつかみとった。
「チャスペル――貴様は何をしている？」
「うぎっ、ぎぎぎっ……や、やめ……」
チャスペルが、ラトフにつかまれた手をふり解こうともがく。
しかしラトフは、チャスペルの手首を力いっぱいに握りしめる。そしてもう片方の手で、チャスペルがひねった鍵を元に戻す。
すると――紅いクリスタルからもれるテテオの苦しそうな声がおさまった。
ラトフはそれを聞いてすこしだけ安堵し、あらためてチャスペルに向き直る。
「あぎゃっ、ひっ……は、放せ！　うぎぃぃ……」
「放してほしければ、クリスタルの外にテテオ王女を戻せ」
「ぎゃっ、うぎっ、いや……だと、言った……ら……」
チャスペルはもがきながら首を振った。
その態度で、ラトフは確信する。
――おそらくテテオ王女は、特殊な魔法の力によってクリスタルの中に閉じこめられたのだろう。
だとすれば、元に戻す術もチャスペルなら知っているはずだ。
「チャスペル、もう一度だけ言うぞ。テテオ王女を、クリスタルの中から出せ」

「だっ、だから……ぎっ……ぎえっ……お、お断り……です……うぎぎっ……」
チャスペルは、ラトフからの最後通告にもかかわらず首を振った。
「いやだと言うのなら、おまえの手首はこうなる――」
ラトフは、さらなる力をこめた。
その刹那――骨の砕ける音が響く。
「うっきゃあああ――っ！」
チャスペルがけたたましい悲鳴をあげた。
握り潰された手首をラトフにつかまれたまま、がっくりと床に膝をつく。
「これで終わりだと思うな？　おまえが、テテオ王女を元に戻すと言うまで続けるぞ」
ラトフはうなだれたチャスペルを見おろして言う。
チャスペルは無言のまま、動かなくなった。
気を失ってしまったのか。
ラトフが叩き起こそうと、捉えたままの手首をひっぱりあげようとしたときだ。
「何っ!?」
いきなりチャスペルが、もう片方の腕に隠し持っていたダガーをくり出してラトフに襲いかかった。
「ふっ！」

反射的にラトフが身をそらす。
チャスペルのくり出したダガーは、ラトフの胸を斜めにかすった。
「くっ――」
傷は浅いが、ほんのすこしだけラトフはひるんだ。
その隙をついてチャスペルは、捕らわれていた自分の片手を振りほどく。
「ひーっ、ひーっ……かわいそうな、わたしの手……」
ラトフから離れたチャスペルは、痛めつけられた自分の片手をいたわりながらひとりごちる。
「ああっ、こんなにプラプラして、もう動かないぃ……あうぅぅ……」
次の瞬間、恨みをぶつけるかのようにラトフをにらみかえした。
そして言い放つ。
「もうテテオ王女は、触媒なのです――あきらめていただきましょう！」
「触媒？」
ラトフは、眉をしかめた。
チャスペルの言葉を耳にして、ラトフは考えをめぐらす。
すこし、こいつから聞き出したほうがよさそうだ――。
そう思ったラトフは、あえて怒りを抑えて訊ねかえす。

「何の話だ？」
「ほう……知らないのですね。我が『月の神』が、どうやって力を得ているのか」
チャスペルは自慢げな様子で、ラトフの誘いに乗ってきた。
「我々はとうとう編みだしたのですよ。クリスタル使いを触媒として、そのクリスタルからの力を吸いだし、我々の力へと変換する術を――ね。くっくっくっ……」
チャスペルは仮面の下から嗤いをもらす。
すると脇から、
「な、なんですって――それは、テテオ様を生贄に!?」
奥にいたアーチェスが戻ってきた。
「生贄とは野蛮な……。ですから触媒とおっしゃってください。この方法ですと個体が持つすべての能力を使用することができるのですよ」
「そんなことをすれば、テテオ様は……」
「そう、力を使い果たした術者は存在が消滅しますがね。ですが、彼女では足りないようです。我々の神がお望みになる絶対量には……フッ、王族の娘がなんと薄っぺらい魂なのでしょう。くくくっ……ならば、こうするまでですよ！」
チャスペルは無事なほうの手で魔石を掲げ、それを奥の紅いクリスタルめがけて投げつけた。

魔石は紅いクリスタルに命中する。その表面に触れたとたんに砕け散り、クリスタル全体を覆うほどの激しい電流をあたりに放つ。

「きゃあああぁぁーっ！」

テテオが悲鳴をあげた。

チャスペルの放った魔石はクリスタルではなく、テテオ自身を攻撃したのだ。

いや、彼女の何かを刺激し——クリスタルから力を引き出す能力を増強したといったほうが正しい。

「テテオ様!!」

アーチェスは驚きの声をあげたが——。

同時に危機を悟ったらしい。

紅いクリスタルの輝きが増し、力の暴走がはじまっていた。

「ああっ……そんな……」

アーチェスはみずからも紅いクリスタルに触れようと、ゆっくり近づいていく。

「アーチェス!!」

ラトフが呼び止めようとする。

彼女は自身もクリスタルから力を引き出し、それでテテオを救おうと考えたようだ。

「ほう、我々の力を横取りして、みずからの力にしようと？　ずいぶん大胆なことをさ

れま――うぎっ!?」

チャスペルは話の途中で、その首をラトフに捉えられた。

「話はもう終わりだ！　テテオ王女をいますぐ解放するか、それともこの首をへし折られたいか――どちらだ!?」

ラトフはチャスペルの首をつかみ、返答を迫った。

するとチャスペルは、

シャキン！

まだ動くほうの腕から、手甲の鉤爪を飛び出させると――ふたたびラトフの胸に斬りつける。

「ぐっ！」

こんどはラトフも激痛をおぼえた。

しかし、捉えたチャスペルの首は放さない。

次の瞬間、

「きゃあああぁぁぁっ……」

アーチェスの悲鳴が響く。

はっとして、ラトフはそちらを向く。わずかな隙が生まれ、チャスペルがラトフの腹を斬り飛ばす。

「ぬあっ！」
不意を衝かれたラトフが吹っ飛ばされる。
床に背中を叩きつけられたが、すぐさま身を起こす。
「ア、アーチェス……テテオ王女……」
目の前の敵よりも、奥の紅いクリスタルのほうに目を奪われてしまう。
そのアーチェスは紅いクリスタルからの力を何とかして自分の身に取りこもうと粘りつづけていた。
「くくくっ……無駄ですよ。そんなことしたって、クリスタルの暴走は止められるはずなど……」
嘲笑うチャスペルに対し、ラトフは腰にさした剣をぬいて突っこんでいく。
「くわっ!?」
驚いたチャスペルが身をかわす。その身軽な動作で、ラトフとの距離をとったあとに振りかえる。
「チャスペル——覚悟しろ！」
ラトフは、怒りをみなぎらせて言い放つ。
そして剣を腰のあたりで構えた独特の体勢で、じわりじわりとチャスペルとの間合いを詰めていく。

「い、いいでしょう。時代は新たな神の降臨を望んでいることを、その体に刻むように教えてさしあげましょう！」

片方の鉤爪をかざし、チャスペルも身構える。

「ぬおおおおーっ！」

ラトフが剣を振りあげて、チャスペルに突進した。

「ハアァッ！」

チャスペルは片腕をくりだす。その手甲の先からのびた鉤爪で、ラトフの剣をガシッと受けとめる。

「無理をなさると、あとでみじめな思いをしますよ？」

「貴様、生きてここを出られると思うな！」

ラトフは剣を持つ手に力をこめ、チャスペルとの間合いをさらに詰めようとする。

「テ、テテオ様……」

アーチェスは紅いクリスタルの前で、その両手をかざしつづけていた。

全身にびりびりした痛みを感じているが、テテオが受けている苦しみに比べたら軽いものだ。

「い、いま……助けますから……もうすこしで……」

気力だけで、アーチェスは踏みとどまっていた。

どうやればテテオを救出できるのか。その方法について正確なところはわからないが、とにかく魔法をぶつけてみるしかなかった。

間に合ってほしい――。

そう祈って、魔力を集中させようとしたときだ。

(もう、いいのです……アーチェス先生……)

ふいに、テテオの声が脳裡に響いてきた。

(テ、テテオ様!)

アーチェスも念話で答える。

(先生……お元気で……おふたりの結婚式に出られなくて……ごめんなさい……)

(だ、だめです! テテオ様、あきらめないで!)

(これから、みなさんを……施設の外へ送り出します……こ、この部屋の……中のかただけ……ですけど……ゆ、ゆるし……て……くだ……さ……い……)

テテオからの念話が、途切れ途切れになっていく。

(い、いや! いけません、テテオ様っ!)

そして最後に、彼女のかすれたような声がアーチェスの脳裡に届く。

（……お……父さ……ま……）

（テテオ様っ!?）

驚いて目を開けた直後、アーチェスは信じられない光景をまのあたりにした。

目の前で、紅いクリスタルが純白の光へと変化していったのだ。そしてそれは、強い輝きとなって制御室全体を覆いつくす。

（ああっ……テ……テテオ様……）

光に包まれていく中で——アーチェスは、ラトフとチャスペルの全身をさらに別の光がそれぞれ包みこんでいくのを目撃する。

そして自分もまた同じような光に包まれるのを感じた直後、アーチェスの意識は闇に落ちていった。

6

目覚めたアーチェスは、ラトフがすぐ近くに倒れているのを知った。

力の暴走がはじまった直後、三人の体は遠く離れた安全な場所へと瞬間移動させられていたのだ。

王女の決断で生き残ったのは——自分とラトフ、そしてたぶんチャスペル。

そのチャスペルの姿は、ここにはない。
（おそらく彼の体は、べつの場所に……）
たぶん——王女がラトフたちといっしょの場所にしないよう、引き離してくれたのだろう。
そのように思えてならない。
ぽつぽつと、路が雨をはじく。
アーチェスがいたのは、湖畔からレラ・シエルまでのびた橋の上だった。雨は弱まり、暗雲の濃い色もいくぶんうすれつつある。豪雨によって荒れていた湖面も、いまはしずかに凪いでいる。
しかし、その湖面上に人の力によって建造された施設は、その変わり果てた姿をさらしていた。
アーチェスの立っている周囲には瓦礫が散らばり、橋の先にそびえるはずの巨大な建物は、もう原形をとどめていない。
「うっ……うーん……あ……アーチェス……？」
「大丈夫ですか、ラトフ……」
アーチェスは倒れているラトフのそばに腰をおろした。
「ここはいったい……んっ……あ、あれは!?」

身を起こしたラトフは、すぐさま異変に気づく。
「あれは……レラ・シエルです」
アーチェスは悲しげに答える。
ラトフは声もなく、かつての水の都の残骸を見つめた。
レラ・シエルは完全に崩壊していた。そこに人の姿はなく、ただ瓦礫の山が存在するだけの廃墟でしかない。
しばし呆然としていたラトフだったが、
「テテオ王女は……」
ぽつりとつぶやく。そしてそのまま黙りこんでしまった。
ラトフにも、あるていどの想像はついているらしい。
テテオがその身を犠牲にして、代わりに自分たちを救ってくれたことを——。
「あんな……幼い王女を……」
ラトフはたまらず口にしてしまう。
「わ、わたしは——コルカ王に……コルカに、なんて詫びればよいのだっ！」
自分自身への怒りを叩きつけるように叫んだ。
許せなかったのだろう。
守り抜くと約束したはずなのに——。

そんな彼の心の叫びが、そばにいてびりびりと感じとれてしまう。
「ラトフ様……ご自分を責めないで」
「なぜだ、なぜ、わたしが生き残っているのだ！　どうして王女だけが……」
「それが――テテオ様の、ご意志だったのです」
そう言うと、ラトフはかぶりを振る。
「アーチェス……すまない。わたしは、ふたりとの約束を破ってしまった……」
「いいえ、何も破ってはおられません……あなたは必死に守ろうとしてくださいました。テテオ様も、そのことをよくわかっておられることでしょう」
「……」
「いま、わたしたちにできることは、テテオ様の分まで生き抜くことです」
アーチェスのその言葉に、ラトフは深い息をついた。
すこしだけ冷静に戻ったらしい。
しばらくしてから無言のまま、噛みしめるように何度もうなずく。
やがて、
「わかった……」
ラトフの表情が、いっそうけわしいものになった。
「テテオ王女が、わたしに託してくれたものは……何であるか……それを見つけるまで、

わたしは生き抜いてみせよう」

ラトフは崩壊したレラ・シエルに向かって、そう誓った。

やがて、ふたりはレラ・シエルの橋を渡って湖畔にたどり着いた。

目前に迫った正門は、無傷の状態で残っていた。

避難した者たちは全員、王都のほうへ向かったようだ。いくつかある建物の残骸の中には誰の姿もなく、ひっそりとしていた。

橋を渡り終えたラトフとアーチェスが、さらに正門に近づいていく。すると、ひとつの人影が見えてきた。

それは、アルハナーレムの姿だった。

「ラトフ様……」

出迎えたアルハナーレムに、いつもの元気はない。

ここでラトフのことを待っていた彼は、レラ・シエルが崩壊する過程をまのあたりにしたのだ。相当な衝撃を受けているにちがいない。

「わ、我は……」

「アルハナーレム。いまは一刻もはやくこの場から離れることが先決だ」

「は、はい……そ、そうであるな」

アルハナーレムは、ラトフの言葉にしずかにうなずく。

しばらくして正門の外側に、たくさんの荷物を積んだ荷馬車が到着した。

その馬を駆っていたのはミースである。

彼女は連日の雨の中をこちらに向かってきていたのか、衣服は泥だらけだった。

「アーチェス様！　ラトフ様！　すっかり遅くなって、申し訳ないのです！」

馬から降りたミースは、いつもと変わらない騒がしさでラトフたちのほうに近づいてくる。

「ほんと、途中で馬が走るのをイヤがって、まったく困ったものなのです。雨は全然やまないし、馬はいくらひっぱっても前に進もうとしなかったりで、さんざんな目にあったのです！　おかげで予定よりも、かなり遅れて――ひあっ!?」

しゃべりつづけていたミースは、いきなりぎょっとして足をとめた。

その視界に、崩壊したレラ・シエルの光景を捉えたらしい。

「こ、これは……」

ミースは、目を見開いたまま硬直する。

そして、ここに来るまでのことを思い出したようにつぶやく。

「そ、そうなのです……お、おかしいな、とは……思っていたのです……王都に向かう、

たくさんの人とすれちがって……そ、それは……これの、これのことだった……のですか……」

「ミース……」

アーチェスが腰をおろし、声をふるわせるミースを抱きしめた。

「ア、アーチェス様……あ、あの……テ、テテオ様は……ど、どこに……？」

ミースは、ラトフたちの中にテテオの姿がないことを不安に感じたようだ。

「……ミース……テテオ様は……」

アーチェスはその言葉のあとに目を閉じて、しずかに首を振った。

「えっ？」

ミースが、呆然としながら「うそでしょ？」という表情をする。

しかし、アーチェスは黙ったまま首を振り続けていた。

それで、ミースは理解したらしい。

なぜ、ここにテテオがいないのか――。

「うっ、うわあああっ！　テ、テテオ様あああぁぁっ！」

王女の世話役として、テテオのことを愛していたミースはその場に泣き崩れた。

「ど、どうして！　どうしてなのですかあああっ！　テテオ様あああぁぁっ！」

ミースは、崩壊したレラ・シエルに向かって叫びつづける。

ラトフたちは、そんな彼女をしずかに見守った。
雨は完全にあがり、雲の切れ目からは陽光が差していた。

7

それから約半年後……。
ラトフたちは、王都から西に離れた荒涼たる原野で新しい暮らしをはじめていた。
王都まで半日足らずという距離である。
ほんとうは、もっと遠い場所に生活の拠点をつくるはずだったが、ラトフのコルカ王に対する思いがそうさせなかった。
もしも、コルカ王に何かあったときには——王都に駆けつけたい。
そんな思いが、ラトフの中にあったのだ。
ほかのアーチェス、アルハナーレム、ミースたちも、みんなコルカ王への思いは同じだったようだ。
半年前のそのとき、全員そろってラトフの考えに賛したのである。
場所を決めた彼らは、集落を築いていく。
物資の調達などで、建築作業には半年近くかかった。

ラトフとアーチェスの家、それからアルハナーレムとミースの家だ。その二軒を同時に築いた。
住居が完成したのちにラトフとアーチェスは結婚し、ささやかな宴をもよおす。
きっと宴には、テテオの魂も顔を出してくれたのだろうと信じて……。
そして、さらに約一年が過ぎたある日。
彼らの集落には、ひとつの幸福が訪れようとしていた。

「おお、ミース！　ミース！　生まれたのであるか!?　アーチェス様は!?　ミース！」
アルハナーレムが興奮した様子で、ラトフの家から出てきたミースに問いかける。
「ミース！　どうなのであるか？　生まれたのであるか？　赤子は？」
矢継ぎ早にくりだされるアルハナーレムの質問に、ミースは落ちつき払った様子でにらみかえす。
「アーチェス様は元気なのです、静かにするのです。言うことを聞かないと、ぬっ殺すのですよ？」
その威圧的なひと言に、アルハナーレムは押し黙った。
共に家の外で待っていたラトフも、やはり落ちつかない様子で、

「ミース、ついさっき、赤子の声が聞こえたようだが——無事に？」
「元気な女の子なのです」
「なんとぉ！　それは本当であるかぁ——うぐっ！」
ラトフより先に飛びあがってよろこんだアルハナーレムは、ミースがすばやく投げた壺で頭をぶちのめされていた。
「あはははっ、静かにするのです。死にやがれです」
うるさいやつを一匹片づけたミースが勝ち誇る。ラトフはそばで気絶して倒れているアルハナーレムをよそに、もう待ちきれない顔で訊ねた。
「ではミース、もう？」
「ニヒヒ。もうひとりいるみたいなのです——おめでとうなのです、無事生まれたのです。双子なのです。素敵なのです。これでラトフ様は、お父さんなのです♪」
「すまんミース、あとでな！」
居ても立っても居られないラトフは、自宅の中へと突進していった。

「ほら見て？　あんなにわたしを苦しめたのに、この寝顔はずるいわよね……フフフ、ほんとうにそっくり。男の子と女の子なのにね」

ベッドで上体を起こしたアーチェスが笑顔で迎える。
「男と女？　待ってくれ、どっちがどっちなんだ??」
駆けつけたラトフはゆりかごの中で眠る双子を見おろし、懸命に顔を左右に振って見比べている。
「もう、それはあんまりでしょ」
アーチェスが、ゆりかごから双子を抱きあげながら言った。
「どちらかまちがえたら、この子たちが傷ついてしまうわ」
「そ、そうだな。きみのように気遣いができるかどうか……わたしは、いまから心配だ」
「フフッ、あなたらしいわね……ねえ、考えてくれた？」
「いや、まあ、その……」
「あら、言いづらいならわたしから言いましょうか。女の子の名前はね――」
「待ってくれ。きみのあとではわたしはいう自信がなくなってしまう」
ラトフは、あわててさえぎった。
「フフッ、いいわよ。じゃあ教えて。男の子の名前は？」
「笑わないでくれよ、その……ユーリィ、というのはどうかな」
「ユーリィ……ユーリィね、いいわね」

「そうか、変じゃないか」
「かわいい息子に変な名前なんてつけません。女の子はね、チェリンカというのはどうかしら」
「チェリンカ……ユーリィとチェリンカ……ああ、いい名前だ」
ラトフは満足そうにうなずく。
「じゃあ決まりね。はじめましてユーリィ、チェリンカ……ほら、あなたも抱いてあげて」
「待ってくれ。こんな小さい子を抱いたことなどない。わたしにはむりだ」
「じゃあ、なおさら慣れてもらわないとダメね。はい、落とさないでね？」
「ああ、いやしかし……わ、わかった」
ラトフはためらいながらも、アーチェスから双子を受けとった。
「どう、感想は？」
「小さくてこわれてしまいそうだ」
「もう、なに固くなってるの？　物じゃないのよ」
「それはわかっているのだが……そうだな、とてもあたたかいな」
「それだけ？」
「やわらかくて息をして鼓動が……ああ、何だろう、この気持ちは」

「そんなに小さくても一生懸命生きてるのよ」
「生きて……」
「そう、いくつもの〝命の輝き〟のなかで、やっとめぐりあうことができた、なにより大切なわたしたちの子……あら、この子……何か握ってるわ、これは……」
アーチェスは、チェリンカの小さく握りしめられた手に注目する。その指をやさしく解くと、なかからキラキラと光るクリスタルが姿をあらわす。
アーチェスはその瞬間に理解した。
「そう、そうなの。それをふたりで分けたのね？　じゃあ、あなたたちはいつもいっしょね。ずっと、ずっと……」
アーチェスはラトフの胸に抱かれて眠る双子に顔を寄せて、ほほえんだ。

しかし、別れのときは突然、訪れた。
双子が生まれて間もなくのことだった。幸せいっぱいであったラトフたちの家に神殿からの使者が訪れたのだ。
「捜しましたよ。ククッ……」
「そ、その声は――」

家の中で双子をあやしていたラトフは、顔色を変えて戸口を見た。
そばにいたアーチェスは――ついに、このときが来たかと神妙に玄関へ視線を向ける。
扉を開け、数人の神官をともなった男が入ってきた。細い身を黒い衣で包み、頭には獣のような仮面をかぶっている。
「やはり、生きていらしたんですね。お二人とも……ふひひひっ」
そいつは仮面の下から、不敵な嗤いをもらした。
レラ・シエルの崩壊時に、その最深部でラトフと格闘したチャスペルだった。
「貴様も、まだ生きていたのか？」
ラトフは立ちあがって、妻と子供を守るようにチャスペルと対峙する。
「わたしのことは、常に我が『月の神』がお護りくださっていますからねぇ……くくくくっ」
「またその話か……貴様は、どこまで邪教に毒されているのだ」
「なんとでもおっしゃってください。本日は、あなたとそのようなお話をしに来たわけではありませんので……」
チャスペルはそう言って、懐から一通の書状を出す。
それをラトフに見えるように掲げ、
「クリスタル使いに対する、法令の執行状です。ここにちゃんと、コルカ王の署名もご

ざいますから……正式なる『王都レベナ・テ・ラからの命令書』とお心得ください」

「……」

ラトフは掲げられた書状を見つめ、眉間に皺をよせた。

「そのコルカ王の署名、本人のものだと言い切れるのか？」

「もちろんでございますよ……コルカ王が、みずからおっしゃっておりました。ラトフ様に預けていたアーチェス様を、そろそろ返していただきたいとね」

「何だと!?」

「テテオ王女が亡くなってしまったので、アーチェス様に代わりをつとめていただきたいのでしょう。それになぜか、ずいぶんとラトフ様のことをお怨みのようでもいらっしゃいましたよ？」

「でまかせを言うな！」

「いえいえ、わたしはコルカ王の話されたことを正確にお伝えしているだけですので。あ、そういえば……こうもおっしゃっておりましたねぇ。あんなやつに預けたりしなければ、テテオ王女も、幼くして死なずにすんだのにと――」

「貴様っ！」

ラトフは怒りがみなぎり、チャスペルの胸倉をつかんだ。

「おっと、よろしいのですか？　わたしに暴力を振るわれても――」

「貴様を黙らせるために必要なら、容赦なくそうさせてもらうまでだ」
「そういう意味ではありませんよ……ぜひ、表をご覧になってください」
「表だと？」
チャスペルの胸倉をつかんだまま、ラトフは窓のほうにちらりと視線を向ける。
「――ア、アルハナーレム！　ミース！」
ラトフが目を見開いて、驚愕した。
窓の外には、神殿の連中によって捕らえられたアルハナーレムとミースの姿があったのだ。彼らはそれぞれ、両側に立った神官たちから剣を喉元に突きつけられていた。
「くっくっ……わたしがここで片手をあげたら、それを合図とすることになっています。以前、あなた様に傷つけられた片手のほうですがね……それをここであげてみましょうか？　すぐさま、おふたりの首が刎ねられるところを見てみたいとは、お思いになりませんか？」
「お、おのれ……」
ラトフは唇を噛みしめる。
「さあ、わたしを放してください。交渉をはじめさせていただきますので」
「なにが交渉だ。貴様のやることは強制でしかない――」
そう言いながらもラトフは、仕方なくチャスペルから手を離す。

「いいでしょう。ラトフ様、そこからけっして動かないでくださいね……くくくっ」
勝ち誇った嗤いを仮面からもらしながら、チャスペルは奥のゆりかごへと歩みよる。
「ほう、かわいいお子たちですね……」
「貴様っ、子供たちに触れるな！」
ラトフが振りかえって叫ぶ。
「おっと、ですから動くと——この片手をあげますよ？」
「くっ——」
動き出そうとしたラトフは、ぴくりとその身をすくませてしまう。
「くくくっ……そう、それでよろしいのですよ。さあ、アーチェス様……これをご覧ください」
ゆりかごの近くに硬直してたたずむアーチェスの前で、チャスペルは手甲から鉤爪を飛び出させる。
そしてきらめく切っ先を、ゆりかごの中で眠る双子の赤ん坊に向けた。
「——っ！」
アーチェスが息を呑む。
「やめてっ！」
「チャスペル！　よせ、やめろっ！」

父と母が、ほぼ同時に大声を放つ。
身動きできなくなったラトフとアーチェスの見守る中、チャスペルは双子を人質にしてしまったのだ。
「くっくっ、ご安心ください……おふたりが神殿の要求にしたがってくださるのなら、この子たちを傷つけたりはしません。ただですね、さっきからお返事がないようで……いつお聞かせくださるのか、わたしも心待ちにしているのですが……」
チャスペルはそう言いながら鉤爪の先で、双子の小さな体をなぞりあげていく。
「さあ、そろそろお聞かせ願えませんか。わたしもそれほど気が長いわけではありませんのでねぇ。待ちくたびれて、赤ん坊をぶすり――なんてことをしてしまうかもしれませんよ？」
「子供たちに、手を出さないで――」
アーチェスの声が怒りにふるえる。
「ですからお返事ですよ。王都で定められた法令にしたがうのですか、したがわないのですか――はっきりなさってください！」
しばしの沈黙があった。
やがてアーチェスは、みずから身柄を差し出す覚悟を決めたらしい。
「わかりました……したがいましょう……」

厳しい表情でアーチェスが言った。
「――ア、アーチェス！」
ラトフが、かぶりを振りながら悔しさを露わにする。
「あなた……この子たちのためよ。わたし、行ってきます」
アーチェスは神妙に、ラトフに伝えた。
「よろしいです。いいお返事でしたよ――」
チャスペルは鉤爪をすっと、双子から遠ざけた。
それを見たラトフとアーチェスが、ほっと安堵の息をつく。
「そうと決まれば、もうここには用はありません……アーチェス様、さっそくまいりましょうか？」
チャスペルは促すように玄関へと歩きだした。
アーチェスがけわしい表情で、チャスペルのうしろにつづく。
そしてラトフとすれちがうときに足をとめ、
「あなた、子供たちのことを……お願いします……」
「アーチェス……」
「子供たちをいつまでも守ってあげて。あの子たちには、あなたが必要なんです」
「……ああ、わかってる……まかせておけ」

ラトフは目を閉じて、アーチェスにうなずきかえす。
玄関前で待っていたチャスペルが呼びつける。
「さあ、早くこちらへ――」
促されたアーチェスは玄関に向かう。
そしてもう一度だけ、ラトフのほうに振りかえった。
「それではあなた――また会えることを祈っています」
「アーチェス……ああ、きっとだ。きっとまた会える！　わたしもそう信じている！」
「ええ……もちろん、わたしもです……」
アーチェスはその言葉を最後に、家の外に出た。
表ではアルハナーレムとミースが縛られている。
チャスペルの姿を見た神官たちは、その縛りつけたアルハナーレムとミースを蹴飛ばして地面に転がした。
もう用はないと言いたげな、ひどい扱いだ。
やがてチャスペルを先頭にして、アーチェスと神官の一行はこの集落をあとにした。

8

そして、ここに閉じ込められてしまった——。

チャスペルに連行され、まだ赤子の子供たちから引きはなされたアーチェスは神殿の最上階に幽閉されたのだ。

それは、神殿のごく少数の者だけが承知していることで、世間にはいっさい公表されていない。

当然、街の人々も、アーチェスが生きていてレベナ・テ・ラに戻ってきていることなど知らない。歴史上その存在を抹殺されてしまったも同然のアーチェスは、神殿の最上階の紅いクリスタルの中に閉じ込められ、触媒としての使命を全うすることのみ許されていたのである。

(アーチェス先生……)

テテオは、紅いクリスタルに向かって呼びかけた。

その中にはアーチェスが眠っている。

長い旅を終え、彼女の生きてきた歩みを知った。

波乱にみちた年月だったと思う。

でも、おかげで過去の自分とも再会できた。
なつかしいような、せつないような、複雑な気持ちをいまは抱いている。
それと同時に、テテオはこれからのことを考えたいと思った。
魂だけの存在だからこそ、生きている人たちの明日をすこやかなるものにしたい。
そう望んでいた。
（テ……テテオ様……）
記憶の取り出しに成功したアーチェスが、ゆっくりと意識を回復させる。
その表情は、さっきまでとはちがっていた。
目に、力が灯っている。
（ああっ……アーチェス先生……）
テテオはうれしくなった。
（よかった……先生が、もとに戻られて……おかえりなさい、先生……）
（……テテオ様……またお会いできるなんて……こんな状況ですけども……わたしはこのときを、とても幸せに思います……）
アーチェスは紅いクリスタルの中で、ほほえみながら念話で答える。
（……アーチェス先生、わたしもいっしょの時間を過ごせて、幸せでした……）
テテオはあふれる悲しさをこらえて、何度もうなずく。

彼女の懸命に生きてきた姿は、テテオにとって自分の目標としたい姿でもあった。アーチェスの冷静に正しいことを見極めていこうとする姿勢は、テテオに大きな影響を与えてきたのだ。

あの大雨に見舞われる前のレラ・シエルに向かったときも——テテオはその本心では、父との別れに心を痛めていた。

父と離れ離れになりたくない——そんな感情が、何度も表に出そうになった。でも、それを口にすれば、父ばかりでなく、アーチェスやラトフも困らせることになっただろう。

そうした自分の感情を抑えることができたのも、アーチェスが教育係としてずっとそばにいてくれた日々の積み重ねが大きい。

だからこそ、いまここで——すぐにでも父の様子を見に行きたいという思いも抑えることができた。

(アーチェス先生……わたしはまず、何よりもみなさんのお力になれれば……わたしのお父様も、それを望んでおられると思っています)

(テテオ様……)

アーチェスは驚いたように見つめかえす。

テテオは、父の意志を継ぐつもりで話をつづけた。

（いまのこんなわたしに、何ができるのかわかりませんけど……でも、ユーリィさんとチェリンカさんのお力にすこしでもなりたいのです……）

（テテオ様……ありがとう……）

アーチェスは心から感謝した。

テテオは生きていたときと変わらず、誰かのために力を尽くそうとしている。

その気持ちだけで充分だと、アーチェスは返事したかった。

でも、彼女はすでに決心している。

ユーリィたちの力になりたい、と――。

テテオのその気持ちに感謝すると同時に、アーチェスはあの子たちの『未来』に希望をつなげようと思った。

そして彼女は、そっとつぶやく。

……あなた、あの子たちは……きっと、前に進んでくれると思います……。

その日まで……がんばりましょう……。

アーチェスは遠く離れた場所のラトフに、この思いを伝えたいと願うのだった。

第三章　父の死

とうとう、この日がきてしまいました。
双子の運命を大きく変える日。けっして避けて通れない、さだめ……。
わたしはあの子たちを守りたい一心で、運命の瞬間に立ちあうことにしました。

1

その日は、突き刺すような冷気があたりを覆っていた。
夕刻から降りはじめた雨は夜半からの冷えこみに霙が混じり、時折の閃光と雷鳴が汚泥にぬかるんでいる景色を浮かびあがらせる。
――びしゃっ！
迷霧で閉ざされた闇に響く跫音。その主は、漆黒の中にふたつの赤光をあやしくゆらめかせながら移動してきた。すると稲光が、闇に揺曳するそれを照らしだす。
鋭利に切れこむ微細に彫りこまれた紋様に、巨大な梟を彷彿させる異様なほど大きい紅い瞳。凍てつく冷気が口元に白いものをつくり出しては、雨がそれを洗い流す。
目元から頭部までの顔の半分を仮面で遮蔽した男――クー・チャスペルがそこにいた。
病的なまでに細い体軀と、それにふさわしい長い手足。ずぶ濡れの体に当たる霙が音を立てて肌を突き刺し、ぬかるんだ大地が行く手を阻もうとするが、彼は意に介さず機

械のように淡々と足を運ぶ。

やがて小高い丘から小さな村が見えた。

その丘の泥濘(ぬかるみ)が〝ずしゃり〟と踏みしめられる。

チャスペルは、丘の上から集落を見おろした。

以前ここを訪れたのは何年も前のことだ。記憶と寸分も変わらない代(か)わり映(ば)えのしない様相に、時間の概念があいまいになる。

だが、彼を現実にとどまらせる相違点は確かにあった。

赤子の泣き声は聞こえない。あのときとはちがう空気がここには立ちこめている。

そして昔とちがって、今日は兵をひとりも連れていなかった。

つまり、極秘裏(ごくひり)に行うべき任務があるのだ。久しぶりに人をあやめる——その許可を教皇より与えられてきた。うれしいことではないか。

表情のうかがえない仮面の男の口元がはじめて笑みの形に変わる。

——それにしても、おろかな女だ。

あの双子を我が手に落とすための力を、みずからの能力で、こちらに授けてしまうとは……。哀れというよりほかない。

もっとも、そのことを知らぬほうが幸せとも言えるのだが……。

チャスペルは、事の終わったあとで教えてやりたい衝動にかられた。
そのとき、あの女はどんな顔をするのだろう。うちふるえ、信じたくないとあがき、泣き叫ぶのだろうか。
娘を失い、その衝撃を受けたのちに魂の抜け殻となりはてたコルカ王のように……。
ああ、見てみたい……希望を奪われた者が狂乱し、やがて枯れていく様をじっくり観察してみたいものだ。
チャスペルは己がしでかそうとする〝事件〟の開演時刻が迫り、身がふるえるほどの感動をおぼえた。

――さあ、そろそろ殺りましょうかね。

闇夜にこらえきれない笑いがもれる。
めくれたくちびるから見える歯は黄色く、獣を想像させる。
村を見おろす死神のうしろで、また閃光がはしり雷鳴が轟いた。

2

——そのころ、ラトフは夢を見ていた。

晴れた空の下、家の前で子供たちに薪割りを教えようとする自分がいる。

ユーリィとチェリンカは、そばに積まれた薪の上になかよくちょこんと座り、ラトフの斧をふるう様子を目を輝かせながら見ていた。

高い空の雲間からは暖かな日差しがさし、時折駆けぬける冷たい風がひと足早い冬の到来を告げている。

「おとーさん、ぼくにもやらせてよー」

やがて見ているだけじゃつまらないと、ユーリィがラトフのそばに寄ってきた。

「あーっ、わたしわたし！　わたしが先ぃ！」

チェリンカも志願してくる。

ラトフはその熱烈な要望に降参して、斧をふたりに預けた。

「さあ、ふたりでいっしょに力をあわせて構えてみなさい」

双子にまかせてみるつもりだった。

最初は重くて持ちあげられなかったユーリィとチェリンカだったが、何度も励まして

いるうちに子供たちの力だけで斧を振りかぶるところまで成功した。
「そこであせるんじゃないぞ。落ちついて力まずに、斧を薪に落とせばいい」
言われたとおり、双子はすっと斧を薪に落とす。
ぱきっと、薪はみごとに割れたように見えたのだが。
しかし斧は途中までしか食いこまなかった。
「あれぇ？　さいごまで割れなかったよぉ？」
「ユーリィ、あんたが振りおろすの早すぎんのよ」
「そんなことないよー。チェリンカのほうが遅いんだよー」
さっそく双子は言い合いをはじめた。
ラトフは笑いながら子供たちの頭をなでてやる。
「はじめてにしては上出来だったぞ」
「ほんとに？」
「ああ、練習すればもっとうまくなる。肝心なのは、あきらめないことだ」
「あきらめないことぉ？」
ユーリィがその言葉に興味を示して、父を見あげる。
「そうだ。無理だとあきらめたそのとき、すべての道が絶たれる。だが、できると信じたとき――世界のすべてが、お前たちに力を貸してくれる。わかったかな？」

「うん……え、えーと……」

父親の言葉を復唱しようとしたユーリィだが、さすがにすぐにはおぼえきれなかった様子だ。ラトフは笑って、ユーリィの頭をまたなでてやる。

「あれ？」

そのとき、隣で遠くを見つめていたチェリンカが驚きの声をあげた。

「ん？　どうした？」

ラトフはユーリィといっしょに、その方角に目をやった。

親子三人が立つ、山の中腹にある丘から——かなり下のほうだ。原野をひとり歩き、こちらのほうに登ってくる人影があった。

めったに人が訪れない土地に、誰だろう。そう思って目を凝らす。

人影の輪郭は——それが女性であることを示していた。

「お、おとーさん……」

ユーリィが呆然として見つめつづける。

「あの人……もしかして」

チェリンカは確信しはじめていた。

ラトフは子供たちにどう説明していいかわからなくなる。あり得ない光景だったからだ。何かの見まちがいではないのか。なんども目を凝らして確認する。

だが、その女性はラトフがよく知るその人だった。見覚えのあるほほえみを浮かべているのも、しっかりとたしかめられる距離にまで近づいてきていた。もう、疑いようもない。

「ア、アーチェス……」

ラトフはその人の名を呼んだ。

すると、子供たちは「えっ？」と、驚きの声を小さくもらす。

そうした一瞬のためらいはあったものの、

「おかーさんっ!!」

子供たちは会いたかった人への思いがはじけてしまい、一気に駆けだした。帰ってきた母親を迎えに、我先にと姉弟で競走するかのように丘を駆けおりていく。

ラトフはまだ信じられなくて立ち尽くしていた。

――いったい、レベナ・テ・ラで何があったというのだ。

もしかしてコルカ王が混迷の王都を治めることに成功し、アーチェスに自由を与える特例でも出してくれたというのか。

さまざまな理由を考えようとしていた。

いや、そんな理由などいいではないか――。アーチェスが戻ってきてくれたのだ。

ラトフは目の前で起きている光景を受け止めようと、子供たちにつづいて地を蹴った。

彼女のいるその場所に向かって駆けおりていくと、忘れもしないほほえみが目の前にどんどん迫ってくる。

「アーチェスっ！」

ラトフが近づくと、すでにアーチェスは一番乗りになったユーリィを抱きあげていた。二番目に彼女のもとに着いたチェリンカも、母親に抱きついていく。アーチェスは腰をおろし、ふたりをぎゅっと抱きしめる。

「アーチェス……ほ、ほんとに、きみなんだな」

最後に彼女のもとに到着したラトフは、やはりまだためらいを拭えなかった。

「フフッ、わたしが幽霊だとでもおっしゃるの？」

「あ、いや……」

腰をおろして子供たちをあやしていたアーチェスが立ちあがる。

「あなた、いままでご苦労さまでした」

「アーチェス……」

ラトフは、やっと笑顔になった。妻が戻ってきたことを実感しはじめる。

「お、お帰り、アーチェス……」

ぎこちなく言う。

「ただいま、あなた……」

アーチェスがにっこりと答える。
その瞬間に、ラトフはたまらずアーチェスを抱きしめる。
「よく戻ってきてくれた――」
妻を抱きしめながら感謝した。これが夢なら醒めてほしくない――ラトフは妻を強く抱きしめる。もう二度と手放したくない。

その日の晩は、帰ってきたアーチェスのお祝いになった。
ラトフの家にみんなで集まり、夜遅くまでにぎやかな時間がつづく……。
アルハナーレムとミースはとっておきの芸を披露してはしゃぎ、子供たちは笑いが絶えない。ラトフ自身も久しぶりに笑った気がする。そして輪の中心にいるアーチェスも、にこやかな表情を浮かべていた。
いままで欠けていた幸せのひとつが戻ってきたのだ。
集落の空気が一気に明るくなったのは、けっして気のせいではないと思う。
やがて夜は更け、宴はひとまず幕となる。
でも、みんなは解散するのを惜しむようにそろって丘の上に出かけ、満天の星空の下でかがり火を焚き、それを囲みながら、また積もる話をした。

そんな楽しい場からひとり離れたラトフは、レラ・シエルの廃墟が残る湖の方角を眺めていた。

今夜も、そこには鬼火がまたたいている。

悲しいはずの光なのに、なぜか今夜はちがって見えた。

ラトフはその光景を眺めながら、この突然に訪れた思いがけない幸せに感謝する。

すると、鬼火たちはまたたきながら、それに応えるかのようだった。

ラトフは目を閉じて、

(ありがとう――)

と、自然にその言葉が胸に浮かんだ。

そして輪の中にそろそろ戻ろうかと思ったとき、

「おとーさん……」

ユーリィがひとりで、ラトフの近くにきていた。

「どうした、ユーリィ?」

やさしく声をかけると、

「おとーさんこそ、何してたの?」

「……いや、ちょっといろいろ考えることがあってな」

「何を?」

ユーリィは、興味があるような顔で訊ねてくる。
——そういえば、ふたりだけでじっくり話をしたことはまだなかった。
こういう日だからこそ、父として——いや、男として息子に伝えておきたい思いがある。
そう思ったラトフは、
「わかった。ユーリィ、今夜は——男同士の話をするか？」
「うんっ！」
父の話を聞きたそうだった顔が、ぱっと輝く。
さっそくラトフは近くの岩の上に腰かけると、ユーリィを手招きした。
ユーリィはうれしそうにそばに寄ってきて、隣にちょこんと座る。ラトフはその太い腕をユーリィの小さな肩にまわし、ふたりで鬼火の光景を眺めた。
しばらくして、
「ユーリィ……お母さんがいなくて、さみしかったか」
ラトフは、息子の横顔を覗きこむように話しかける。
「うん……あ、いや……さみしくなんかなかったよ」
「……いいんだぞ、もうそんな気を遣わなくても」
「へへっ……」

ユーリィは照れ笑いした。
やがて、訊ねたいことがありそうな顔を向けてくる。
「おとーさん……」
「ん？」
「お母さんは、いままでどこに行ってたの？」
「……」
ラトフは答えに迷ったが、
「……ユーリィ」
「なぁに？」
「ほんとうのことを知りたいか？」
「うん」
「おまえには同じ男として、いつかは伝えたいと思っていた」
「……」
父の口調に、ユーリィは神妙な表情になった。
ラトフは、いままでの自分を振りかえるように語りだす。
「お父さんは、お母さんを守りたかった。いや、お母さんだけでなく、昔からの親友も、その親友の娘さんも……守りぬきたかった。それを、その人たちにも誓ったことがある。

命にかえても守るという約束だ――」
「約束……」
ユーリィが小さな声で、噛みしめるようにつぶやく。
「お父さんは、その約束をどこまで守りぬけたのか……正直に言うと、よくわからないのだ。だが、ひとつだけ学んだことがある」
「それは何？」
ユーリィが、父の横顔を見あげて訊ねる。
ラトフは、遠くを見つめて言った。
「どんなことがあってもあきらめない、折れない心だ――」
と、ラトフはユーリィの顔を見る。
「それを最後まで貫きとおす……わたしは、それを自分に誓って生きてきた」
「男って……大変なんだね……」
ユーリィが、自分が背負うものの大きさを感じたようにつぶやく。
「でも……おとーさんの言ってること……ぼくも、できるようになりたいよ」
そう言って、こんどはユーリィが遠くを見つめる。その瞳は、自分の中に芽生えつつある思いに誓おうとするりりしさがあった。
「ぼくもいつか、チェリンカを守れるようになるよ――」

「そうか。よく言ったぞ」
ラトフは、息子の頭を撫でてやる。
「えへへ……」
ユーリィは照れくさそうに、自分の小さな鼻をこすっていた。
そんな息子の頭を、ラトフは撫でつづける。
いままで、子供たちの成長をひとりで見守ってきたが、今日からは妻のアーチェスもいっしょだ。
ようやくこれで、父と母がそろって幸せな家庭を築いていける。
待ち望んでいた夢が、やっとここに実現したのだ。
(そう、これは……ずっと、わたしが願ってきた夢……)
ラトフはとうとう、それを手にできたよろこびを感じていた。

3

「ねぇ、おとーさん、おとーさんってば……」
耳元でチェリンカの声がする。
木の丸椅子に腰かけ、壁にもたれかかって寝ていたラトフが目を醒ます。

「……んっ……あ……チェ、チェリンカか……」
ゆっくりと上体を起こしながら深い息をついた。
あたりを見まわすと、ゆらめく暖炉の炎、自分がさっきまで手入れをしていた斧が床に転がっているのが目に入る。
そして、そばにはチェリンカがいた。何もかも普段どおりの光景だ。
これは夢ではない。はっきりと、現実に戻ってきたという実感があった。
「もう！　おとーさんたら、いつの間にか寝ちゃうんだもん」
チェリンカが、くちびるをとがらせる。
「そ、そうだったのか……つい、うとうとしてしまったようだな……」
疲れているのだろうか。
そんなことを考えながらラトフは、かるく腕をまわして体をほぐそうとする。だが、それほどの疲れは感じられなかった。
それにしても——妙に、現実感のある夢だった。
ラトフは心の中でつぶやき、いま見た夢のことを思いかえす。
さっきの夢……あれが、正夢になってくれたらと思う。

実際にあった子供たちとの会話と、いまの状況ではほとんどあり得ない夢の話があわさり、ラトフも途中から、もしやこれは現実なのかと思いこんでしまいそうになったほどだ。奇妙な夢を見たものだと、ラトフが考えていると、

「ねぇ、おとーさん――ユーリィが起きてるよ」

チェリンカが、いちばんラトフに教えたかったことを口にした。

「んっ？　ユーリィが？」

我にかえったラトフは顔をあげ、寝室のほうを見る。

すると、ちょうど扉を開けてユーリィが出てきたところだった。寝間着ではなく普段着のほうに着がえ終わっている。

さっそくチェリンカが、お姉さん気どりで叱った。

「あーっ、ばか。まだ寝てなさいよー」

「もう、だいじょうぶだよー。へーきだってー」

すっかり元気そうな顔で、ユーリィはラトフたちのほうにやってくる。

ユーリィは先日、街に連れていったときに、神殿の鐘の音を聴いて気絶してしまったのだ。それ以来、この二日近く寝てばかりいた。

「起きたとたん、おはよーだって。ほんと、ユーリィったら、おめでたくてのんきなんだからぁー」

あれほど心配して付き添っていたチェリンカが、いつもの活発な口調に戻っている。
ラトフはそんな彼女に「ご苦労だったな」と、そっと声をかけてやる。
一方のユーリィは背伸びをしたり腕を振ったりしていたが、
「えへへっ。からだ、なまっちゃったかなー？　運動してこないと」
もっと体を動かしたいと思ったのか、外に出ようと玄関へ向かいだす。
「あー、こらこら、どこへ行くの!?　お外は、もう夜よ」
「えっ？」
ユーリィはチェリンカに言われて立ち止まり、窓の外に目を向けた。
「ほんとだ、夜だ。うわーっ、すっごい雨だ！」
ユーリィは残念そうに言う。
一方のチェリンカは、
「ふわあぁ～っ……わたしなんて、もう眠くなってきちゃったー」
と、生あくびした口に手をやっている。
それもそのはず。気絶したあとのユーリィを心配して、ずっと寝るのをがまんしながら付き添っていたのだから、かなりの寝不足なのだ。
するとユーリィも、
「なんか……ぼくもまた眠くなってきちゃった……」

そう言って、瞼をこすりだす。
隣を見るとチェリンカも、同じしぐさをしていた。
ラトフは、ふっと笑った。
ユーリィはチェリンカの様子を見て、自然と同調したのだろう。
「だったら、ふたりとも今日はもう寝なさい」
ラトフが言うと、
「はぁーい、おやすみなさーい」
ふたりはラトフに挨拶して、自分たちの寝室に向かおうとした。
と、そのときだ。
ドンドンドン！
いきなり、家の扉を叩く音が響いた。
チェリンカと寝室に向かいかけたユーリィが立ちどまり、
「あれぇ、だれがきたの？」
と、真っ先に玄関へ走っていく。
ユーリィは扉の前で立ち止まり、じっと様子をうかがう。
ドンドンドンドン！
もう一度。

扉を叩く音に、家族三人は一様に疑問を浮かべて顔を見合わせた。
外はどしゃぶりの雨なのだ。アルハナーレムやミースなら、この悪天候に文句を言いながら入ってくるはずである。
「だれなんだろ……？」
戸口の前に立っていたユーリィは向き直ると、思いきって扉を開けた。
外の冷気が、どっと家の中に入ってくる。
ラトフはその様子をじっと見守りつづけた。
「ユ、ユーリィ、さむいよー、はやく閉めてー」
身をかがめるようにして、ぶるぶると肩をふるわすチェリンカがうったえる。
しかしユーリィは玄関の扉を開けたまま、外の様子をうかがっていた。
「あれぇ……だれも、いないよ？」
ふしぎそうに首をかしげている。
ラトフも心配になって、玄関に向かおうと立ちあがった。
そのときである。
「――ラ、ラトフ様！　神殿の奴である！」
家の外からアルハナーレムの緊迫した声が響いた。
「戻れ、ユーリィ！」

ラトフは、指図するように腕を振って叫ぶ。
だがユーリィは何のことだかわからず、きょとんとした顔で玄関の前に立ち尽くす。
すると、開け放たれた扉から何者かの足が飛び出し、ユーリィを蹴り飛ばした。
「えっ――がはっ！」
小さな体は軽々と宙に舞いあがり、ユーリィは玄関に面した壁に激突した。
「ユーリィっ！」
すぐさまチェリンカがユーリィを助けに駆けだした。彼女は、床の上に落ちたユーリィの両肩をつかむと、そのまま部屋の奥にひっぱりこんだ。
その間にラトフは床に落ちていた斧を拾いあげ、身構える。
緊張の一瞬が訪れた。
やがて、ユーリィを蹴り飛ばした黒い影が、泥のついた足を家の中に踏み入れてくる。
痩躯に黒い衣をまとい、獣のような仮面をかぶったチャスペルだ。
「チャスペル……貴様――」
ラトフは斧を投げる構えをしたまま、怨声をにじませる。
そのチャスペルは、玄関を入ってすぐのところで足を止めた。
ザァザァと雨の音が大きくなり、吹きすさぶ風が室内に侵入して暖炉の炎が踊り狂う。
「くくくっ……何年ぶりですか。あなた様も、まだ生きていらしたんですね？」

「……アルハナーレムとミースを、どうした？」
ラトフは、嫌な予感がして問う。
「ご安心ください……今回は人質にしておりませんので。ただ、ちょっとばかり腕試しがしたかったものですから、先に片づけさせていただきましたよ」
「何だと!?」
ラトフの声が、怒りにふるえだす。
さきほどのアルハナーレムの叫びが苦しそうだったのは、こいつと闘っていたせいなのか――。
けわしい表情でチャスペルをにらむラトフの斧が、その握力できしりと鳴った。
「何をしにきた!?」
「同じですよ、あのときと――」
チャスペルの仮面の向きが、部屋の奥に移る。その先には――子供たちがいた。
瞬時にして、ラトフは察した。それと同時にチャスペルに向かって斧を投げた。斧は回転しながら宙を走り、チャスペルの目の前の壁に激突する。
硬い天然石を積みあげて造られた壁に、斧はその刃をすべてのめりこませ、柄だけの状態で止まった。
そのすさまじい破壊力。喰らえば、チャスペルはひとたまりもなかっただろう。

「貴様――アーチェスのみならず、子供たちまでも！」

ラトフは、そいつに怨声を叩きつける。

その鬼気迫る声に、子供たちは息を呑んだ。自分たちに関係する話だったのかと、おそれを抱きはじめたようだ。

ふたりの姿にちらりと視線を向けたラトフは、

「大丈夫だ、わたしがおまえたちを守る！」

と、声を飛ばす。

一方のチャスペルは、壁に突き刺さった斧の柄を興味深げに眺めていたが、おそらくラトフとの決着を先につけなくてはならないと悟ったらしく、その仮面をこちらに向けて言い放つ。

「我が教皇様は、お求めなのですよ――『予備』を……ね」

――ぎらっ。

チャスペルが外套を広げ、中から手甲についた鉤爪をきらめかした。

どうやら最初からこうなることを予想して装備を整えてきたらしい。誇らしげに盤石の備えを見せつけてくる。

だが、そのような脅しに屈するラトフではない。山のような巨軀をもって、そいつに突進する。

身構えたチャスペルからくり出される鉤爪をラトフは前腕ではじきかえすと、次に拳をそいつの体の中心めがけて遠慮なく打ちこんでいった。
肉と肉がぶつかり合う鈍い音が、家の中に響きわたる。
丸太のような腕が持つ力によって、チャスペルの痩躯がしだいにしなだれてくる。
手甲からのびた鉤爪も、殴られる衝撃で留め具が外れたのか床に落ちてしまった。
純粋な力による攻撃では、痩せぎすのそいつには防ぐ手段もないのであろう。
だが、ふいに状況は変わった。
やられっぱなしのチャスペルであったが、
「なるほど――」
と、やけに冷静な声を仮面からもらしたのだ。
その瞬間、ラトフは驚愕した。
チャスペルがその細い腕で、ラトフの腕を捉えている。
この痩身の男が、正面から受け止めようとは。しかも力の勝負に、受けて立つ態度を見せてくるではないか。
驚くラトフを尻目に、チャスペルが仮面からささやく。
「我が任務の前に、あなた様とは個人的に決着をつけたいと望んでおりました……あのレラ・シエル崩壊時に受けた腕の傷……完治しても、いまだに忘れはしません。積年の

恨みを今夜こそ、晴らさせていただきますよ？」

そう言うなり、チャスペルが腕に力をこめてきた。

極限まで膨れあがったラトフの腕がミシリと音を立てる。

チャスペルが伸ばす細い腕との力が拮抗しているのだ。

「生身にしてはなかなかやるようですね。ですが……」

「ぐっ!?」

ラトフが膝をつく。力で押されているのだ。

「さあ、潰してさしあげます。アーチェス様とは近いうちに会えることでしょう――」

チャスペルが、ラトフの身を覆うように迫ってくる。

「――もっとも、存在をなくした者に魂が残っているかなど……」

そこで、チャスペルの言葉が遮られた。仮面が揺れ、何かが頭部を直撃したらしい。

直後に、

「やめろぉ！」

ユーリィの声がした。

4

荒い息を吐きながら、ユーリィは父がチャスペルと呼んだその男をにらみつけていた。さきほど蹴られた痛みはまだ残っているが、奮闘する父の勇ましい姿を見るうちに、そんなものはどこかに吹っ飛んでしまっている。

ユーリィは父を援護したい一心で、近くにあった自分用の斧をつかみとり、それをチャスペルに向かって投げつけたのだ。

斧はそいつの仮面に命中した。押し潰そうとしていた父の体から、そいつをすこし離すことができた。

いま、そのチャスペルはユーリィのほうに仮面を向けている。

見れば、仮面の一部は破砕して欠けているところが目立つ。そこから縦横にのびた亀裂に沿って青白い放電も見える。まるで、人間じゃないかのようだ。

「ユーリィ、ここはわたしにまかせておけ――おまえはチェリンカを守るんだ！」

父が叫んだ。

「う、うん！」

ユーリィはチェリンカの手をつかむと、彼女を自分の背後に引っぱった。

「チェリンカ！　ぼくのうしろに隠れて！」
「ユ、ユーリィ……」
「だいじょうぶだから。ぼくが守るから！」
父の言葉をしっかり受け取り、力強く答える。
――いつかは自分がチェリンカを守る、と決めていた。そのときがきたのだ。
だがチャスペルは、自身に起こった異変に気づいたらしい。
「こ、小僧っ!?　なんということを！　教皇様からいただいた大切な仮面をよくも――」
破壊された仮面の一部を押さえて、チャスペルがすこしよろめく。
その隙をラトフは見逃さなかった。
「おおおおぉぉーっ！」
一気に力をこめて、押しかえす。
不意を衝かれたチャスペルはあわてて体勢を立て直そうとするが、だがラトフの勢いのほうが勝った。
チャスペルの仮面に、ラトフは思いっきり額をぶつける。
その衝撃によって――仮面の亀裂はさらに大きくなり、破損の域も広がってしまう。
「や、やった！」
ユーリィは思わず一歩前に出た。

チャスペルはさらによろめきながら、ラトフの前から退く。
その隙を見て、
「ユーリィ、もっと下がっていなさい！」
父がこちらを見て言った。
ユーリィが何か返事する前に、
「ゆ、許しませんよ……」
とうとうチャスペルが腰にあったダガーを引き抜き、新たな武器の使用を決意した。
「わたしも——貴様を許そうなどと思わん！」
ラトフもすぐさま壁にかけてあった剣を手にすると、鞘を投げ捨てて構えた。
その様子をユーリィは息を呑んで見守る。
父は、ユーリィが見たこともない独特な構えをしていた。刀身を後方へのばして腰のあたりで溜めた姿勢だ。切っ先も、床につきそうな位置でぴたりと止められている。
チャスペルが警戒を強め、さらに一歩後退した。
そんな相手に構えを崩さず、ラトフはユーリィに伝える。
「ユーリィ、見ておくがいい！　これが、わたしの闘いだ——」
「——っ！」
びりびりとした緊張感を、ユーリィは感じとった。

父の言葉、その戦いぶり――すべてを見逃さないよう、目を見開く。
「チャスペル――わたしはあのとき、アーチェスを貴様になど渡すべきではなかったと後悔している。テテオ王女のときも豪雨に気をとられ、貴様のレラ・シエル侵入を予測できなかった――その意味においては、いままでは貴様の思い通りだった。だが、これからはちがう――」
「ほう、いかがなさるとおっしゃるのです？」
チャスペルが興味ありげに訊ねかえす。
「わたしは鬼になろう。ここで貴様を倒したあと、神殿に乗りこみ、アーチェスを救いだす！」
「な、なんですと!?　そのような大胆なこと――あなたおひとりで、できると!?」
チャスペルは驚きのあまり、声がふるえたようだ。
「それは、王都の民をすべて敵にまわすようなものですよ？」
「だから言っただろう。わたしは鬼になると――」
「くくくっ……戯言を！　とうとう迷妄にとらわれましたか」
チャスペルが肩をゆらしながら嘲笑う。
だが、そばで聞いていたユーリィは鳥肌が立つほどの感奮に襲われていた。
「おとーさん、ぼくも行くよ！」

ユーリィは叫ぶ。
奮起した父とともにありたい――。
そう願ったが、父はユーリィに顔を向けると黙って首を振った。
だめだ、これはわたしの問題だ――そう言いたげな固い意志が、目にあらわれている。
――でも！
ユーリィは心の中で叫んだ。
ぼくだって、おかーさんのために戦う！
おとーさんの役に立ちたいんだ――。
そこに、大人に近づくための階段があるように思えてくる。
ユーリィは、気持ちの高まりを抑えきれずにいた。

5

「ラトフ様。そのような迷妄は、あの世で存分になさい。いますぐ、わたしが送り届けてあげましょう――」
チャスペルがそう言って、襲いかかってくる。
ぢぃんっ！

ダガーの刃とラトフの剣とが、すさまじい音をたてた。
「覚悟を決めろ、こんどは外さん」
「……フゥーッ」
チャスペルが息を吐いて、構えを解く。うしろに下がり、不敵に嗤いだす。
「そもそも、あなたと真っ向から闘おうなど……わたしは愚を犯したようですね」
「ならばどうする？」
ラトフは剣を構えなおした。
「あなたの弱点を突くことにしましょう――」
チャスペルは、あらためて懐から腕を出す。手には五本ものダガーが握られている。
ラトフとの距離をとりながら、それを天井めがけて振った。
投げられた五本のダガーは弧を描き、子供たちの頭上に迫る。
――いけない！
子供たちに当たる！
「っ！」
ラトフはすばやく身をひるがえして双子に覆いかぶさり、盾となった。飛来したすべてをその背で受ける。巨軀が幸いとなり、双子に死角はない。
「お、おとーさん？」

「大丈夫だ、大丈夫だぞ――」
敵に背を向けているラトフがやさしくほほえむ。
ふたりの子供は安堵の表情を浮かべた。父がそう言うのなら安心である、という絶対の信頼がそこにある。
「さあ、それはどうでしょう」
チャスペルのあざ笑う声がラトフの背後に近づき、軽い衝撃が巨体をゆすった。
「えっ……？」
双子が父親の微妙な変化に違和感をおぼえ、うつむいていた顔をあげた。

ユーリィは、じっと父をあおぐ。
服がはだけて、ラトフの分厚い胸板が見えている。そこには大きな古傷があった。
ユーリィは父のその傷が以前から何だか誇りに思えて好きだった。いたずら心でぺたぺたと触っては、父にくすぐったいと叱られ、避けられても、あきらめずその背を追いかけまわしたものだ。
その、たくましい胸がゆっくりと横に傾いていく。
「えっ……？」

ユーリィは声をあげた。
父の大きな体が横に退くと、チャスペルの姿が入れ代わるようにあらわになる。
そいつは父の背中から腕を引いた。何かを引き抜いたようだ。一瞬だけ、先端が赤く染まっていたようにも見えたが、チャスペルの次の動きにユーリィは目を奪われた。
ぬっと、もう片方の手をのばしたチャスペルは、チェリンカの首をつかみとったのだ。
「く……かはっ！」
チェリンカの苦痛の声が響き、彼女の小さな身体がそのまま持ち上げられた。
「チェ、チェリンカっ！」
助けようと飛びつくが、チャスペルの腕がひと振りでユーリィを床に叩き落とす。
そしてすぐに起きあがろうとするその頭を踏みつけた。
「あうっ！」
ユーリィは、かつてない痛みに襲われる。
がしっ！
また踏みつけられた。
そのたびに、口に鉄のような鈍い味が広がる。それがあふれて、口から流れだす。
まだ踏みつけられている。
もはや痛みをじっと耐えるしかない。

ユーリィの視界の隅には、父の姿がある。
その瞳にすでに光はない……。

おとーさん……。

さっき耳にした父の思い。
おかーさんを助けにいく……。
それを自分もかなえたい。なのに、なんて自分は弱いんだ――。
悔しさがこみあげてきた。
負けたくない。
ユーリィは踏みつけられながらも起きあがろうとする。
「チェ……チェリンカ……を……はな……せ……」
「あきらめの悪い子供ですねぇ」
チャスペルは足を押し上げられる感覚に不快そうな舌打ちを鳴らし、ふたたび力をこめてユーリィの頭を踏みつけた。
だが、それでもユーリィはあきらめずに起きあがろうと必死になる。
「しつこいですねっ……しっ……し……ひひっ、ひゃーははは！」

チャスペルの本質的な狂気があらわれたのか、ユーリィはものすごい速さで何度も頭をガンガンと踏みつけられる。

頭に激痛が走った。

起きあがろうとしては踏まれ、腹を蹴られ、そのたびにユーリィの抵抗は鈍くなっていく……。

ラトフは体が冷たくなるのを感じながらそれを見ていた。

愛する子供たちが、傷つけられている……。

だが、もう体は言うことをきかず、指一本たりとも動かすことができない。でも——もうすこしだけでも。あともうすこしだけ、動けたなら……。

「ユーリィ！　ユーリィ……っ！」

チェリンカが、かすれる声をしぼりだす。涙をにじませ、床に横たわる弟に届かない手を必死にさしのべようとしている。

〝——あなた、子供たちをお願いしますね——〟

ラトフの脳裡によみがえる、妻のあの言葉があった。
そう、忘れはしない。
わたしは、それをいままで生きる糧にしてきたはず。
いつか妻が戻ってきて、家族四人で暮らせる日がくると信じていたはず。
ラトフは起きあがらなければならなかった。
もう目もかすんで、音も満足に聞こえないが、妻との約束を果たさずして、このまま冥府に旅立つわけにはいかない。
いま、この場で痛めつけられている子供たちを前に、ただ死に落ちるだけなど――。
――そのようなことだけは、ぜったいに許されないっ！
ドクンと、力強い鼓動が巨体を駆けめぐった。
最後に与えられた鼓動なのか。それによって得られた時間を有効に使えと、己の魂が叫んでいる！
「おや？　まだ生きていらっしゃったのですか……。ほんとに、親子揃ってしつこいですね」
気がつくと、チャスペルの仮面が正面にあった。
チェリンカの顎をつかんで持ちあげながら、こちらに振りかえっている。
どうやらラトフは無意識のうちに立ちあがっていたらしい。

さすがにチャスペルも、その不屈の精神に気圧されたようだ。
「……な、何があなたをそこまで奮い立たせるというのですか？　ただの人でしょう、あなたは？　え？　それとも化け物ですか？」
その声は、信じられないと言いたげにふるえている。
仁王立ちとなったラトフは、妻にうったえた。
「ア、アーチェス……許してくれ……きみを助けには……もう、行けない……かわりにわたしは……ここで、子供たちを守りぬく！」
ラトフは、全身に最期の力をみなぎらせた。
そしてチャスペルに手をのばし、チェリンカを持ちあげているそいつの手首をがっちりとつかみとる。
「放せ！　この子たちは、わたしのすべてだ！」
苦しそうにしていたチェリンカが目を開き、こちらを見た。それと同時に、ラトフは手に力をこめる。
「あひゃ!?」
チャスペルの手からチェリンカが解放され、床に落ちる。彼女はびっくりした表情で、父のことを見あげている。
「ひ……ひひ……また腕が……腕が……」

チャスペルは床にがっくりと膝をつき、手首の痛みにもがいている。
ラトフは、チェリンカを見おろしていた。
その隣にはユーリィが倒れている。
うつ伏せだった彼も、ゆっくりと顔あげて、こちらを見た。
子供たちを見おろして、ほほえんだ。
アーチェスに何度も、もっと笑ってと言われたことがあった。なぜかこのとき、それを思いだす。
そんな遠い過去とはちがい、もうラトフは子供たちを見ているだけで、自然と笑顔になれるのだ。
「ふ、ふたりとも……辛い思いをさせて、すまなかった……お、おまえたちに出会えて、ほんとう……に……よかっ……」
子供たちに伝える途中で、また意識が遠のく。
ゆらり。
直後、ラトフの肉体は宙をさまよった。

6

「おとーさん、おとーさん……ねぇ、おとーさん？　おとーさんってば」
チェリンカは、仰向けに倒れた父の体を何度もゆさぶりつづけていた。
「ねぇ、ユーリィ！　おとーさんが――」
助けを求めるように、ユーリィを呼んだ。
彼は床にうつ伏せたまま、動かなかった。気を失っているのかと思ったが、そうではない。怒りにふるえていたのだ。
やがて、いままでに見たこともない形相のユーリィが顔をあげた。
「……っ！」
チェリンカは息を呑んだ。
それは、とてもこわいという感情をチェリンカの中に生んだ。しかし、それに吸いこまれていくような自分もいる。
やさしいほほえみを浮かべたまま、微動だにしない父。次に――ユーリィがそうなるのかと思うと――身を引き裂かれる思いがした。
チェリンカは、立ち上がろうとするユーリィに力を貸すようにそばに駆けより、そし

て首から提げたクリスタルを手でつかんだ。
そうすることで、何かとんでもない力が生み出されるような気がしてくる。
誰に教わったわけではない。もうすでに知っていることを、封印していたものを解き放つ感覚に近い。
だが、そのとき。

〝――その力を使ってはだめ！〟

街に行ったときに聞いた、あの女の子の声が脳裡に響いた。
彼女の魂はふたりのすぐそばにいて、懸命に引き止めようとしているようだ。
だけど、もう遅かった。

床にうずくまっていたチャスペルがむっくりと起きあがり、ラトフの亡骸に対して悪態をつきはじめる。
「結局、あなたは無駄死になんですよ！」
その声が、ユーリィの耳に響いた。
そいつは、おとーさんの願いをうち砕いたのだ。

「……ゆるせない……」

ユーリィは、その言葉を口にした。

そこからふたりの意識は、闇のごとき世界に突入した。

ユーリィはチェリンカの手を引いて、闇の奥深くに進んでいくような感覚を味わう。

同時に、ユーリィの中で生まれてはじめての感情が芽生えた。

その感情は暗く底が見えないものだった。とてもおそろしくて、ひとりでは耐えられないような深淵が広がっている。

これは、あの街に行ったときに見た落とし穴に似てる——。

もう、その中に入ってしまっている。

ぬけられない、出られない。

だけど、握ったチェリンカの手は温かで、ユーリィに芽生えた恐怖すらも包んでしまえる強さを誇っていた。

だから、何も恐れるものなどない。

チェリンカといっしょなら。

あとはどうなってもいい——。

そんな決断を下した直後だ。

「ひっ、ひゃあああああぁぁぁ——っ！」

チャスペルが、突然の現象にあわてて周囲を見まわした。
ピシッ、パキン。
亀裂の広がる音が響く。
彼の仮面だけではない。家じゅうの至るところですべてのものが崩壊をはじめていた。
ビリビリと肌を突き刺すおそろしげな力が、この空間に満ちていく。
家具といわず、壁といわず、ありとあらゆるものが小刻みに震動している。

「な、何ですか、これは！　何が起きるというのです!?」
周囲を警戒するチャスペルが、あらためて双子を見て驚愕の表情を浮かべる。
ふたりの子供が握りあった手の中で、凄まじい魔力が発生しているのがわかったのだ。
光は、手の隙間からもれるなどというレベルではない。直視すれば網膜を焼くほどの強さを放ってくる。
――イイイイイ――
それはクリスタルの共鳴音というにはあまりに大きく、あまりに高い音だった。すでに可聴域を超えて音色すら判別できない。だが、生成される力がいかほどのものかは、崩壊していく周囲の光景によって示されていた。
あたり一面が、光の中で消滅していく。

「ひいいいいいっ！」
チャスペルは、ついに悲鳴をあげた。
この時間の流れがすべて失われる。歴史が止まる、歴史が変わる――何がどう変わるのかわからない。ただひとつわかるのは、神の偉業に等しい行為をふたりの子供が成し遂げようとしていることだ。
「や、やめて……やめ……あ……っ……」
クリスタルの力が引き起こす巨大な業を理解したと同時に――。
チャスペルという名の存在は、あっという間に光に呑まれた。

7

それから数日後……。
この日も、ひとりっきりの作業だった。
土を掘り、石を退け、根をひく。
寒さでかじかむ手に息を吹きかけては、また作業に戻る。
夕陽がさして世界を赤く染めるころ、それは終わった。
吐く息は白く荒い。

目の前には父の墓が完成していた。
ユーリィは、寒さと疲労でふるえる体に鞭打って道具を片づけはじめる。

チャスペルが消え、家の壁が崩れ、光の中にたくさんのものが呑みこまれたあの日から、どれだけ眠っていたのか感覚がない。
一日だったような気もするし、三日だったような気もする。
ユーリィが目を醒ましたときには、なぜか家はちゃんと元通りになっていて、父の亡骸だけがそばにあった。
チャスペルの姿はどこにもない。
やはり消えてしまったんだろうか、あの光の中で……。
確かめようと家を出て、あたりを捜してみたが、誰の姿もない。隣の家に入ってみたが、そこももぬけの殻で、アルハナーレムの姿もミースの姿もなかった。
ユーリィは、この世界にたったひとりだけ残されてしまったような寂しさをおぼえ、ずっと捜しまわった。
だけど、見つけられなかった……。
やがて自宅に戻ったユーリィは、部屋の隅で小さくふるえていた大切な人を発見する。
彼女を見つけられたことが、今日までの支えとなっていた——。

ユーリィはもう一度、父の墓に祈りを捧げる。
（ここから、見守っていて……）
そう心の中でつぶやき、墓をあとにした。
自宅は、すぐ目の前だった。

そっと開けた扉の隙間をぬけるようにユーリィは薪を持って入ってきた。外は雪こそ降っていないが極寒の世界だ。その冷気を家の中に入れないよう、できるだけ扉を開けずに中に入る。
家の中はしんとしている。誰の声もしない。
「ごめんね、遅くなっちゃった。すぐに食べるもの用意するから」
ユーリィは寝室のベッドで休んでいるチェリンカに声をかけると、台所で夕飯の支度に取りかかる。
よく煮込んだスープは朝につくっておいたので、温め直すだけでいい。
料理を入れた器に木さじを入れ、チェリンカの待つ寝室に向かう。
「さあ、できたよ」

寝室に入ってチェリンカの休んでいる寝床に料理の器を置くと、ユーリィは彼女の背中に手をまわし、支えるように上体を起こした。

「大丈夫かな。ひとりで食べられる？」

だけどベッドで身を起こしたチェリンカは、ユーリィの声に返事をしない。渡された食事に手をつけるでもなく、それを両手に持たされまま微動だにしない。

「そう、わかった……ぼくが食べさせてあげるよ」

ユーリィはチェリンカの器から木さじをとって、彼女の口にそっと運ぶ。

その木さじを持つユーリィの手はひび割れ、爪は土色に似て黒ずみ、とても子供の手には見えない。過酷な労働をつづけていることを物語っていた。

「おいしいかな？　けっこう頑張ったつもりなんだけど」

「……」

「そう……ごめんね。料理なんてしたことないから……ああ、でもチェリンカだって似たようなもんだよね？　料理なんて、おとーさんにまかせて、ちっともやってなかったから。あはは」

「……」

「……はは……」

ユーリィの笑いがしだいに小さくなっていく。

チェリンカの瞳は宙の一点を見つめたまま、まばたきもしない。
もうずっと、こんな調子だ。
まるで人形のようにしか思えない。
髪はすべての色素がぬけたような半透明に近い状態で、存在感もうすい。
またあの笑顔を見ることも、ユーリィを叱りつける声も耳にすることができない。
だけど生きているはず。
死んじゃったわけじゃない。
ユーリィはそう思う。
いろんな悲しいことがたくさんありすぎて、ちょっと疲れてしまっているだけだ。
だから休ませてあげればいい。
そのぶん自分が働いて、チェリンカを楽にさせてあげなきゃ。
そうすれば、いつかチェリンカは戻ってきてくれるはず。
そうすれば……。
ユーリィは彼女に与えていた食事の手をとめ、しばらくうつむいてしまった。
形のないものを信じていくことが、どれだけつらく大変なことかを知った。
ひとりになったことで身にしみてわかる。

その夜、また父の墓を訪れた。
「おとーさん……」
不安を隠せない声で呼びかける。
しかし、それに返事してくれる人はここにはいない。
それでも自然に言葉があふれてくる。父に甘えたくなる。
「ぼく……ひとりぼっちなんて、やだよ……チェリンカに、もとに戻ってほしい。どうすればいいの？　ぼくが強くなったら、ほんとうに戻ってきてくれるのかな？　ねえ、おとーさん、チェリンカは死んじゃったりしないよね？　もうお墓をつくるのなんて、いやだよ……ぼく……」
どれだけ待てばいいのだろう。
もしこのままだったら、どうすればいいのだろう……。
信じても、信じても、不安はあとから次々に出てくる。
決して消え去ってはくれない。
「おとーさん……お願いだから、守って……チェリンカを守って……」
父の墓に向かって、助けを求めてしまう。
もう、アルハナーレムもミースもいない。そして父親も。

だから、がんばれるのは自分だけなのだ。
チェリンカを守れるのは、もう自分しかいないのだから。
その言葉を、ユーリィは頭の中で何度もくりかえした……。

第四章　チェリンカの復活

わたしは、ユーリィの使った力の大きさに驚きました……。
ふたりがつながっているからこそ、それは深くて計り知れないのです。
でも、力を使うためにユーリィの中に芽生えた感情はクリスタルが拒むものでした。
わたしは、クリスタルのとてつもない大きな意志に耐えられなかった彼女の心を呼び戻さなくてはなりません……。

1

荒野を紅い月明かりが照らし、突き刺すような冷気があたりを覆っている。
その紅い月光を浴び、父の墓もほのかに闇の中で浮かぶ。すでにまわりの地面は硬くなり、墓標も凍りついていた。
そんな極寒の地の厳しさに覆われた中で、
「ほっ！　はぁっ！　たぁっ！」
寒さを吹き飛ばすような、ユーリィの活気ある声が響く。
実体のないテテオの魂は、彼の様子をじっと見守る。
（ユーリィさん……）
人から見えない不可視の存在であろうとも、彼女の心は人のそれと同じ。いまもこう

して頼もしさを感じながら、彼のことを見つめている……。

ユーリィは父の形見である剣を振っていた。

「ふっ！　はっ！　くっ！」

彼は、父の壮絶な戦いぶりを見てからというもの——日に日にそれに近づこうとする思いが強くなってきたらしい。

たしかに身のこなし、剣の扱いはまだまだだが、その熱意は同じ年ごろの少年たちにくらべて、はるかに強いだろう。

おそらく、かるく凌駕しているはずだ。

ユーリィを駆り立てているものは、父の遺した言葉……。

〝おまえはチェリンカを守るんだ——〟

戦いの中で父が叫んだその言葉は、いまもユーリィの耳に残っている。

そのためにユーリィは、あらゆる意味で父に近づこうと思った。

守り抜く——その姿勢を貫いた父の意志を受け継ぐためにも。

「ふぅ……体があったまってきたよ……」

ユーリィは満足そうにつぶやき、また剣を構えなおす。

寒さに対抗するひとつの手段は、とにかく体を動かすことだ。そう思ってからは、昼夜を問わずに外で剣を振りつづけた。

それも父の墓前で。
ここでなら、さまざまな父の言葉がよみがえってくる。
そう、いまこのときも――。
いつか聞いた、あの言葉が……。
（無理だとあきらめたそのときに、すべての道が断たれる。だが、できると信じたとき、世界はお前たちに力を貸してくれるだろう……強い心の前に、思いどおりにならないことなどない……）
父からそう言われたときは、まだ意味がよくわからなかった。けど今は、すこしだけわかるような気がする。
あきらめたらいけないこと。
世界が、ぼくたちに力を貸してくれるかもしれないこと。
そのためにはどうすればいいのか。
ユーリィは父の視線があることを信じて、
（しっかり見ててよ、お父さん――）
心の中で、そう伝えながら剣を振りつづける。
ただ、ひたすら振りつづける。
それが、彼に残された〝生きる術〟なのだ。

だが、その思いに重くのしかかるように、苦難の道は惨憺たるありさまである。あの絶望に落とされた日から、ユーリィは休むことなく働いていた。植生に乏しい荒涼とした岩山では冬場に飢えがやってくる。そんな中で備蓄された食糧のすべてをチェリンカにまわし、自分のぶんは新たに探し求めた。

しかし、ろくなものがない。

飢えの進行はしだいにユーリィの意識を変え、食べられるのなら何でもいいという極限の状態にまで至らせた。

通常では食用とされない動植物までも口にできるようになった。それでも厳しいときは木の根をかじってでも飢えをしのいだ。さらに何日も雪水のみですごし、意識が朦朧とする危険な状況下になっても自宅に貯蔵されたチェリンカのための食糧にだけは絶対に手を出すことをしなかった。

体はとめどもなくやせ細り、肌は黒くカサカサで、くちびるは割れていつも血がにじんでいる。

ユーリィは自分が生きているのが不思議でならなかった。いや、何か見えない力で自分は生かされているのだろう。いつ倒れてもおかしくないのに、まだ自分は動いている、歩けている。そしてチェリンカのことを想いつづけられている——。

どんなに体が弱ってきても、それとは対照的に瞳だけは力を失うことはなかった。ぎりぎりの状況下に置かれてなお、瞳は生物が持つ純粋な本能に研ぎすまされて煌々と輝いている。

生き残るためにはそれしかないのだ。

父が生きていたころとは比べようもないくらい現状は酷いありさまなのに、それに順応していく自分がいる。下手をすると自分の名前すら忘れそうにもなる。

だけど、チェリンカの前ではいつもと変わらない笑顔を見せつづけられた。

ギィッ……。

ある日の夕刻、子供たちの寝室に入る扉を開けて、ユーリィが入ってくる。

その痩せ細った両手で、重そうな木箱を運んでいた。

チェリンカの枕元にいたテテオの魂が注目すると、その木箱には伝書らしき大冊がたくさん詰めこまれてある。

「よいしょ。またミースの書棚から『錬金術の本』を持ってきちゃったよ。えへへ……むずかしいんだけどな、これ――」

ユーリィはそう言って、自分のベッドのそばに木箱をおろす。すでに彼のベッドの枕元には、似たような伝書が開かれたまま乱雑に置かれてあった。

「でも、金属生成をしなきゃ、強い『鎧』なんて造れないしね……」

と、木箱から新たな伝書を取りだし、枕元にまた積みあげていく。ひとり言をつぶやきながら作業しているその姿に、テテオは声をかけてあげたくなった。

（がんばってください……）

「うん。今晩も寝る前に、がんばって読むぞ――あ、チェリンカには、いいものを用意してあるよ。ちょっと待っててね――」

ユーリィはうれしそうにベッドにいるチェリンカに話しかけると、急いで寝室から出ていく。

向かった先は台所だった。そこには、すでに鍋で煮こまれたスープがある。

ユーリィはそのスープを器によそって、寝室に戻ろうとする。

その瞬間、

「――っ！」

ユーリィは器を持ったまま、すこし身構えた。

しばらくじっとして、様子を確かめるような表情を浮かべる。

「……風か」

そうつぶやき、構えを解いた。スープの入った器を持ち直し、ユーリィはチェリンカの待つ寝室に戻っていく。

そのあとだった。一陣の強い風が、家の玄関口をがたがたと揺らしたのは。ユーリィは、遠くのちょっとした異変を瞬時に察するほど、感覚が鋭敏になっていたのだ。

「お待たせ――」

ユーリィは寝室に戻った。スープの入った器を大事そうに抱えて、チェリンカのいるベッドへと近づいていく。

「ほら、チェリンカが大好きな『まんまるコーン』だよ」

「……」

チェリンカは依然として何も答えない。瞳が宙の一点を見つめたまま動かない。

しかし、かまわずユーリィは話しかける。

「食べやすいようにスープにしてみたんだけど、どうかな。気に入ってくれるとうれしいな」

ユーリィは木さじで、チェリンカの口にスープを運んでいく。

食べてくれているのかどうかさえわからない。チェリンカの存在はうすく、油断すると消えてしまいそうな危うさが感じられる。

（いまの彼女は、わたしと同じなんですね……）

チェリンカのそばにいるテテオの魂が、そうつぶやく。

「……おいしかった？」

ユーリィは笑顔で、チェリンカに訊ねる。

彼女は何も反応しない。それでもユーリィは、彼女が満足してくれたと信じている。スープが残り少なくなった器をベッドの脇に置くと、

「また明日の分もあるから。今夜はそろそろ寝る？」

そう言って、ユーリィはベッドで上半身を起こしたチェリンカを支えながら、しずかに寝かせていく。その途中で、

「そういえば……このあいだ、昔の夢を見たよ……」

ふと、思い出したように言う。

「ぼくがちっちゃかったころの夢でね。お父さんに、アルにミースもいてね……とても楽しい夢だったよ……」

そのときの様子を思い返し、ユーリィはじつに楽しそうな表情をする。

彼にとって、夢の中で幸せな暮らしに出会えるのが何よりのごちそうらしい。そのせいか、すこし真顔になってつぶやく。

「チェリンカも、ぼくたちの出てくる夢を見てくれるといいんだけどな……」

（ええ、見ていらっしゃると思います……）

「そう。それで、できたら夢の中で、ふたりで会えたら——もっといいよね？」

それにもテテオは答える。
（だいじょうぶですよ。願いは、かならず届きますから……）
「そうだよね、いいよね。チェリンカも、そう思うよね？」
「……」
そこで、チェリンカが笑ってくれた——。
横になった彼女の顔を見おろすユーリィは、そんな想像をして補おうとする。
しかし、しばらくしてから現実に戻ったように、照れ笑いを浮かべた。
「ははっ。ちょっと、しゃべりすぎちゃった。さぁ、目を閉じて。おやすみ……」
ユーリィはチェリンカの体に布団をかけると、自分のベッドに戻って積みあげた伝書の整理を再開する。
「えーっと……こないだミースの実験室で壺を使って、どこまでやったんだっけ……」
布団の中にもぐりこむと、昨夜まで読んでいた頁を開きなおす。そして木箱から羊皮紙を取りだし、そこに書きこんだ実験結果の覚書と照らし合わせていく。
その真剣な表情は、以前の甘えん坊だった時代のユーリィとはちがって、すこし大人の顔だちに近づきつつあった。
何でも自分自身でやらなければいけない状況が、彼を大きく成長させているのだろう。
ミースやアルハナーレムの部屋に残された書物や材料、備品の数々は、ユーリィにそ

れまで知らなかった世界の扉を開けてくれた。それらの知識に触れているうちに、自然と武器や防具をみずから造っていくための知恵や工夫もついてくる。

大人たちがユーリィに残したものは、彼に考えるきっかけを与えたり、ときには大きな助けともなっていたのだ。

しばらく時間がすぎたころ、それまでじっとユーリィのことを見守っていたテテオがつぶやく。

（おやすみになったんですね……）

そのやさしいまなざしの中で、ユーリィはいつしか眠りについていた。開いた本を枕に、疲れて寝てしまったらしい。

（ユーリィさん、待っててください……チェリンカさんが、戻って来られるまで……）

テテオは、ユーリィに言葉をおくる。

眠ってしまったユーリィに、それは届いたかどうかわからない。

しかしそれは、

「う〜ん……むにゃむにゃ……チェリ……ンカぁ……」

と、ユーリィの寝言を誘っていた。

テテオは、そんな彼の寝顔にほほえむ。きっとユーリィも、夢の中でチェリンカのことを探し求めているのだろう。

（では、わたしも行ってまいります――）

そう言って、テテオはベッドで横になったチェリンカに向き直る。

彼女はあいかわらず、身動きひとつしない。

この世界から消え去ってしまうかもしれないほど、彼女の存在はうすれた状態になってしまっている。

すべては、負の意志による代償を受けた結果だ。

それはテテオのたどった最期の状況と、よく似ている……。

ゆえに、彼女を救いたかった。

何とかして、彼女を元どおりにさせてあげたい。

回復の時間は、彼女の失われた記憶を徐々に再生しつつある。

残された最後の〝大事なところ〟を、彼女に取り戻してもらいたい――。

テテオはそう願っていた。

（チェリンカさん……そちらに戻りますね……）

宙に浮かぶテテオの魂は、眼下の彼女の体の中へすーっと溶けこんでいった。

2

今朝も、日差しがやわらかで心地いい。
チェリンカは気持ちよく目覚めた。むっくりと起きて、窓を開け放つ。山からの澄んだ空気がすっと入ってきて、さわやかな気分になった。
背をのばして大きく息を吐きだし、着替えをはじめる。ベッドの脇には父が用意してくれた洋服がきれいに畳んで置かれてあった。
それに着替えながら、ふと寝室の中を見まわす。
自分のベッドの隣が、不自然に空いているのに気づく。まるでそこに、もうひとつのベッドが置かれてあったんじゃないかと思うほどの違和感だ。
なんだろう……昨夜もそんなことを感じた。
「……」
おかしい。なんでそんなことばかり気になるんだろう……。
打ち消すように首を振る。いくら考えても答えが出ないのだから、きりがない。
チェリンカは考えることをやめた。
やがて着替え終わると、彼女は元気よく寝室から出ていく。

「おはよーっ！　おとーさん！」
大きな声で、朝の挨拶をする。
「おお、チェリンカ！　おはよう」
父親のラトフは台所から答えてくれた。
チェリンカは、さっそく声がしたほうに向かう。
台所では、大きな体をした父のラトフが朝食を作ってくれていた。
「チェリンカ、今朝はごちそうだぞ――」
と、振りかえった顔がやさしく笑う。
「えっ、なになに？　何を作ってるの？」
ぱっと明るく輝いたチェリンカが、父のそばに寄っていく。
父は厚手の鍋で、ジャガイモと果物をいっしょに炒めていた。
「これは、わたしが昨日採ってきたチェリンカの大好物の『しましまリンゴ』だよ。ほら、いい香りがしてこないか――」
「えーっ、わたしが大好きなのは『まんまるコーン』だよ？」
すかさずチェリンカが言いかえす。
父のラトフは、目をしばたたかせる。
「ん？　そうだった……か？」

「そうよ。しましまリンゴは、あの子の大好物だよ」
「あの子？」
ラトフはそれを聞いて、急に怪訝そうな顔をした。
父の隣にいるチェリンカは、当然のようにうなずく。
「うん、あの子だよ」
「チェリンカ、あの子って……誰のことを言っているんだ？」
ラトフが真顔で訊ねると、
「え？　だから……あの……えーっと……」
チェリンカは、自分で口にしたあの子の名を思い出そうとした。
しかし名前は出てこない。
「わたし、誰のことを話してたんだろ……」
しましまリンゴ、しましまリンゴ……しましまリンゴが大好物の、あの子。
それは、だれ？
「ねぇ、おとーさん」
チェリンカは、しましまリンゴを炒めつづける父に訊いた。
「あの子って、うちの子じゃなかったの？」
「ん？　あの子？」

ラトフが調理しながら、ふとチェリンカのほうに顔を向ける。
「うん。わたしともうひとり――そのしましまリンゴをおいしそうに食べてた子」
「……わたしは、このしましまリンゴは……いままでチェリンカの大好物だと思っていたのだが」
父はすこし、とまどっているような返事だった。
「そうなんだ……」
「チェ、チェリンカ……どうしたんだ？　いきなり、そんなことを言いだして」
「えっ……いや、わかんない……もうひとり、いつもわたしのそばに……だれかが、いたような気がして……」
「チェリンカ、はやく顔を洗って、目を覚ましてきなさい」
「う、うん……」
首をかしげつつも答える。父のラトフには寝ぼけていると思われたらしい。
そうなのかな……わたし、寝ぼけてたの？
でも、もうひとり――わたしのそばには、誰かが……。
そのことを聞いても、おとーさんはとまどっていた。
だとしたら、やっぱりいないの？
もうひとりいるって、わたしが夢でも見てるの？

ううん、ちがうよ。いるよ……いるはずだよ。
目を閉じて集中すると——そのしましまリンゴをよろこんで食べている男の子の姿が、おぼろげながら浮かんでくる。
そう、あの子だよ！
あの子はどこ？　ウチにいたはずじゃないの？
どうして、はっきり思い出せないの？
わからない、わからないよ……。
「チェリンカ、そろそろ朝ごはんができるぞ」
「あ、うん」
考えごとをしていたチェリンカは、父に促されて我にかえる。
やっぱり、きりがない……。
いくら考えても、答えが出てこない。
いつも、そうなんだ。これのくりかえし……。
チェリンカは、あきらめたように考えるのをやめた。
そしてはやく顔を洗ってこなきゃと、あわてて台所をあとにした。

玄関の扉を開けて、チェリンカは外に出る。
おだやかな風がやさしく吹いてきて、春の訪れを感じさせる光景が目の前に広がった。
山間の空気は依然として澄みわたり、小鳥の鳴き声も空から聞こえてくる。
目の前にはアルハナーレムとミースの家があって、今朝もその煙突からはむくむくと煙が出ては風に流されていく。
今朝もいつもと変わらない、のどかな風景。外に出て、大きくのびをしたチェリンカが井戸に向かって歩きだすと、
「こらーっ、待つのです！」
「待たないのである！　我ではないのである！」
「うそをつくと許さないのです！」
いきなりアルハナーレムとミースが言い争いながら、家の外に飛び出してきた。
ふたりのもとに駆けよりながら、
「どうしたの？　アル、ミース――」
「あ、チェリンカ。おはようなのです！」
「うむ、おはようなのである」
と、アルハナーレムとミースはそろって挨拶を返してくる。
「おはよう――。朝から、ふたりとも元気いいよねぇ～。ケンカするなんて――」

チェリンカが笑顔で言うと、ミースがさえぎるようにまくしたてた。
「喧嘩ではないのです。この鳥のおっさんが、ミースの大事な『錬金術・超合金属生成の書』を勝手に持ち出したのです！」
「だから持ち出していないのである！」
「いぃーえ！　持ち出したのです！　そればかりか――ミースの大事な『壺』も勝手に使って実験しやがったのです！」
「うそである――我は、錬金術などはしていないのである」
「いぃーえ、おまえ以外に考えられないのです！　ほかに誰がやるというのです!?」
「そ、それは……我にもわからないのである」
ふたりの激しいやりとりに圧倒されていたチェリンカだったが、
「ねぇねぇ、錬金術って、なぁに？」
「はいです！　よくぞ聞いてくれたですっ！」
興奮したミースは、ここぞ独壇場と言わんばかりに勢いよく答える。
「古今東西――錬金術の科目は星の数ほどあれど、その中でも――この鳥の阿呆は、なんと金属を超強力に再加工する技術を使いやがったのです！　ごまかしても使ったあとの壺にこびりついていた薬品と、それから近くに開きっぱなしになってた錬金術の本の頁から一目瞭然なのです。しかもミースの大事にしていた調合薬を片っぱしから投入

しやがって、ものすごぉーく強い金属を作ろうとしていたのはまるわかりなのです！　何なのですか、アル！　おまえはそれを造って、どっかの魔王でも倒しにいきやがるつもりだったのですか――え？　どうなのです！」

「そ、そこまで言うのなら、我も言ってやるのである――そういうミースも、我の蔵書を勝手に持ち出しているのである！」

「はあ？　ミースは持ち出していないのです」

「否である！　持ち出されているのである。ミース以外に考えられないのである！」

ふたりの言い合いが激化したときだった。

ぽかんとして聞いていたチェリンカが、いきなり何かを思い出したように手を叩く。

「――わかった、ヨロイだ！」

「えっ？」

「うぬ？」

ミースとアルハナーレムが言い合いをやめて、チェリンカのほうを見る。

「チェ、チェリンカ……ヨロイって、あの防具の『鎧』のことなのです？」

ミースが目をしばたたかせながら訊ねた。

「うん。それを造ろうと、本をいっぱい木箱に入れて、かき集めてたみたいよ――」

「むぅ……誰のことであるか？」

アルハナーレムも興味を示して訊ねる。
「それは……えーっと、だれだろ？」
チェリンカはそこまで思い出せないのか、急に腕を組んで考えこみだす。
アルハナーレムとミースはお互いに顔を見合わせ、チェリンカが次に何を言いだすかをじっと待ってみたのだが、
「うーん……うーん……はあっ、やっぱりだめ……それ以上は、思い出せないみたい」
と、チェリンカは考えこむのをやめてしまう。
ならば、とミースは、別の角度から質問してみようと思ったらしい。
「あ、あの、チェリンカ……その人のことを、どこで見かけたのです？」
「え？」
「そうである。この土地を訪れた者であれば、人相を聞いておきたいのである。それで我も、今後は注意するのである」
アルハナーレムも、つづいて質問した。
チェリンカは頭の中で、また思い出そうとする。名前のほうはまるで出てこなかったが、その姿はくっきりと脳裡に浮かんできたらしい。
「えーっとね……わたしと同い年くらい！」

「な、なんです？　こ……子供なのです？」
「うん。それでね、男の子――」
「ふむ……どこに住んでいる子なのであるか？」
「えーっとね……あ、そうだ！」
チェリンカは、自分の家を指さした。
ずるっ。
アルハナーレムとミースは、すこしコケそうになる。
だが体勢を立て直したミースが、
「あ、あの……チェ、チェリンカ？」
「そこは自分の家なのである――」
アルハナーレムも体勢を立て直して、あとにつづく。
「そう、わたしの家で見かけたんだよ――」
チェリンカは、自信をもって答える。
ふたりは、虚を衝かれたような顔になってしまう。
「ふむ……話がよく見えなくなってきたのである」
アルハナーレムは頭を抱えそうになっていたが、ミースはあきらめずに質問を重ねた。
「チェリンカ……いつ、自分の家でその子を見かけたというのです？」

「……いつって……あれ？　いつだったんだろ？」
ふいにチェリンカは、自信なさそうな声をもらす。
しかも、
「もしかして……わたし、夢の中で見たのかも……」
「えっ？」
チェリンカのつぶやきに、ミースがきょとんとした。
「ユ、ユメ!?」
「――の中であるか!?」
ミースとアルハナーレムは、そこで思考が止まったように動かなくなる。
「う、うん……そ、そうだったような……気がする……」
チェリンカは首をかしげながら言った。
さっきまで、頭の中にくっきりと浮かんでいた彼の姿――それは現実の出来事として、おぼえていたはず。
家の中で、木箱に本をたくさん詰めて運んでいたあの子の姿……。
あれは、夢の中の出来事だったというの？
チェリンカは、またわからなくなってしまう。
一方のアルハナーレムとミースのふたりは、しばらく無言だった――いや、何も言え

なくなってしまったというほうが正しい。
やがてミースは拳をかたく握りしめ、アルハナーレムに向き直る。アルハナーレムのほうも同じ動作をした。
「アル！　ミースの本を持ち出したのは、やっぱり！　おまえしかいないのです！」
「言いがかりである！　ミースこそ、我の蔵書を持ち出しているのである！」
「あ、あの、ふたりとも――」
またもや激化したふたりの言い合いに、チェリンカはひとりでオロオロしっぱなしであった。

3

「……てなことで、さっきは大変だったよー」
「そうだったか。あのふたりの仲裁に……」
「うん……」
束ねて横に置かれた薪の上に座っていたチェリンカが、ため息をつく。
その日の午後、チェリンカは家の前で薪割りに精を出す父に話を聞いてもらっていた。
ラトフのたくましい両腕は、軽々と斧を持ちあげている。そして幾度も振りおろし、

いくつもの薪を割っていく。
見ているうちに、チェリンカは自分もそれを真似したくなった。なぜか、できるような気がしてきたのだ。
あのときと、同じように――。
「ねぇ、おとーさん。わたしもやる！」
「ん？　チェリンカが？」
薪割りの手をとめたラトフが驚いて、そばに寄ったチェリンカのことを見おろす。
「わたしも、おとーさんのお手伝いをする！」
「いや、これは……チェリンカには無理だ」
「無理じゃないよ。前にもやったことがあるから――」
「前にも？」
ラトフは怪訝そうに答えたが、チェリンカは、あのときと同じようにしてみたかった。
「大丈夫だから、貸して」
「あ、ああ」
と、心配そうな顔をしたラトフから、チェリンカは斧を受け取る。
その瞬間、
「うわっ、重いっ――」

柄を持ったまま、斧の刃を地面に突き刺すように落としてしまう。
「チェリンカ、無理をしなくていいんだぞ」
そばで見ている父が、諭すように言った。
チェリンカは首を振る。
「む、無理なんかじゃないもの……前は、ちゃんとできたはずだから……うっく！」
力をこめて、チェリンカは斧を振りあげようとした。
しかし途中で、ふらふらとよろめいてしまう。
ラトフはあわてて、チェリンカの背中に手をまわして支える。
そこから、斧はちっとも持ちあげられない。
「あ、あれ？　どうして……前は、できたはずなのに……」
悔しそうにつぶやくと、ラトフはしずかに首を振った。
「チェリンカ、ひとりじゃ無理だ」
「ひとりじゃ……？」
はっとして、父の顔を見る。
ひとりじゃ無理……もうひとりいれば。
もうひとり、足りないから……。
チェリンカの心に、そんな考えがよぎったときだ。

（もうひとり、いましたよね――）

ふいに少女の声が、脳裡に響いた。

「えっ、だれ？」

チェリンカが顔をあげて、まわりをキョロキョロしだす。

「ん？　どうしたんだ、チェリンカ？」

チェリンカの背を支えていたラトフが、同じようにあたりを見まわす。

しかし、そのふたり以外には誰の姿もない。

「ねぇ、おとーさん？　いま、わたしに何か言った？」

「いや、何も言ってないが」

ラトフが答えると、チェリンカはますますふしぎそうな顔をする。

「へ、へんね……だれかの声がしたんだけど……」

声の主を探そうとして、あたりに目を配っていたときだ。

（チェリンカさんにとって、大切な方……）

また脳裡に、女の子の声が響いた。

「えっ――大切な……」

チェリンカは、びくりとする。

心の奥で――なぜか、そのとおりだとうなずく自分がいた。

4

翌朝、チェリンカはアルハナーレムの家を訪れていた。
そこは魔法書であふれた部屋だ。本棚に収まりきらない本は床のいたるところに積みあげられ、どこに何の本があるか持ち主でもわからないようなありさまである。
そんな雑然とした家の奥に、小さな工房があった。
工房の卓に向かうのはアルハナーレム。その隣には、チェリンカが腰かけている。
「ねぇ、まだなの？」
「もうすこしである、待っているのである」
アルハナーレムはつれなく返事した。
チェリンカはおもしろくないといった顔で、ぱたぱたと足を強く振る。
「アルぅー、早くしてよー」
「すぐに終わるのである。チェリンカはいい子なので、待っているのである」
「うん、いいよ」
チェリンカは、にっこりとする。
そしてアルハナーレムの作業を横からのぞきこんだ。

アルハナーレムは卓上に置かれた微細なアクセサリーに鎖を通していた。鳥羽に覆われた大きな手が器用に動いて、細かいビスをはめこんでいく。
「……終わった？」
「早すぎるのである」
「だから早くしようよー。おとーさんたちも外で待ってるのよ。早くしないと街に連れていってもらえなくなるし――アルだって、いっしょに街へ行くのよね？」
「むぅ。そうであるな。わかっているのである。急ぐのである……」
アルハナーレムは彼女のクリスタルをアクセサリーに加工してあげようとしていたのだが、しだいにクリスタルが秘めている力のほうに関心が移ってしまったらしい。
そのため、やたらと時間がかかっていた。
「むぅ……なんというか、魔法を使う身としては少々複雑な気持ちである」
などと、つぶやいている。
チェリンカから預かったクリスタルは、彼女のそばを離れると石ころのように輝きを失ってしまう。
だがアルハナーレムがチェリンカのほうに掲げ直すと、ふたたび輝きを取り戻すのだ。
これではクリスタルから――これはチェリンカにしか使えないものだとはっきり言われているのも同然だ。

魔法の専門家なのに、あからさまに拒絶されては引っこみがつかない。
アルハナーレムはややむきになったように彼女の前でクリスタルを掲げながら、しばらく考えにふけってしまう。
その様子に、チェリンカはため息をついた。
これではいつまで経っても終わりそうにない……。
チェリンカが、そう思ったときだった。
「ふむ。そういえばチェリンカは、もう魔法を使えるようになったであるか？」
「え？」
いきなり訊かれたチェリンカは目をぱちくりさせる。
「あ、えっと、なんていうの……その……」
「むぅ……まだダメであるか」
アルハナーレムは残念そうにつぶやく。この強大な力をすこしも引き出せないとは、なんともったいない話なのだろう——その思いが高まったのか、
「相性的に、これはチェリンカだけが使える最高のものなのである。宝の真珠は、豚が持ち腐れているのである」
と、ずばり言った。
負けず嫌いのチェリンカは、

「ぐっ……つ、使えるわよ。いっしょなら、できるもの！」
「ん？　チェリンカ、誰といっしょなら、できるというのであるか？」
アルハナーレムが、急に怪訝そうな声で問いかえしてくる。
「だ、だから……」
「だから？」
「そう、ユーリィと……ユーリィとなら、魔法を――」
と、ついに――それを口にした。
その瞬間、チェリンカは目をしばたたく。
「えっ？　ユ、ユーリィ……？」
自分の言ったことに、どきりとした。
いま、とても大事なことを口走った気がする。
もう一度。
「ユーリィ……」
チェリンカは、確かめるように言い直す。
その刹那――世界が割れた。
「ああっ!?」
アルハナーレムの工房やアルハナーレム自身が、まるで壁画だったかのように細かく

罅割れ、そして闇の中に散ったのだ。

気がつくと、チェリンカは闇の中にたたずんでいた。
(チェリンカさんたちはおふたりそろうと、クリスタルの力の生成も、制御も自由自在なのです。ですが——おひとりだけでは、その力に意味をこめることもできなかったのです)
チェリンカの脳裡に、あの少女の声が響く。
「そ、それは……ユーリィのことね?」
思わず口走ってしまった彼の名前をもう一度、チェリンカは声に出してみる。
(はい、そうです……)
その返事とともに、声だけだった少女は姿をあらわした。
闇の中に、人の姿をした光が輝きだす。
それは、王族の法衣をまとったテテオの姿だった。
「……あなただったのね?」
チェリンカが確認するように訊ねると、テテオはにっこりとほほえんだ。

（いちばん大切なものを、とうとう思い出してくださったのですね）

テテオの問いかけに、チェリンカはしっかりうなずく。

「そう。わたしには、ユーリィがいたのよ。それを忘れていたなんて……ずっと足りないものを感じていたはずなのに……」

チェリンカはすこし自分を責めるように言ったあと、

「でも、ありがとう。おかげで思い出せたわ……そのために、この世界は……あなたが見せてくれていたのね？」

（はい。チェリンカさんが回復される過程を築くには、そうするしかありませんでした。そして――いまから、真実の世界をお見せします。これをご覧ください――）

テテオはそう言うと、ぱっと片手をあげた。

すると、瞬時にして闇が解かれる。

チェリンカのまわりは、果てしない天体が広がる世界に入れ代わったのだ。

「ああっ……」

チェリンカは、その広大な光景に息を呑む。

ふたりの立っている空間は、格子状に連結された小さな星が覆っている。

「こ、これは……何!?」

その巨大な数珠つなぎの覆いに圧倒されながら、チェリンカが訊ねる。

テテオは、しずかに答えた。
（ここは、クリスタルレコードです――）
「ク、クリスタルレコード？」
（過去から未来へ向かう、万物の生命の記録が――このクリスタルレコードなのです）
テテオの答えに、チェリンカはさまざまな記録の再生を身に受ける。
それは自身の記録であった。
なぜ、ユーリィと力を使ったのか。
なぜ、負の意志による代償を受けたのか。
それらがつぶさにわかるようになっていく。
（クリスタルから生み出される魔法は、ひとつの未来を選択する行為です。それは魔法を使う人にとって、幸せを得る結果をもたらすのが普通です。クリスタル使いは、その中でも非常に大きな力を持っています。ですが、その力は――この膨大な記録を持つクリスタルレコードの、奥深くへと触れてしまうために、クリスタル使いには『聖なる心』が必要とされています）
「聖なる心……そうだったのね。私達は、それとは異なる『憎悪』を、あのチャスペルに対して抱いたから……」
（はい。それが負の意志としてクリスタルに伝わり、拒絶反応を招いたのです。ですが、

チェリンカさんのユーリィさんを思う気持ちが強くて、拒絶したクリスタルの力を強引に発動させてしまったのです）

「だから、わたしはその代償を受けることになった……」

ドンドンドン！

何者かが、玄関の扉を叩く。

とても危険な存在が、玄関の扉を叩いている。

その扉を開けたら、おそろしいことが待っているのに。

なのに開けてしまった。

「許さない」

ユーリィが言い放つ。

チェリンカは手を引かれ、いっしょに闇に向かおうとした。

その時。

〝――その力を使ってはだめ！〟

警告の声が、チェリンカの脳裡に響いて。
だけど、遅かった。
そのあと——闇の中に突入してしまった。
ふたりで、とても深い闇の中に……。

「あれは……あなたの声だったのね？」
我にかえったチェリンカは顔をあげて、彼女に訊いた。
（はい、そうです……わたしは、あのとき……おふたりを止めようとしました。ですが、それを止めることができず、負の意志による力の発動を招いてしまったのです）
「負の意志による、力の発動……」
チェリンカはつぶやく。
「……わたしはのぞいてはいけない世界に、足を踏み入れてしまったのね……」
チェリンカは、クリスタル使いとしての制約を知った。
クリスタルの力は、悪事に利用できない。
はるか太古——混沌としていた世界に舞い降りた光る神が、悪を切り離して天空へと追放した。それによって地上と空が創られ、そのふたつは、いまも相反しつづけている。

悪の心を、クリスタルは受け容れない。
けっして混じり合わない、光と闇の関係だったのだ。
「もう、二度と同じ過ちをくりかえさない」
（はい。それが元の世界で待っておられる、ユーリィさんを支えていくことにもつながります……）
「ありがとう……わたし、ユーリィのもとに帰ります――」
チェリンカはそう言って、こんどは自分が片手をあげる。
クリスタルレコードに触れたことで、どうすればいいのか――もうわかっていた。
やがて数珠つなぎになっていた小さな星のひとつが、光を分離させる。
ひとつの未来が、光となって放たれたのだ。
その小さな輝きを持つ未来の記録は、チェリンカのほうに旋回しながら近づいてくる。
チェリンカのまわりで、ぐるぐるまわったあと、その小さな光は彼女の胸のあたりにあるペンダントのクリスタルに、すっと同化した。
その瞬間――チェリンカの姿が消えた。

5

そして、チェリンカは目覚める。
見慣れた天井が見えた。
寝室のベッドで眠っていたらしい。とてもしずかな空間だ。誰の気配もしない。
ベッドから身を起こすと、チェリンカは自分の体の異変に気づいた。
眠りつづけていたあいだに、なんと自分は成長していたようだ——。
あわてて身を起こし、窓硝子（まどガラス）に映る自分の顔をのぞきこむ。
さっきまですごしていた世界での幼さとはちがう表情がそこにあった。ちょっと大人びて、女の子らしい……。
そう。あれから『六年』の歳月が経っていたのだ。
（そんな……）
信じられないほどの空白の時間があったことに困惑する。
でも、帰ってきたことのうれしさのほうが大きかった。
（ユーリィ……）
チェリンカは彼の姿を求めて、寝室をあとにする。

居間に入ると暖炉に火は入っていなかった。どうやら、いまは暖かい季節のようだ。
家の中にユーリィの姿はなかったので、チェリンカは日差しを浴びようと玄関の扉を開けてみる。
すると、そこで息を呑んだ。
家の外に、彼の姿があったのだ。
ぴかぴか光る鎧をまとい、父の形見となった剣を懸命に振っている。
「はっ！　やぁ！」
彼の勇ましい声が、集落の広場にするどく響く。
ユーリィのほうも成長しているようだ。背ものびて、顔だちもりりしい。
それが、チェリンカの記憶の中にある幼いユーリィの姿となかなか一致しなくて、声をかけるのをためらってしまう。
やがて彼は気配に気づいたのか、剣の練習をやめた。そしてこちらに振り返る。
「……」
目と目が合う。
彼は何が目の前で起きているのか、すぐには理解できない様子だった。
しばらくお互いに立ち尽くし、声もかけられない状況がつづく。
玄関と表で、ずっと動かずに見つめ合う。

（ユー……リィ……）
「チェリン……カ……？」
やっと言葉を通じ合わせる。
（ユーリィ……ユーリィ……なの？）
「うん、そうだよ……ぼくだよ」
（ずいぶん変わっちゃったね）
「チェリンカもね」
（そう……なの？）
照れたようにチェリンカが、はにかむ。
「チェリンカ、声が？」
（うん、なんか出ないみたい）
すこし残念そうに答えた。まだ回復しきっていないのかもしれない。そのことを伝えようとしたが、
「いい……よ……ぼくは……チェリンカが……帰ってきてくれただけ……で……」
（――ごめんね）
謝ると、ユーリィは首を振った。
「チェリン……カ……おか……っ……おかえ……り……」

（ユーリィ）
チェリンカに笑顔が戻る。
「よか……よかっ……た……。また……名前呼んで……もら……えた……ぅ……ぁ……チェリ……チェリンカ……」
（いいんだよ、ユーリィ）
「う……うぁっ……わあぁぁぁぁぁぁぁっ！」
とうとうユーリィは、その場に泣き崩れた。
鎧をまとい、立派になったユーリィ……。彼はそこに至るまで、どんな苦しみを耐えてきたのだろう……。
チェリンカは、あふれるよろこびをあらわすように言った。
（ただいま……ユーリィ……ただいま……）

6

闇はしだいにうすくなり、絵画のように美しい朝焼けを浮かびあがらせる。
ユーリィとチェリンカのふたりは、陽を浴びてそびえる高峰を見あげた。
夏の季節でも、その峰には雪が残っている。

「ほんとうにいいの？　チェリンカ――」

（うん、いいよ――）

チェリンカは心の中で、ユーリィに答える。

失われていた時間を取り戻すかのように、ふたりはある目的に向かって出発しようとしていた。

双子が、ふたたび旅立つための夜明けでもある。

しかしユーリィは最初、チェリンカを連れて旅に出るかどうか迷っていたらしい。せっかくチェリンカが目覚めてくれたのだから――無理せず、おとなしくひっそりと暮らしていればいいじゃないか。

だけど彼の胸の内にある、ほんとうの心はちがう。

このまま隠れ住んでいても、いずれ見つかってしまう――だから討って出る。たとえ、その過程に困難が待ち受けていても、ふたりなら乗り越えられる。

チェリンカもそう信じていたから――自分も同じ道を歩む決心だと、ユーリィに告げたのだった。

夜明け前の、小さな集落の門。

そこに立つふたりは、まさに生きるための第一歩を踏みだそうとしていた。
最初にめざすは、ヴァール山の頂上。
そこに仲間が閉じこめられていることがわかった以上、助けに行かなければならない。
失われた時間を取り戻すためにも――。
（どうしたの……ユーリィ？）
チェリンカは、まだためらいの様子を見せるユーリィに訊ねた。
新しい鎧をまとったユーリィはうつむく。
やがて目を閉じて、眉間に皺を寄せながら言った。
「やっぱり、チェリンカは家で待ってて。……ぼくひとりでいってくるよ」
（えっ？）
「チェリンカを、危険な目には遭わせられない――」
（ユーリィ……わたしのこと心配してくれてるのね、ありがとう……）
うれしさを感じて、うなずく。
（でも……）
チェリンカも目を閉じて、手のひらを前にかざす。
すると、夜明け前の闇がうすく残る中で――ひとつの光が、彼女の手のひらにあらわれる。チェリンカは目を開けて、光をゆっくり彼の前にさしだした。

（ねぇ、ユーリィ……これを見て）

目を閉じたままうつむいていたユーリィが、顔をあげる。

「ああっ……!?」

（これが、わたしの力……そしてわたしにはどうにもならない力。ユーリィと暮らせる世界に戻ってきてから、気がついたの）

「チェ、チェリンカ……」

（わたしにはわたしの役目がある。力を使うことはできても、それに意味をこめることができない……）

「意味を……」

（そう。だから、わたしの力はあなたが使って。ユーリィ、わたしの力に意味をこめるのはあなたの役目……わたしたちは、そうするように生まれてきたのだから）

「そ、そうするように、生まれてきた……」

（だから信じて、この力を――）

チェリンカは手のひらに浮かべた光を、そっとユーリィの両手にわたす。

「この力を……」

ユーリィはそれを見つめる。

光があふれ、ユーリィの視界がまぶしさでいっぱいになった――。

「うりゃあああぁぁぁ――――っ！」

雪に覆われたヴァール山の頂上で、鎧をまとったユーリィは剣をぬき、目の前の紅いクリスタルに向かって飛びかかっていく。

その紅く輝いたクリスタルのまわりには、邪悪な力によって生み出された炎がゆらめいている。炎のゆらぎは、まるで意志をもっているかのようだ。

そしてクリスタルの中には人影が見えた。おそらく炎を操っているのは、そのかすかに見える人影なのだろう。

（ユーリィ、あぶないっ！）

後方に立つチェリンカが念話で伝える。

ユーリィは自分の背後に迫っていた炎に気づき、すばやく身を翻す。

――ありがとう、チェリンカ。

心の中で、そう返事した。

難を逃れたユーリィは、あらためて駆けよったその紅いクリスタルに一撃を見舞う。

ガキンッ！

たしかな手ごたえが響き、紅いクリスタルの表面に亀裂が走る。
だが、そいつも負けてはいない。
蛇のようにしなる炎の鎖を幾本ものばし、ユーリィを捕らえようとしてくる。
(ユーリィ——よけて!)
ふたたび、チェリンカが念話で叫ぶ。
その瞬間——次の攻撃に移ろうとしていたユーリィに迫る炎の鎖が絶ちきられた。
ユーリィはみずからの力で、炎の攻撃を防いだのだ。
(すごい——すごいよ、ユーリィ!)
チェリンカは驚いていた。
空白の六年間は、ここまでユーリィを成長させていたのか。
そのことをまのあたりにし、チェリンカは身がふるえるほどの感動をおぼえた。
「はっ!」
ユーリィは雪の大地を蹴って、高く舞いあがる。
とどめを刺すつもりだ。
宙で身をひるがえし、紅いクリスタルの真上へと向かう。
「でりゃあああぁぁぁぁ——っ!」
ユーリィは渾身の力で叫んだ。

その手に持つ剣の切っ先を、紅いクリスタルめがけて突きだす。
雪の上で固定されたそいつに、ユーリィの剣を逃れる術はない。
バリリィィィーン！
亀裂が大きく表面に走る。真上から落下するユーリィのくり出した剣によって、紅いクリスタルは真っ二つに裂けていく。
（や、やった――）
チェリンカは、ユーリィの強さに胸を躍らせる。
ユーリィの戦い方は、昔の幼いときとは比べものにならないくらい鮮やかなものだった。
……ユーリィは、すごい努力をしてきたんだ。
いまや、あの父のラトフも超えるような勢いさえある。
そのことに、あらためて感心したとき。
真っ二つに割れた紅いクリスタルの中から、ひとりの男の影があらわれ、がっくりと雪の上に倒れ伏した。
細い体つきに仮面をかぶったその男――ユーリィもチェリンカも、ずっと前からよく知る人物だった。
「うう……うむむ……むむ……」

仮面の中から、うめきが洩れる。
「だいじょうぶ？　長いあいだ……助けに来られなくてごめんね」
着地したユーリィがそばに寄り、その人を抱き起こす。
「ぬぬっ……うぬっ？　そ、その声は……ユーリィであるか？　ど、どうしたのである、もう小さくないのである……？」
「うん、そうだよ――ぼくだよ。あれから、ちょっとだけ大人になったんだよ」
ユーリィが、その人にほほえみかける。
「し、信じられないのである……」
「ふふっ、ぼくだけじゃないんだよ。ほら、あっちを見て――」
その人を抱えたユーリィが、たたずむチェリンカのほうに視線を向ける。
雪の上で身を起こした仮面の人も、こちらを見た。
「うぬっ!?　あ、あれは……もしや？」
チェリンカは見つめられて、照れたようにうつむく。
「わ、我の目にまちがいがなければ……あ、あなたは……」
（ふふっ――）
なつかしさがこみあげる。
（いままで、ごめんね……ずっと待たせて、ごめんね……）

チェリンカの目に光るものがにじみだす。
（遅くなって、ごめんね――アルっ！）
がまんしていたものが、一気にはじける。
チェリンカは、アルハナーレムの胸に飛びこもうと駆けだす。
その笑顔は――幼いときの輝きを取り戻していた。

（下巻につづく）

あとがき

もし自分が暮らしている世界とは別に、もうひとつの世界があったとして、そこでのもうひとりの自分はどんな生き方をしていくのだろうか――。

世界の進む先はさまざまな可能性に枝分かれしていて、どの未来を選んでいるかにも必然がある。

はたしてユーリィとチェリンカは、どのように運命を切り開いていくのだろう――。

今回の『ファイナルファンタジー・クリスタルクロニクル　リング・オブ・フェイト』は、そんな難しい〝重次元的〟なテーマに挑んでいます。

――が。

まずは関係者のみなさまに謝らなくてはなりませぬ。

ごめんなさいっ！

今回、原稿が遅れに遅れて、しかも修正のたびに何度も読んでいただく羽目になった

ことを深く深くお詫びいたしますです。はい、すみませんでした！
みなさまにお礼を書く前に、まず詫びだろ、詫び！（と、僕の魂が叫んでいます）

スクウェア・エニックスの三枝浩行さま、世界観のご指導ありがとうございました。またノベライズ版でのコンセプトの段階からアイデアもいただきまして恐縮であります。とくにゲームを追体験するだけでなく、ゲームでは見られなかった『新たな発見』をノベライズ版では読者に提供していきたいという考え方は新鮮でした。

ノベライズ版を書いていると、ゲームのダイジェスト版になりがちな傾向にあるのは仕方ないことではあります。しかし、原作どおりの展開と、原作にはなかった展開の両方があることで、新たな面白さを導きだすというのは大変意義のあるコンセプトだったと思います。

ああ……それなのに。

僕が原稿を一発で決められず、すみませんでした！

そのために、多くの方にご迷惑をおかけすることになってしまいました。

ほかにも、プロデューサーの前田記代子さま、宣伝部の皆さま、お忙しい中を何度も原稿に目を通してくださり、また会議にも時間を割いてくださって、本当に申し訳ありませんでした。みなさまの温かい笑顔に甘えっぱなしで……いまも反省しきりの日々で

あります。

担当さんも、今回はハラハラドキドキさせてしまい、ごめんなさいでした。

というわけで、下巻こそは心を入れ替えて——といきたいところなのですが、きっとまた同じような状況に陥るのではないだろうかと、ここに予言して、先に謝らせてください。

ええ、私のカンは当たるのよ——って、それはアーチェスの台詞でしたね。すみません、話をそらそうとして。

まっ、あの！……下巻もがんばり……ます。

とにかく〝折れない心〟で、下巻も今回と同じくしぶとく、粘り強く、完成をめざしていきたいと思うのです。

みなさま、どうかよろしくお願いいたします。

そしていつも温かく見守ってくださる、アニメシナリオライター集団ぶらざあのっぽの小山高生師匠、ありがとうございます。師匠が励ましてくださったのが心に沁みました。そう、折れない心ですね。はい、わかっております。折れない心、折れない心……心に念じましたので大丈夫です。これからも不肖の弟子をよろしくご指導くださいませ。

最後になりましたが、このノベライズ版を手にとってくださった方々にもお礼を申し上げます。ありがとうございます。

下巻ではナッシュとの出会いなど、新たな展開が予定されていますので、どうぞ、そちらも楽しんでいただけたらと思っています。

ぜひ、また下巻でもお会いできたらと切に願っていますので、どうかお忘れなく！

早くも下巻で行き詰まり中の、工藤治（くどうおさむ）でした（汗）

■ご意見、ご感想をお寄せください。

ファンレターの宛て先
〒102-8431東京都千代田区三番町6-1
株式会社エンターブレイン ファミ通文庫編集部
工藤 治 先生
イノコ 先生

■ファミ通文庫の最新情報はこちらで。

エンターブレインホームページ
http://www.enterbrain.co.jp/fb/

■本書の内容・不良交換についてのお問い合わせ。

エンターブレイン カスタマーサポート 0570-060-555
(受付時間 土日祝日を除く 12:00~17:00)
メールアドレス：support@ml.enterbrain.co.jp

ファミ通文庫
ファイナルファンタジー・クリスタルクロニクル
リング・オブ・フェイト 僕らの世界 上

二〇〇八年六月一一日 初版発行

著 者 工藤 治
発行人 浜村弘一
編集人 青柳昌行
発行所 株式会社エンターブレイン
〒一〇二-八四三一 東京都千代田区三番町六-一
電話 〇五七〇-〇六〇-五五五(代表)
編 集 ファミ通文庫編集部
担 当 宮地千里
デザイン 伸童舎
写植・製版 株式会社オノ・エーワン
印 刷 凸版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

F6
1-1
783

©2007 SQUARE ENIX CO.,LTD. ALL Rights Reserved. CHARACTER DESIGN:Toshiyuki Itahana
©Osamu Kudo Printed in Japan 2008
ISBN978-4-7577-4237-6

9784757742376

ISBN978-4-7577-4237-6
C0193 ¥640E

1920193006407

定価 本体640円＋税

発行○エンターブレイン

双子のユーリィとチェリンカは、小さな村でお父さんとアルとミースと平和に暮らしていました。ところがある日、チェリンカとユーリィは幽霊を見るようになります。実はその幽霊は……。『ファイナルファンタジー・クリスタルクロニクル リング・オブ・フェイト』のノベライズが上下巻で登場。テテオ王女の魂が見守る双子の物語が、今始まります!!

Famitsu Bunko